

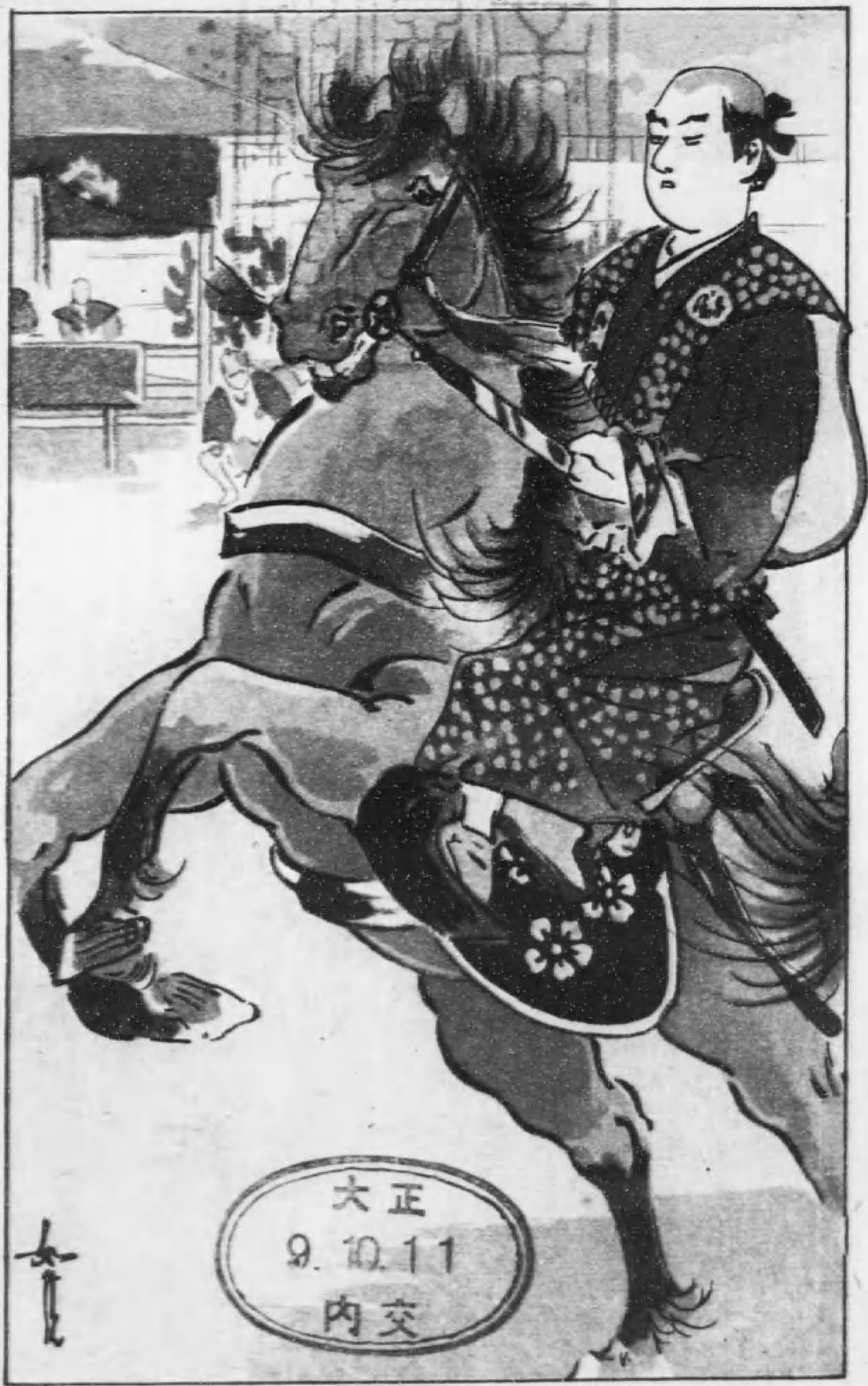
始





納本

115
676



大正
9. 10. 11
内交

女



女
侍

長篇 斑鳩平次 講談

目次

- 第一席 斑鳩平次出生の事、並に下男民藏お芳と戀中の事……………(二)
- 第二席 平次長藏を打懲す事並に巨理長兵衛平兵衛へ強談の事……………(一七)
- 第三席 平次實父布施藤十郎と名乗り合ふ事、並に平次鎮守の森相撲見物の事……………(三三)
- 第四席 平次相撲を投倒す事、並に平造平次大隈嶺へ喧嘩に赴く事……………(四六)
- 第五席 平次人殺しの罪を一身に受け召捕らるゝ事、並に平次旅中盗難にかゝる事……………(六三)
- 第六席 平次地藏堂に追劔を捉え實母の仇を討つ事、並に平次江戸表へ出づる事……………(七九)

第七席 平次駒木根八流の奥儀を窮むる事、並に平次大森主膳の道場を破る事……………(九四)

第八席 平次高田の馬場大難の事、並に大久保彦左衛門山中源内平次へ好意の事……………(一〇九)

第九席 平次安達幡軒齋を打擲の事、並に平次勝田忠左衛門に邂逅の事……………(一二七)

第十席 平次伊達陸奥守へ足輕奉公の事、並に平次早川團平へ劍術指南の事……………(一四二)

第十一席 城戸武助秋山良助等平次の門弟となる事、並に太田七郎左衛門道場へ他流試合に赴く事……………(一五七)

第十二席 團平等七郎右衛門の爲め非道の折檻に逢ふ事、並に平次七郎左衛門を挫き三人を救ひ出す事……………(一七二)

第十三席 仙臺の馬術者荒馬に惱まされる事、並に平次御前に於て駒木根流馬術の奥妙を現はす事……………(一八六)

第十四席 平次八百石に取立てらるゝ事、並に七郎左衛門の悪事を聞出す事……………(二〇一)

第十五席 團平數人の曲者と大奮闘の事、並に七郎左衛門等平次に召捕らるゝ事……………(二一七)

第十六席 七郎左衛門六造と合拷問を願ふ事、並にピン小僧丑松改心駈込み訴への事……………(二三三)

第十七席 七郎左衛門ピン小僧と合拷問の事、並に萩の戸姉弟遙に平次を尋ね來る事……………(二四八)

第十八席 平次團平俠客風となり七郎左衛門召捕出立の事、並に月山兼五郎平次に好意の事……………(二六四)

第十九席 祐天萬次郎平次團平を殺さんとする事、並に平次萬次郎を助けける事……………(二八〇)

第二十席 お勝所夫萬次郎へ意見の事、並に萬次郎改心松田主膳の機密を平次に内通の事……………(二九五)

第二十一席 平次松田主膳の同勢を悉く追斥ける事、並に萬次郎妻子と共に非道の拷問を受ける事……………(三〇八)

第二十二席 團平山形權次を殺す事、並に平次主膳屋敷へ乗込み斬合の事 (三三三)

第二十三席 月山兼五郎密使の事、並に陸奥守御前評定の事 (三三八)

第二十四席 平造越後家に召出される事、並に平造仕置場を荒し萬次郎を救ふ事 (三五四)

第二十五席 伊達小冠者井井直人山形表乗込の事、並に主膳切腹七郎左衛門等再び逐電の事 (三七〇)

第二十六席 平次團平越後家重臣永見大藏に知らるゝ事、並に大藏小栗美作反逆同意を強らるゝ事 (三八五)

第二十七席 平次御指南番勝村傳九郎を討懲す事、並に奥州仙人嶽の山寨に盜賊籠る事 (三九八)

第二十八席 萩の戸仙人嶽の山寨に囚はれとなる事、並に平造山賊退治に仙人嶽へ上る事 (四〇九)

第二十九席 平造誤て石牢へ閉籠められる事、並に平造賊魁大森主膳等を斬り山賊を退治する事 (四二〇)

第三十席 平造萩の戸山中にて八兵衛友房に逢ふ事、並に平造山賊を悉く退治の事 (四二七)

第三十一席 傳九郎等平次暗討仕損じの事、並に美作讒言大藏御暇退散の事 (四六二)

第三十二席 萩の戸美作屋敷へ間者に入込む事、並に互理長兵衛等萩の戸を救ひ出す事 (四六二)

第三十三席 越後中將野狩美作大望露顯の事、並に萩の戸八之丞等仇討本懐平次萩の戸婚姻の事 (四七六)

目

次終



長篇
 海流
 致五
 鳥平
 次

恭

斑鳩平次

斯波南叟講演

(第壹席) 斑鳩平次出生の事、并に下男民藏お芳と戀中の事

今回は、加藤清正公の十勇士の一人、斑鳩平兵衛、一名狸平兵衛の伴斑鳩平次武勇鑑といふ
 顔る面白い御話でございます、これは豊臣秀吉公の寵臣加藤主計頭清正公、彼の朝鮮征伐の
 陣には鬼上官と呼ばれ、遠く異域の國までも勇名を轟かし、忠烈としては大阪大陣の際
 に其名を挙げ、二代秀頼公を補佐して、徳川家康公に忌避せられ、到頭家康公のために毒殺
 に罹り敢なくも命を落し、二代肥後守忠廣公熊本城主となられました、これまた豪者の爲
 にお家断絶と相成りました、併し流石は加藤家だけございまして、勇士も数ある中に至つて
 豪傑の聞えある武勇の家臣が十人ございまして、之れを加藤の十勇士と稱へましたが、何しろ

この十勇士は清正公朝鮮征伐のときから隨從いたし數度の合戦に勇名を轟かしたもので、清
 正公の亡命せられてよりも、二代忠廣公へ仕へ相變らず忠勤を盡くして居りましたが、前申
 す通り、加藤家は到頭断絶に及びましたので、皆夫れ／＼に己が志す方へ四離八散と相成り
 ました、その十勇士の中でも殊に武勇の譽れ高き斑鳩平兵衛、平左衛門と云ふ兄弟が居まし
 た、この平兵衛といふ人は何う云ふ處から籍名を得ましたものか、狸平兵衛と稱へられて居
 ります、この人は至つて忠義の厚い人でございまして、この度主家断絶に相成りました
 たを痛く嘆き悲しみ、何うも今更他家へ仕へるも残念、且また浪人で諸國を遍歴するのも餘り
 面白いことでもないと思得ましたところから、何うかして一生餘命を氣樂に暮して行きたい
 ものだと、夫れよりは勿論家族のある身體ではなし、兄平左衛門は病死いたし、他に足手纏
 ひのないものでございまして、只だ一人飄然と何處を目的と定めなく、流れ／＼と出て参
 りましたは奥州の仙臺を少々距れましたる槻木といふ驛でございまして、平兵衛は圖らずも此
 處で宿役人をいたし、資産最とも豊かなる六兵衛と云ふ人の宅へ厄介と相成りましたが、翌
 日から類りに雨が降り出して、なかく／＼霽れる氣色がございませぬ、そこで餘儀なく滞在
 たして居りましたのが、一ツ縁と相成りましたといふのは、この六兵衛に一人の娘がござい
 ます、今は父一人子一人といふ有様で、一旦養子は貰ひましたけれども、不幸にして不縁と

相成り、當時年齢は二十八歳でございます、名前をお光と申上げますが、鄙には稀な美しい容貌でございますところから、村の若いものが毎夜の品評には、必らずお光の評判をいたして居ると云ふ美人、ところが平兵衛においてもまだ老る年齢でございます、如何なる縁のあつたものか、不圖したことからお光と好い交情に相成りました、初めは父親の目を忍び、村の衆の眼を避けて居りましたが、能くいつてございす通り、阿漕が浦に曳く綱も度重なれば現はれにけり、何時しか父六兵衛の眼にも止まる事になり、一時六兵衛も怪しからぬ事だと怒りました者の、考へて見ますると、お光は相當の養子を迎へねばならぬこと、お光の好いた男とあれば、添はして遣りたいといふのが父親の情でございます、殊に平兵衛の舉動を見ますると却々尋常普通ではございませぬ、夫りやその筈でございます、何しろ加藤十勇士の一人でございますから、六兵衛も大きに悦びまして「ア、考へて見りやア恰と好い夫婦だ、彼の平兵衛といふ人も、これから何處へ行くといふ的もないやうだし、なかなか確乎した人物で、技倆といひ器量とて立派なものだ」と思つたところから、一日のことお光を密かに呼びまして相談を致しましたが、お光においては固より好き合つた交情でございますから、一も二もなく承知を致しました、そこで平兵衛を招いて段々と談話をいたして見ますると、平兵衛もこれから何うといふ目的のあるではなし、殊に一生を氣樂に暮したい

といふのが本心でございますから、これまた大きに悦び「平これ〜は思ひも寄らぬ仰せ、左様ござればお言葉に従ひまして身不肖なる拙者ではござれど、お請をいたすでございます」といふので此處で平兵衛とお光は夫婦に相成りましたが、兎角世は自由ならぬが浮世、満れば缺くる習ひとか申しまして、六兵衛も安心を致しましたところから、張詰し氣も弛み不圖した風邪の心地から到頭病の床に就き間もなく黄泉の客と相成りました、夫婦のものは甚く嘆き悲みましたが、これ丈けは神の力にも及ばぬこと、如何とも致方がございませぬので、泣く〜も野邊の葬送も最と丁寧に、七日七日の回向も充分にいたして暮して居りました、たが、其中にお光は妊娠いたし、十月も難なく経ちまして安々と男の子を産み落しました、そこで男の子であるから名を平造と命け、夫婦が掌中の玉と愛で、蝶よ花よと育て、居りましたが、光陰に關守なく平造早くも七歳の春を迎へることに相なりました、ところが何ういふものか跡へ指して子といふ者が出来ませぬ、これが何時も夫婦寝物語りの材料となり大層残念がつて居りましたが、一日の事平兵衛は何か所用がございまして、雇男の民藏といふ者を連れ、岩沼の驛へ参り何彼と用を済ましての歸り道、時刻も最早黄昏時、人の顔が見えるか見えないかといふ時分、主従はブラ〜と岩沼と槻木の中央まで歸つて参りますると、遙か彼方の地藏堂の邊にア〜といふ女の聲が致しますから、平兵衛は急に立止つて「オイ

民藏「長へい旦那さま……」平「何だか女の聲で、アレーといふぢやないか」民「成程女の助け
 聲でござりまするな」平「アア憫然なものぢや、助けて遣らう」といふので、平兵衛は聲を目
 的に駆付けて見ますと、二人の女が四苦八苦の有様、一人は四十格好、乳母かとも思はる、
 年増女で、肩から大袈裟に斬られ虚空を掴んで打倒れて居ります、いま一人の女は年齢二十
 歳の上を二ツ三ツ、容貌賤しからざる武家風のお嬢さんと見えまして、身装も立派なる美人
 でこれも肘から横に斬られ今や斷末魔の有様、七轉八倒の苦みをいたして居ります 平「アア
 可哀想に……」と驚いて突然側へ寄りながら、婦人を抱起しました 平「確乎なされ、コレ旅
 のお女中……」と呼びましたが最早物言ふ力もござりません、只だ兩の手を合はして點頭い
 たかと思ふと、その儘息は絶えてしまひました 平「アア可哀想……に」と偶爾と向方を見ま
 すると、僅か二間ばかり隔てたる處で、頻りに孩兒がオギア〜と泣いて居る 平「オヤッ孩
 兒が泣いて居るわい、ハ、アこりやア何か盜賊の仕様で、この婦人を斬つたと見える、ア、
 この子供が可哀想だ、オ、泣くな〜」とその孩兒を抱き取りまして、一先づ我家へ歸り早
 速この事を代官勝田仲左衛門の許まで訴へ出ました、そこで代官勝田においては直に現場へ
 來つて檢視に及ばれましたが、何分兩人とも息が絶えて居りますから、何處の者やら他にこ
 れといふ手掛もなく相分りませぬので、兎に角二人の死骸は役所において埋葬を致しました

「そこで子供であるが、何分何處の者か相分らぬによつて貴殿お養ひ下さるか、また代官
 所に引取り相當の手當をいたすでござらうか、何れとも貴公の望みになさるが宜い」といふ
 申し渡し 平「幸ひ私も最う一人欲しいと思ふ折柄でござりますから、私の手許に引取り養ひ
 まするでござりませう」といふのでその子を買ひ受けることに相成りました、さて乳母を雇
 はねばならぬといふ一段になりました、下男の民藏が「長へ旦那様乳母といふと大層でござり
 ます、何も私は用のある身體でもござりませぬ、私が片栗粉でも飲まして育てることに致し
 ませう」平「爾うか、ちや爾うして貰はう」とこれから民藏が片栗粉で養育て居りましたが、
 名前を何と命けたものかと、平兵衛種々思案の末、遂に平次と命けることに致し兄が平造、
 弟が平次と斯う名命けまして兩の手に玉、實子繼子の隔てなく愛育をして居ります、とこ
 が世の諺にもござりまする通り、蛇は寸にして人を呑み、梅檀は嫩葉より香しとやら、この
 平次は普通の子とは違ひまして、四歳の時には力が大層ござりまするし、小理窟の一ツもい
 ふといふ鹽梅、村の人々も舌を巻いて何と恐ろしい子ではないか、彼の平次といふ子供は未
 は何様な者になるであらうと、皆々評判をいたしましたが、果してこの平次が天下に列びな
 い、大豪傑と相成るのでござります、尤も英雄豪傑となる人は、幼少の時から異りまして、
 この平次も四歳の時から云ふことが違つて居ります、殊に子供に似合なぬ剛力者、親平兵衛

は勿論他人も舌を巻いて驚いて居ると云ふ有様、なれども平次は民藏の側に参りますると、甘へるやうにいたして居ります、ところが歳月の経つのは早いもので、平次は年齢九歳と相成りました、民藏は或日のこと、一寸と一枚の着物を纏ひまして平兵衛の前へ出て参り民「エエ旦那さま、一寸と行つて参ります」平「ア、歸つたら能く申して呉れ」民「有難う存じまする何うも旦那さまへ御心配を掛けまして相済みませぬ」平「イヤ定めて其方も心配であらう、實は乃公も尋ねて遣りたいが何分にも役目の事で何や彼やと忙しい身の上、甚だ残念な次第、就ては一日や二日は緩然と介抱するが宜い」民「ハイ、有難う存じまする、では恐れ入りまするが一寸とお暇を戴きます」平「サア、遠慮は要らぬ、早く行つて遣るが宜い、併し民藏其方が行くのを平次が見附けると、また何とか彼とか云ふと困らうから、彼れに見られぬやう早く出て行くが宜い」民「承知致しました」と民藏が今しも出掛けようとするやつを、瞥と眺めた平次でございませす、突然奥から駈附て参り平次「ヤア何所へ行くのぢや、民藏」と云はれた民藏はハツと思ひ民「エツ失策つたわい到頭見附けられたか、エ、坊さま、一寸私は用事がございまして、持處まで行つて参りますので……」平次「用事があつて行くなら、一人で行かないで坊も連れて行つて呉れ」民「ハイ、夫りやア他の用事なら連れて参りますが、實は灸を据ゑるに参りますので、夫れは最う熱いの何のつて、坊様にはお行でにならぬのが宜

しうござります、温和くして待つてお居でなさい、モシお賢しうございませす」平次「ハ、アお前は灸をするに行くので熱からうが、乃公は何も従いて行つたつて、灸をするぢやなし、熱いことはあるまい」民「ウム、ハイこいつア失策つたわい……夫りやアア其様なもので……」平次「何うぢや灸をするに者が熱いと云ふ事はあるまい」民「イヤハヤ何うも驚いた理窟云ひぢや」平次「連れて行つて呉れ、同じ事ぢやアないか、エ、諾と云つて連れて行け、お前が連れて行かぬと云つても、坊は放さんぞ」民藏は大きに困つて居ります、所へ奥から父の平兵衛出て参り平「コリヤ、平次、また無理を云ふ、其様な事を申すものではない、民藏は他の事で行くのは違つて、お父さんが容體が悪いので、介抱に行くのだから、エ、坊は大層惻怛だから、過日書いて遣つた彼の手本、彼本を見てお手習をしなさい」平次「ぢやアお父さん民藏はお父さんが不快に依て参りますの」平「爾うぢや、だから行くのではない」平次「夫れぢやア尙更ら私は行きたくござります」平「フ、ン、何う云ふ譯で……」平次「何う云ふ譯つて、この私を養育て呉れましたのは民藏でありませう」平「ム、爾うぢや」平次「サア然うして見れば、民藏のお父さんが不快いのを、私が見舞はんと云ふ譯には参りませぬ、お父さん其様なものぢやアありませんか」と言はれて驚く父親平兵衛、道理ある言葉にアツと感嘆いたし平「イヤ成程、夫れも爾うぢやコレ民藏」民「ハイ」平「何うも平次が彼様に申すのに

は困つた、何うしたものであらう」民「イヤ旦那さま、私が坊さんを連れて参ることに致しませう」平「爾うか、何うも氣の毒ぢやのう」民「何う仕りました：：サア坊さま参りませう」平次「何様なものぢや、到頭降参をしたらう、此なことなら初めから温順に連れて行けば、耻を搔すに濟んだのぢやに」民「コレ坊さま、貴方は大變理窟を仰しやいますなア、マア何うでも宜しい、参りませう」とこれから平次に着物を着換へさせ、雪駄を穿かせましてチャラ／＼と、平次は民藏と連れ立て参りましたのが、岩沼の入口の三軒茶屋でございます 民「お婆さん先刻はお使を下されて、大きにお世話さまでござりました」民「アレ民藏さんかい、最些つと早くきて呉れば宜いのに：：」民「イヤ何うも主持で、一寸出るにも都合があるから、ツイ遅くなりしました」民「夫りやア爾うでもあらうが、先刻からお芳が出たり這入つたりして、まち兼て居つたのぢや」民「どうも大きに有難う」民「して其處に居る子供は何處の子だい」民「これは御主人の息子さんぢや」民「ハ、ア爾うかね：：だが傳馬船附きでは工合が悪かるなア」民「イヤ其れは承知して居つたぢやが、何分にも行くといつて放して下さらねえから：：」民「だつて何とかして置いて來れば宜いのに」民「ム、：：」と談話をして居るやつを聞きまししたる平次が 平「民藏、乃公を捉まへて傳馬船なんていつて居やがるナ」民「坊ちやん其様に憤るものぢやござりません」平「だつて乃公がお前の後から従いて來たものだから、傳馬船

なんていふのぢやらう」民「マア、其様なものでござります」平「するとお前は親船といふやうなものぢやな」民「申慮ぢやない、其様なことをいふものでござりませせん」平「併し民藏、お前は乃公ところのお父さんから、金子を預つたらう」民「モシ坊ちやん貴方は夫れを御覽になりましたか」平「チャンと見て居たのぢや」民「大變早い眼でござりますな、夫りや爾う一分預つて來ました」平「それぢやその一分の中で何か菓子でも買つても宜からう」民「へいへい、夫りやア宜しうござります」平「其様なら金米糖と、氷砂糖とを買つてお呉れ」民「イヤ承知いたしました、お婆さんお前さん御苦勞だが、坊ちやんが金米糖と氷砂糖を買つて呉れと仰しやるから、一寸と買つて來て呉んナ」民「ハイ買つて來て上げませう」と民藏から一分の金子を貰つて戶外を指して行つて仕舞ひました、此方は民藏が平次を連れ奥の一室へ通りまして暫時休息んで居ります所へ、金米糖と氷砂糖を買つて來ました、平次は其品を貰つて金米糖を食べては氷砂糖を食べて、頻りにムツヤ／＼頬張つて居る折から、表外から歩つて來ましたのが、民藏の情婦お芳といふのでござります、此奴は何うも實に不色な女でござります、何しろまだ年齢が若うござりますし、また民藏といふ情夫に逢ふのでござりますから、白粉をコテ／＼と塗り付けて、その上を櫛の葉で磨いて居るといふ有様、イヤ最う何うも妙な面容でござります、ツカ／＼ツと這入つて來まして、襖をガラリと開けてそれへ這入り込



んだやつを、偶爾と眺めました平次は「アア民藏……」民「へい坊ちゃん何用でござります」平「何でござりますつて、何うも何處へいつても癡狂があるものぢやな」民「モシ御申儀仰やつちやいけません」平「だつて妙な面容ぢやアないか」といつて居るうちに、お芳は民藏の傍へ参りまして、伊達の評定對決宜しくといふやうな、大きな唇を据ゑまして嫣然と笑つて居りまする、平次は妙な顔をして居りましたが平「民藏」民「へい」平「お前はお父さんの身體が悪いから、介抱に行くといつて乃公のお父さんを瞞着して、此處でこの女と出會ひをするのぢやナ」民「モシ坊ちゃん其様なこましましやくれたことを

いふものぢやアありませぬ「平」何うの斯うのと……俺は斯様なことなら、従いて來るのでなかつた」民「坊ちゃん其様な理由ぢやアござりません、實は少し此女に話がござりまするのですが」平「談話があるつて可笑なことをしたら、承知しないぞ」民「阿呆らしい、其様な事をいたすものか、だが宅へ歸つてお父さんに斯様なことを仰しやつたら不可ませぬよ」平「ウム夫りや、云やアせぬけれども……」と平次はまたもや菓子をもシヤ〜喰つて居ります、此方のお芳は民藏の膝へ手を置きまして「芳」民藏さん、マアお前のやうな無情い人はありやしないヨ、私がこれだけ苦勞して戀焦れて居るのに書狀の一本ぐらゐは寄越したつても、何も他人が笑やしないヨ、夫れに書狀も寄越さず餘りぢやないか、眞に私は頃日は夜の目も寝すに心配をして居ますヨ」民「何だつて其様なに心配してゐるのぢや」芳「他ぢやないが、お前さんも知つて居なざる奥州一の俠客で亘理の驛に亘理長兵衛といふ人がありませうがナ」民「ウム〜、成程ある〜」芳「その弟の長藏さんといふ人が、私を捉へてヤア如何の恚ふのと、五月蠅くつき纏ふけれど、お前といふ戀人があるものぢやによつて、よい返事もせず居りました」民「ウム成程……」芳「爾ういふ次第で、私が返事をしないものだから、私みたやうな阿多福でも、長藏さんが到頭家のお父さんに向つて、お前さんの娘を呉れたなら、お前さんに隠居所を建て下婢の一人も附け、爾うして月に幾何かの小遣錢を興るといふものだから、

家のお父さんはその話を眞個に思つてね、私に向つてお前は民藏といふ者から、乃公に小遣
 錢を呉れたこともなし、其様な無情ない情夫を持つよりも、實は亘理長藏さんがお前を嫁に
 欲しい、就いては如斯もして遣らう、斯うもして遣るとの仰せだが、長藏さんの方は金子が
 澤山あるし、何うか乃公を助けると思つて、長藏さんの嫁になつて呉れ、併しそれとも民藏
 の方から、假令充分なことは出来ないにしても、月々相當のことをして呉れりやア何だ、親
 子の情だ、無理に嫌がる方へ生木を割くやうなことはない、かう仰しやりますので：
 『民』ウーン：『』『』で『』お前に相談をするのですが、實はお父さんの借金が澤山あるので、
 私も心配をして居ります：『民』ウム成程：『』『』その借金も五十兩あれば何うなり斯うな
 り濟まさせる、爾うすりやアお父さんも一生懸命に働くと云ひますから、民藏さん何うかその
 五十兩を拵へる工夫は有るまいか、心配といふのはかういふことでござんす』民』ナニ五十兩
 ：『眞個に五十兩か：』『』『』ハア眞實に五十兩ですよ』民』オヤ／＼能く其様な氣樂なことを
 吐して居やがる、お前五十兩といふと大金だせ』と民藏は眼を白黒いたしましたして吃驚して居
 ります、こいつを眺めました斑鳩平次、年齢はまだ九歳の小兒でございすが、前に申上げ
 まする通り、大人も及ばないといふくらいゝの知慧がございすから平』オイ民藏』民』へい何
 でございす』平』何でございすつてお前は大變い心配ぢやな、五十兩と云ふとお前が三年

無代働きをせなけりやなるまい』民』坊ちやん御串談仰しちつちアいけません』と種々談話を
 して居ります處へ、表の方へ歩いて來ましたのが、頭が五分月代に致しまして、正紺の腹掛
 で法華宗の者と見え、梅の木の數珠を肩より斜に懸けて居ります、一寸と胸の邊を見ますと
 と入襟をいたし、長やかなる所の銅輪の入つたる一刀を打帯み、徳利仕立の股引數寄屋の足
 袋に突掛け草履、若い者を五六人引連れて、何さま此處等あたりの俠客と見えまして。『婆
 さん御免なせえヨ』と衝々と這入つて來るを、眺めました茶店の婆さんはベコ／＼お辭儀を
 致しまして『ヤアこれは親分さまで』〇ム、乃公だ』『サア何うかお上りなさいませ』
 〇『イヤ介意つて呉れるな、實は乃公が掛けて來たのは外の事でもねえが、お前の宅へ今
 楓本の民藏といふものが來て居らうがな』『婆』イ、エ、親分其様な民藏といふやうな人は來
 ません』〇『オイ／＼馬鹿なことを云ふな、チャンと若い奴に見附さして出て來たのぢや、愚
 圖々々云ふことアねえ、眞ッ平御免ヨ』と云ふなり衝々と座敷へ上りまして、奥室を目蒐け
 て行かうと致しますから『婆』モシ親分、奥室にはお客様が來てお居でになりますから、何
 うか二階でお飲り下されませ』〇『籠棒奴、汝の宅へ何にも飲み喰ひに來たのぢやねえわい、
 汝の宅のものは焚直したから、鎌だつて中央から折れて居やがらあ、豆腐だからつて角が缺
 けて仕舞つて、缺け豆腐になつて居らあ、汝の物は乃公の口へは這入らねえ、乃公は今も云

ふ通り、民藏に一寸談があるから出て来たんだ」と威張り散らして居りますのは、奥州一の
 侠客といはれて居りまする亘理長兵衛の弟長藏といふ、他人に嫌がられて居るところの悪
 漢でございませう、婆が制めるのも聞かばこそ、街々と奥室へ踏み込みまして襖を手で開ける
 ことか、足でガラ／＼と明けまして入口に突立ちながら、左も悪體らしい目貌で睨んで居
 る、此方は民藏不意に襖をガラツと開けられたものでございませうから、偶然と見ますると例
 の侠客亘理長藏ですから民藏も吃驚して長藏の顔を見ますと、イヤ最う仰山な疵痕で、頬か
 ら額へかけて出刃の傷、短刃、剃刀、剪刀、庖丁の切痕で鋸の目立か、恰と道具屋の看板を
 見たやうな顔をして居りまする、其奴の睨むのでございませうから民藏は悸つと致しまして其
 の儘俯向いて仕舞つた、お芳は此體に突然姿を隠して仕舞ひました、長藏は悠然々々と這入
 り込んで長「オ、御免なせい、大變にお邪魔を致しやしたねえ」民「ハイ何うかお這入りなす
 つて、一服おあがりなさいませ」長「併しお前さんが民藏さんでございやすかい」民「へい民藏
 と申しますのは手前でござりまする」長「爾うでござえやすか、こりやア何うも初めましてお
 目に掛ります、乃公ア姓名をいふやうな者ぢやアござえやせんが、奥州ぢやア些少衆人に何
 んとか斯んとかいはれて居りやす亘理長兵衛の弟で長藏といふ者でござえやす、マア斯様な
 値無ねえ野郎でも、何處の賭場へ参りまして野暮にならぬ者でござえやして、人斬りの名

人喧嘩太郎と衆人が云つて呉れるといふ人間でござえやす、エへ、」イヤ最うその冷笑ひ
 かたといふものが、何とも斯とも譬へやうのない厭な笑ひやうでございませう。

(第貳席) 平次長藏を打懲す事、并に亘理長兵衛平兵衛へ強談の事

民藏はブル／＼慄ひ出して民「へい左様でござりまするか」長「其處で何うか此上ながら、お見
 知り置かれやして、斯ういふ悪太郎でございやすが、宜しうお願ひ申しやす」民「へいどう致
 しまして、私より宜しうお願ひ申し上げます」長「へ、併しねえ、お前さんと口端で昵懇きにな
 つたつて、何うも面白うござえやせん……オイ若い奴、汝店頭へ行つて酒肴を持って来い」
 △「へい承知いたしやした」と一人の若い者は店へ出て行つた、此方は民藏顔色を青くしまし
 て兩手を突き、頭を疊に摺附けまして民「エ、親分さま、只今の仰せは誠に有難う存じまする
 が、私はお酒といつたら皆目飲かせぬので」長「へ左様なことは云はなくつても宜うが
 す」民「全く私は飲かせぬので……」といつて居る所へ若い奴が銚子の缺けたやつを持つ
 て、何か肴を皿に容れて出て参りました△「へ親分持つて参りやした」長「オ、御苦勞だつ
 た……サア民藏さん一ツお飲りなせえ」民「全く只今申し上げます通り、私は御酒は至つて不
 調法でございませうから」長「マア宜いぢやございませぬか、何しろお前さんと昵懇のために、一

杯飲むのでござえやすから、假令お前さんが酒を飲まぬにしたところで、一口ぐらゐは飲んで下さつても宜いちやござえやせんか」といつて居る、其の傍から乾分の僣輩は△「コウ勿體ねえせ、宅の親分が酒を一杯與れて遣ると仰しやるのに、不調法なんて洒落くさいことを吐しやがんな、汝の方から、勿體ない忝けなうござえやすといつて、頂戴するのが至當だ、それに酒が飲けねえなんて親分：親分」長「何だい」△「何だいつて、酒が飲ねえといふ口を引裂いてでもして酒を流し込んで如何でげす」長「コウ、何を吐しやアがる、汝等は何ぞといふと人を打つ斬るのと吐しやアがるが、何うも困つたものぢやねえか、エ、民藏さん何うも斯ういふ僣輩ばかりが參つて居りやすので、何うかお氣に障らないやうに、エへ、へ、例の氣色の悪い笑ひかたをして居ります、民藏は心配しながら長「へいそれぢやア眞の證しばかり、一ツ頂戴を致しますでござりませう」と兩方の手を出しまして酒盃を取りに行かうとするやつを、亘理長藏は盃を右の手の親指にて居尻を持つて、食指に力を入れて向方へ出して居ります、そいつを民藏は取らうとする機會に、長藏の食指でヒョイツと自分の方へ捏ねましたから、おのれの膝へ指して打突かりました長「オヤツ、ヤイ汝は盃を受取るといつて、乃公に盃を投附けたナ」長「め、め、滅相な、何う仕つりまして私が：」長「イヤ爾うぢやねえ、乃公に投げ附けたに相違ねえ、全體何の遺恨があつて斯ういふ事を

しやアがるのだ：ヤイ若え奴等、汝等一同は親分が斯ういふ事をせられて黙つて居るのかい」といはれて乾兒の奴輩は「オ、宜しうござえやす、何うもお前さんが仰しやらないでも、斯ういふことを親分に仕向けられちやア乃公等は黙つて居られるものぢやござえやせん、ヤイ民藏とやら座敷で喧嘩をしちやア此處の宅の迷惑になるから戶外へ出ろ、勝負をして遣る」といひながら表へ指して出やうとする奴を、民藏は袖を引留めまして長「アアモシお若い衆、何うかお助け下さりませ、私は其様な失禮なことをした覺えはござりません、何うか斯の通り謝罪つて居りますから」と民藏におさましては、



何分先方が悪漢のことでございますから、大層心配を致しまして、涙を溢しながら頬に助けを乞うて居りまする、こいつを眺めた斑鳩平次が平「ハ、酷いことをしやアがる奴だナ：」と何か思案を致したものと見えまして、今まで喰つて居つたところの金米糖と氷砂糖とを紙に包んでバツと懐裡に入れたその早さ、衝いと出て今しも長藏の乾兒輩が民藏の手を捕つて引立てやうとする、また民藏は出まいと焦慮つて居る傍へ参りましたる平次は、先方の油断を見澄し乾兒が民藏の袖を捉へて居りまする、その腕へワツと噛附きました、何しろ平次が一生懸命に噛み着いたものでございますから、乾兒の奴吃驚いたしまして△「痛い：：痛いわい」といひながら捕へて居る手を放して仕舞ひました、すると平次は民藏を隔てながら平「ヤイコリヤ何をしやがる、何をさらすのだ、コリヤ亘理長兵衛の弟長藏とかいふ奴能く聴け、素性の悪い腫物のやうに根を持つてお芳の色香に迷ひ、自分の自由にならぬところから、民藏を困らそうと思つて居るのぢやな、サア擲らうと思ふなら擲つて見る、コリヤ俠客といふものはナ其様な者とは違ふわい、親分とか何とか云つて居るが何が親分だ、大體俠客といふものはナ、弱きを扶け強きを挫き他人の難儀を外所に見ぬのが俠客の道ぢやアないか、夫れに汝等ア博奕さへ打てば俠客と思つて居るが、夫んなものは俠客ぢやアない、破落漢ぢやわい」と小兒に似氣なき言葉を吐くものでございますから、長藏は癩に觸つたか

長「何だこの小童奴、乃公を能う破落漢といつたナ」平「云つたら何うした、また貴様等は破落漢ぢやアないか、貴様が破落漢の因縁を知らなきや乃公が聞かして遣るが、今も云ふ通り弱きを扶け強きを挫くのが俠客だ、夫れに弱點に附込む風の神、乃公のところの民藏が、如彼やつて謝詫つて居るものだから、その弱點に込附みやアがつて：：サア民藏の身體に手を懸けて見る許しはせぬぞ、馬鹿野郎奴」といふかと思ふと側にございまするところの、例の缺けた徳利を逆手に持ちまして、長藏の横面を目蒐けてポカーリ打擲りました、此奴は何しろ小兒のこと、思つて油断をして居るものでございますから、何うも充分に頬から眉間へ掛けて命中りました、若い奴は吃驚致しまして「オヤツ：：親分を酷い目に逢しやアがつたナ、この小童奴：：」と一同平次を目蒐けて打つて掛らうとするやつを、驀然體を轉した斑鳩平次、突然一室へ飛込みまして、床の間に置いてあつた真鍮蛇卷の燭臺を兩方の手に引握りました、何しろ年齢は九歳でございすけれども、持つて生まれた怪力者でございますから、容易に振り上げまして平「サア何奴も此奴も對手になつて遣るから出て来いッ」と云ふなり二ツの蛇卷の燭臺を、リウ／＼と振つて飛んで來るといふ騒ぎに、長藏の若い奴輩は肩を打たれ、頭部を擲られるといふ有様、一同閉口いたしましたして皆「ヤアこいつは敵はねい、小兒と思つたら酷い奴だ：：親分此方へお來なせえ」と云つて、眉間を押へて倒れて居る所の長藏を

肩に引擔ぎながら、表へドン／＼飛び出して逃げて仕舞ひました、此方は民藏これを眺めま
して民「ア、坊ちゃん大變いことをして下さいましたな、私を助けやうと思つて爲て下さい
ましたのでござりませうが、ア……ア何うも大變なことが出来ました、彼人は奥州一の俠客
巨理長兵衛といふ者の弟で、長藏といふ悪漢でござりますから、何の様な事をするかも知れ
ません、何うも困つたことになりました」と大層心配をして居りまする」平次はニコ／＼笑
ひながら平「民藏心配することはない、彼様な奴が何うするものか」民「マア驚いたのは貴方
の膽力、併し斯うして居りますると如彼云ふ奴でござりますから、味方を集めて復讐に来て
は大變でござりますから、サア方此へお來でなさいませ」と民藏は平次を脊に負ひまして、
心配しながら主人平兵衛の宅を指して戻つて参りました民「へい旦那さま只今歸つて参りま
した」平「オ、民藏か、大變い早かつたナ、如何だお父さんの鹽梅は宜しいかな」民「へい有難
う存じます、ナーに私が歸つて見ましたら、別に身體が悪いといふのではござりません、何
しろ一遍顔が見たいと云ふところからして、彼様なことを申して参りましたので、老父も實
に旦那さまに濟まない」と申して居りました「平」ア、爾うか、身體が悪いので無け
りや結構だ、實は乃公も心配をして居つたところだ、併し親といふものは子の顔を見たいの
は誰しも同じこと、ナニ濟むも濟まないもある者ぢやない、だが腹が空いて居らうから御飯

を喰て、今夜は緩くりと早う寝るが宜い」民「へい何うも有難う存じまする、別に私は大層物
を喰て來ましたで腹が空いては居りませぬ……坊ちゃん貴方は如何でござります」平「俺は金
米糖や、氷砂糖を喰べたので、最う他の物は欲くない」民「ぢやアお寝みなされませるか」平「ウ
ム寝やう」民「夫ぢやア私と一緒に臥みませう……旦那様、貴方もお寝みになりましたは如何
でござります」平「兵」ム、俺も寝ることにしやう、平次汝も民藏と温和しくして寝るのだヨ」民
「イエ坊さまは大層お賢うござりますから、其様な御心配には及びませぬ、左様なら旦那さま
お寝みなされませ」と民藏は平次の手を引張つて臥戸へ行つて寝みました、市中では夜半ご
ろまでは人通りもござりますけれども、槻木の村落でござりますから最早點燈ごろとなりま
すると、世間は寂寥として居りまする、民藏は平次と共に臥戸に這入りまして昏々として居
りまする折柄、戸外の方でバタ／＼ツといふ人の足音が致したと思ふと、田舎には仰山
な犬が居りますから、この足音でワンワンと頻りに吠え立てる、民藏は此聲を聞きまして、
疑と様子を考へて居りましたが民「ハテナ、モシ坊ちゃん……」起されて平次は紅葉のやう
な手で眼をこすりながら、パツチリ眼を開けまして平「ウム何だ」民「何うやら人が來ました
せ……夫れ彼の聲をお聴きなされませ、大分多勢の人聲らしうござりまする」平「ウン／＼人
が來たやうだ、民藏、彼奴等は今日擲つて遣つた長藏の奴輩が復讐に出て來たのであらう」

民「サア何うも大變いことになりましたなア、何うか事件が大業にならんけりやア宜しうござりますが」と民藏におきましては頻りに心配を致して居ります、此方は平次年齢は九歳でございませうけれども豪い膽力で平「ナーニ心配することはない、此世に起つた事は、この世で納まらない事はない」民「サア、貴方のやうに申してをれば宜しうございませうが、なか／＼彼奴等は奥州一の俠客といふのでございませうから」と兩人が頻りに談話を致して居ります、所へ門戸をドン／＼／＼○「エイ御免、モシ御免なせえ」と案内を乞ひながら表の戸をドンドン／＼と叩いて居ります、この音を聞きまして主人の平兵衛は、寢衣姿のまま、手燭を片手に出て参りまして平「ハイ／＼今開けます、エー何誰さまでござります」○「ヘー一寸お開けなすつて下さい、何うも外方から話は出来ませぬから」平兵「ハイ只今開けます」平兵衛は晝間の出来事を何にも存じませぬから、戸をガラ／＼ツと開けますと○「エ、平兵衛さんといふのは御當家でござりまするか」平次「ハイ平兵衛といふのは、即ち私でござります」と外方を眺めますと這は開も如何に荒くれ男が十人ばかり、向ふ鉢巻繩褌、脚絆草鞋の身輕の装扮、各自に長やかなる一刀横たへながら佇立して居りますから平「ヤッこれは」と一時は驚きましたが、斯様な者の五人十人來た所で吃驚する人ではございませぬ、以前は加藤十勇士の一人狸平兵衛とまで綽名を取つた人でございませぬ、清正公に随従いたし朝鮮征伐に數度の勳功

を現し、人の五十人や百人は斬つた人でございませうが、今は最早武士道を捨て世を氣樂に渡らんがために百姓になつて居るのでございませう、すると外戸に居りましたる所の亘理長兵衛、乾兒を十人ばかり従へまして何か戸板に人を載せてズツと内方へ這入りました平「是りやア貴方がたは」長「ヤア御不審は御道理でございませうが、平兵衛さん御免なさいヨ、乃公ア亘理長兵衛といつて些少ア衆人に知られて、顔役とか親分とか言はれてる者でございませう、一寸お前さんに御覽に入れ



持つて来たやつを見ますと、此人は誰れでもございませぬ、即ち長兵衛の弟長藏でございませぬ、彼の平次に爛徳利を持つて割られた疵を、白木綿で捲きまして、血の着いたやつを故意と拭かずに顔面を血だらけにいたし、餘り痛くもないやつをウム／＼と呻いて居ります、これを眺めた平兵衛は不審の面持、平兵衛「モシ長兵衛親分とやら、これは全體如何いたしたの」長「ナニ如何致した、マア／＼緩り話を致しやせうヨ、實はこの戸板に載せてあるのは乃公の弟長藏といふ野郎でござえやす、今日岩沼の三軒茶屋で、お前さん所の息子の平次とかいふ人に此様に擲られて傷を負はされたのでござえやす」平兵衛「エツ……」長「イヤサ其様なに吃驚することアねエ、だが身體髪膚父母の賜もの、何うも男子の顔が立ちやせん、今も醫師に聞いて見ると、何うも生命が覺束ないといふ言葉でございやすので、到底助からない生命ならば、生中斯うして苦痛を見せるよりも、お前さん所の息子さんに寧ろのこと息の根を止めて貰はうと思つて實ア出て來やしたのでござえやす、濟まねえが息子さんの手に掛けて息の根を絶めて貰ひやしよう、爾うしてその後で息子さんの平次とかいふ者を、一寸大隈嶺まで借りて行きたいのでございませぬ」と吹き立てた、これを聞いた平兵衛は大層驚きまして、平兵衛「マア親分一寸待つて下され只今御話を承はりました初めに承知を致しました……しかし見れば大層立派な弟御さん、夫れに私の件といふのはまだ十歳に満たぬ小供でございまして

斯ういふ亂暴のことをするとは思ひませぬ、實は今日民藏といふ者に連れさして、彼の親許へ遣りましたのでございませぬ、何故に其様な所へ行つたものでござりまするか、イヤ何うも誠に濟まぬことで、何うか御容赦をして下されませ、就きましては御養生の入費萬端は何程要りませうとも私の方から辨償を致しますから……」長「平兵衛さんとやら、えらい可笑なことを云ひなされるナ、ちやア、何でげすかえ藥代をお前さんが辨償するといふのだな……」平兵衛「全く爾いふ理由では……」長「イヤサお前さんは爾うだらう、金子で面を打るといふのか、こりやア面白い、奥州一の俠客巨理長兵衛ちや、金子で面を打たれて見ませうかい、サア愈々金子を出すのちやな、金子を出すよと云やア何うかその金高を聞かして貰ひたいや」平兵衛「別に金子で面を打る譯ではございませぬが、養生をなさるのに藥價が幾何要りませうとも、私の方で辨償しますると云ふのでござります」長「夫りやア分つてるが、全體幾何出してお呉んなさるのだ」平兵衛「幾何と云はれますると、私は迷惑を致します」長「ハ、爾うか、ちや乃公の方からその高を云はう」平兵衛「爾して戴きますれば結構でござります」長「ヨシちやア乃公の方から云ふことにしやう、だが吃驚しちやア不可ねえ、多額ちやねえ大剩けにして一箱出して貰ひたい」平兵衛「一箱とは……」長「一箱たアたつた千兩だヨ、一兩小判が千枚、十兩大判なら百枚でげすヨ」平兵衛「エーッ……あの千兩……」長「爾うだ、何も吃驚することはねえ、お

前が金子で面を打るのなら、賈造小判ちやア不可ねえせ、而かも天下通用の山吹色の小判千兩、夫れが嫌なら平次といふ息子を出さッせい、乃公が大隈磔でこの弟の敵を討つて遣るか、サア一ツ二ツの返答を早く聞かしてお呉んなせい』平兵衛ハ、』長』と、何うするんだい』と尻を捲つて座り込み、頻に談判を致して居りまする、これを臥房のうちで聞いて居りましたは長男の平造、平造『ハテナこれは可怪ぬことだ、ヨシ。』といふなり起上りましたが、何しろ親の平兵衛は剣道は東軍流の達人で、その奥義を教へて貰つた充分の技倆でございますので、起上るが早いか床間に裝飾つてございませうとこの父平兵衛が其の昔使ひ馴らした一刀、それを取るが早いかツカ〜と玄關を指して出て参り、軍刀の柄に片手を掛ける平造『ヤア夫れなる所の巨理長兵衛とかいふ奴能く承はれ、乃公は平兵衛の長男平造といふものである、聞けば舍弟平次が些少なる疵を負はしたといふを楯に、一千兩と云ふ大金を貪らんとは云はうやうない悪漢無頼の奴、以後の懲戒めに汝が舍弟長藏の息の根を絶め、拙者が其方の希望み通り、大隈磔に出張つて遣はすから、サア弟長藏とかいふ奴を此所へ出せ、拙者が一刀の下に息の根を止めて遣はすぞ』と兩眼クワツと睨廻すやつを眺めました父親の平兵衛は平兵衛『コリヤ〜平造、何を云ふのちや、左様なことを申すものではない、全體彼の平次が悪い事をしたから斯うしてお出でになつて居るのちやぞ、控へて居るが宜い、長

兵衛親分、何分小供の事でござりまするか、何うかお許容し下されませ』と流石に子を思ふ親心で頻りに謝罪つて居りまする、ところが此方の長兵衛は益々憤怒を催しまして長『な、何だ如何すると云ふのだ』と力味かへつて居りまする、平次は別室で此の一條を聞いて居りましたが、何思つたかツカ〜と飛び出さうと致しますから、民藏は慌て、袖を引留めまして民『モシ坊ちゃん、氣相變へて何處へ御出でなされます』平次『何處と云つて巨理長兵衛とかいふ奴を打擲つて遣るのちや』民『め、め、滅相な、貴息のやうな小さいお方が、何うして先方に勝たれませう、悪いことは申しません、何うかお



止まり下されませ」平次「ナニ心配することはない、大隈嶺へ出て勝負をして遣るんだ」と側面に有つたところの細帯を採つて早速に袴にいたし、床の間に置いてある檜の木の用心棒を片手に引下げ、ツカ／＼と戸外へ飛び出し、平次「何が如何するんだ」と、突然に例の檜の木の棒を持って、長兵衛の腰の番を折れよとばかり、力を籠めて擲りましたから堪りませうや、長兵衛は顔を擧めて長「アッ痛い」如何しやがるのだ、酷いことをしやがる」と眼を白黒して腰の番を撫つて居ります、父の平兵衛は不意の出来事に吃驚して平兵「コレ」平次、汝は何をするんだ」平兵「お父さん放棄きなさいませ、私が今此奴の息の根を止めて遣るのでございます」といひながら平次は無茶苦茶に、例の棒を持つて多勢の乾兒の中へ飛込みながら、前後左右に打擲つて居ります、此方は乾兒の奴輩が「イヤア酷い小僧が出て来やアがつたぞ、ソレツ兄弟殺つて仕舞へ」といふので、平次一人を取圍んでワツワツといつて居りまするところへ、門戸を開けてツカ／＼と這入つて来ましたは一人の武士、金銀鍍めたる大小流儀差しにいたして立派な扮装、一人の下男を従へて居ります、一同の立騒ぐのを制して町寧に會釋して武「エ、卒爾ながら、貴方が當家の御主人でござりまするか」平「はい如何にも、私は平兵衛でござりまする」武「左様でござるか、御機嫌の體を拜し恐悦至極に存じます、拙者は仙臺家の家臣でござつて、御馬廻役を勤め千二百石を頂戴いたす布施藤十郎と

申す者でござる、何うか面體お見知り置かれました、宜しくお願い申上げまする」平兵「是は是は然るお歴々のお侍が、何故あつて私如き者をお訪ね下さいましたか」侍「イヤ御不審は御道理、耻を申さねば理が聞えぬの道理、耻しながら拙者が申する處一通りお聞き下さい、實は仙臺家のお臺所、賄方を勤めまする、磯谷勇と申す者がござる、この磯谷の娘、琴と申す者、拙者若氣の至り内縁を結びましたところが、圖らずも琴におきましては懐妊と相成りまして、やむを得ず親に打明け公然夫婦の盃をいたす準備にまで運びましたるところ拙者君公の仰せにより、武術修業のために諸國を漫遊すること、相成り、未だ表向きに盃を致さざる前に、仙臺の地を出立に及びまして諸國修業に立出で申したところ、實は僅かの間と思ひの外、知らずく数年を経過いたしましたやうな次第でござる、然るに勇の娘におきましては、その後男子を挙げましたが、其子が餘り夜泣きを致しまする故、岩沼の夜泣き地藏尊に祈願を籠むれば夜泣きが癒るといふ噂を聞きまして、乳母諸共に參詣を致しましたが、其儘姿が相分りませぬので、父親勇は娘が歸宅つて参りませぬから、扱は若氣の至りに拙者の跡を慕うて行つたのであらうと、其儘に致しておきました處へ、拙者が立歸り、先方へ妻子の身上を伺ひに出ますると、勇殿は、娘は貴方の跡を慕うて行つて仕舞ひましたが、如何いたしたかといふ挨拶、吃驚致しまして、其々にその後の様子を探つて見ますると、何ぞ圖ら

ん琴及び乳母諸共何者かのために斬殺されましたといふことを聞きましたので、早速代官の方へ出まして其時の模様を承まはり、一人の子供は榎本の瑞樹平兵衛といふ人が引取り世話せられ、只今では平次といふ名前を付け、壯健で育つて居るといふことを承まはり、ア、親はなくとも子は育つ、何卒骨肉を分けたる實子に逢たいものと、さても斯く推参仕つりし次第、何うか一目逢はして下さる譯には参りますまいか」と思ひもよらぬ人に訪ねられ、平兵衛は大層悦びまして奥座敷へ伴ひ入れました。

(第参席) 平次實父布施藤十郎と名乗り合ふ事、并に平次鎮守の森相撲見物の事

平兵衛は藤十郎を奥座敷へ伴ひまして平兵衛「これは不思議な御對面……左様なことゝは存じませず、實は私も一人の伴がござりますが、便りないところから、彼を買ひ受けて養育て、居りまするやうなことで」藤十郎「イヤ實に何うも有難いことで、何とお禮を申して宜いやら千萬忝なう存じます、就いては無理なお願ひかは存じませぬが、貴方さまは實子の平造さまとかいふ、男子が御一人あるといふ只今の仰せ、實は私のためにはその子が長男でござります母は非業の及に罹つて敢ない最後を遂げしたため、平次に於ては母の顔も存せず、また父の顔

も知らないといふ様な次第、私が彼を買ひ受けまして、千二百石の世帯に致したき念願、何うか平次をお渡し下さるやうに、願ひたう存じまする、勿論今日まで養育て戴きましたる、彼の飯料は私の方から辨償を仕つりまするあひだ、お聞き容を下さる譯には参りますまいか近頃誠に御無理なお願ひではござれども、何うか宜しくお願ひ申し上げます」と面に誠實を現はしまして兩眼を濕しながら申します藤十郎の言葉を、疑と聞いて居りましたる瑞樹平兵衛、平「ヤア左様でござるか、イヤ承知仕りました、流石は争はれぬ親子の血筋、芋種は盗まれるが、子種は盗まれぬとか申しまして、何うも酷く貴方さまに似て居ります……コリヤ平次」と呼びますと、平次は長兵衛の方を放つて置いて座敷へ上つて参り平「お父さま何御用でござります」平兵衛「實は汝に云はねばならぬ事がある、と云ふのは外でもない、汝は此俺を實の父親と思つて居つたであらうが眞實お前は夜泣きの地獄堂の前でお母さんと乳母の兩人が殺されて居つた、その傍で泣いて居たから、不憫に思つて乃公の所へ連れ歸り、平次と名前を命けて養育て居つたのである、しかるに今日聞らすも汝の實のお父さんがお來でになつての物語り、只今汝も聞いたであらうが、汝のお父さんといふのは仙臺家に於いて千二百石の武士ぢや、依つて汝を實の父親布施藤十郎殿に歸すから、親に孝行をしなければならぬぞよ、宜いか分つたか、サアお父さんの所へ行つて親子の對面をするが宜い」と云は

れて平次はたゞモジ／＼と致して居りまする、平兵衛は此體を眺めまして平「コリヤ早く行つて對面をするが宜からふ」と促がされ、平次におきましては、心の内で大きに吃驚いたしさては此處にお出でなさる武士が眞個のお父さんであつたか、アア知らなんだわいと、俄かに棒を脱しビタリ坐りまして兩の手を突き平「モシお父さん、其様なら私は貴父の眞實の子でござりませぬか、どうも永らくの間私は貴方を眞實の父上と思ひまして無理ばかり申し上げましたが、夫れをお厭ひもなく我子繼子の隔てなく、今日まで私をお育て下されましたる御鴻恩、マア勿體なうござります、何うかお許容し下されませ、私は一寸考へることがござりますから、彼の武士に一言申したうござりまするが、差支ござりませぬか」平兵衛「あ、構ふことはない父子の間柄ぢや、名乗り掛けまするやうに……」平兵衛「イエ私は彼の侍を實の親とは能う云ひませぬ」平兵衛「な、何と云ふ」と怪訝つて居りまするうちに、平次は衝々と布施藤十郎の前に出まして、平「モシお侍、お前は能く其様なことをいつて來たな、よく物の道理を考へて見なさい、親の道を端さずして八年も九年も放つて置き、今漸う牛にも馬にも踏まれぬやうになつて、いろは四十八文字まで教へて貰ひ、我名前だけでも漸う書けるやうになつて居るのはこれ何人のお蔭と思つて居なさる、夫れに今となつて戻して呉れ、飯代を出すなぞと其様な金子を貰はいでもナ、此處の宅には金子は仰山有るのぢや、乃公が斯様に

大きくなつたから貰ひに來たのか、萬一乃公が死んで居つたら、其様親であつたなら豈夫引取りには來やしまい、そんなお父さんが世界に有るか、生みの親より養育ての親と云ふことがあるわい、能くマア呉れなんて出て來たな、サア親でもなけりやア子でもないから、その積りで早うお歸り、去んで呉れ」と唇端では立派にいひますが、その實兩手を探つて名乗り合ひたいのは山々でござりまする、併し浮世の義理といふものは、恐ろしいものでござりまして、今此處で眞實の親子といはれ、互に親しく致しましたなれば、平兵衛さんに對して濟みませぬと、なか／＼伶俐な小兒でござりまするから、腹のうちでは熱湯を呑む思ひをしなからも、斯く口荒い事を申しましたので、面で泣かずに腹で泣いて居りまする、これを聞きましたる布施藤十郎は、堪へし涙をホロリ溢しながら、平次の兩手を握り締め「ア、拙者が悪かつた、ゆるして呉れよ、成程汝が申す通り、負うた子に教へられて淺瀬を渡る世の譬父は親子の愛情で、其方が無事で居るとの事を聞いた時の嬉しさ、逢ひたい見たいと思ふ一心の、浮世の義理は思はずして、武士にあるまじき言葉を吐いたのは拙者が悪い、イヤ過失だ、堪忍して呉れ、汝が歸らぬとあれば如何にも連れて歸らぬ、平兵衛との御恩を思ひ是孝子になりたいといふことであれば、改めて拙者が貰つて戴くから……」と、後は何事もいひもせず、疑と平次の顔を打曉めて、ホロリ／＼と涙を溢して居りまする、平次も同じ思

ひ、斯う申すのも浮世の義理と思し召し、何うか容許し下さいませと、心のうちで詫を致しながら平「爾ういつて呉れると物が分つて居る、お父さん」平兵「何ちや」平「何うぞこのお侍がいふ通りでござりますから、改めて貴方に貰うてもらひます、何うぞこれまで通り眞實の子ぢやと思つて下さりませ」平兵「ウム……」平「何うかお父さん、貴方が眞實の子にするのが嫌であれば、丁稚でも宜しうござります、御當家の庭にでも寝かして貰ひますれば、私は有難うござります」とハラ／＼と涙を溢して頻に願つて居ります、布施藤十郎は涙の顔を振上げながら藤「平次、能く申した天晴れである、藤十郎は恐入つたぞよ……」平兵衛との、只今倅から願ひました通り、私よりも改ためて貴方に貰つて戴きますから、何うかこれまで通りお育てを願ひます」平兵「ちやと申して」藤「イヤ／＼爾うではござりませぬ、實は私には諸國修行中、内縁とは申しながら藤太郎といふ一人の子供が出来ました、此兒は平次とは腹違ひでござりますが、全く私の血統を継承て居りますから、この者に布施の家を継がしまするによつて、御安心下されませぬやうに」と挨拶をして持たせた革文庫を取寄せまして、その中より金子三百兩を取り出し藤「サア平次、學問剣道を勉強するに就いては必らず金が先立つ、御當家にはお差支へはあるまいが其方に遣はすから受取り置くが宜い」平「有難うござります、お父さん三百兩の金子を頂戴いたしました」平兵「ア、何うも有難う

ござります、斯ういふことをせられては濟ぬことだ、コレ平次夫れではその金子を貰つて、其方の手許に納めて置くが宜いぞ」藤「イヤ／＼小兒に大金を持たしますのは、彼れの爲めにも宜しうござりませぬ、甚だお手数でもござりますが、何うか貴方の御手許へ、お預りを願ひたう存じます」平兵「左様ならば、私が預つて置ませう」藤「何うか左様なことにお願ひ申しまする、併し斯う見受けまするところが、何だか御混雜の様子でござるが、全體如何いふことでござります」と、尋ねられて斑鳩平兵衛、トンと返事に窮したるが平兵「ナニ御心配下さる事でもござりませぬ、眞の些細なることで」藤「ではござらうなれども何だか非常の扮装を致して居る様子、番事ではござるまい、如何なる仔細かは存じませぬが、拙者の子を戴いて貰へば、此後は免れぬ親類の間柄、遠慮なく何うか仰せ下されたい」平兵「イヤ爾うまで仰しやつて下さるものを、お話いたさぬも何とやら、實は而々斯様々々の次第でござります」と、前條の一伍一什を物語りますると、布施藤十郎はこれを聞くなりナニ亘理長兵衛長藏の兄弟の奴が、無法なことを申して参つたのでござるか」平兵「如何にも左様でござります」藤「これは妙でござる、拙者の倅、イヤ貴方に差上げましたところの平次から事が起りまして、金千兩を食るとは、實に不埒な奴、その亘理長兵衛長藏といふ兄弟の者に就て、一條の物語があります、平兵衛殿お聴き下され、彼等は以前拙者が使つて居つた者でござるが、

餘り、劍道を熱心致しますから、一手二手の劍術を教へて遣りましてござる、然るに世の諺にも申す通り、生兵法は大疵の基、遂には少々の腕前が出来るやうになつたところから、他人を人とも思はぬ仕振を致しまするので、主家來の縁を絶り暇を遣はした者でござる『平』エア……では貴方のお屋敷に勤めて居つた者でござりまするか『藤』如何にも左様でござる、イヤ何ういふ悪い奴なれば、拙者敵手となり長藏の絶息を刺し、長兵衛の敵手として大隈破に罷り倒で、憂ひを世に残さぬやう打ち斬つて遣はしますから、御安心下さい『平』イヤイヤ爾う貴方に御手敷を掛けては……『藤』ナリニ御心配は御無用でござる、コリヤ長兵衛長藏の兄弟の奴輩これへ出ろ、布施藏十郎敵手になつて遣はすから……』と聲を掛ける、これを聞いた長兵衛が心のうちでは、オヤッ何だ……布施藏十郎、彼人は乃公の以前の御主人さまだ、こいつは全然水泡だわい、エッ忘々しいことになつたと、心のうちで思ひながらも最早いたし方もございませぬから、長兵衛は恐懼と藤十郎の前に出て参りました、長『へい旦那さま、何うも濟まないことを致しました、先刻からのお話を承まはりました、實は貴ひ涙を溢して居りました、何うか御免下さいませ、何にも申上げることにはございませぬ……コリヤ長藏最う其様な所爲は止して、早く此處へ出て来て詫をせぬかい』僅かの負傷を大仰に見せまして、流るゝ血潮を故と顔一面に塗り、ウム……と唸つて居りました長藏は、この時瓜

鼠々々と起上り、ピタリと大地に兩手を突へ長『へい旦那さま、生命だけはお助けを願ひます、これに懲りまして、以來は決して無法などは致しません』藤『兄弟そろつて謝詫をするならば、拙者と雖も匹夫の勇を現はしたくはない、この後は乾度善心に立復るといふことであれば、生命ばかりは助けて遣はす』兄弟『ハイ何うも有難うござります、最うこれに懲りまして貴方さまへの御恩報しも致しまする』藤『ム、爾う云ふ心であれば結構な事、併し拙者に忠義を盡す心底があれば、何うかこの班鳩家へ忠義を盡して呉れるやう』兄弟『ハイ承知いたしました、これから月のうちに三度や四度は是非罷り出まして、萬一平兵衛旦那の宅に事故があるやうな時は、私共が生命を的に、立働きまする』藤『イヤ夫れを聞いて拙者も安心、この場は拙者より平兵衛殿にお詫びを致して遣はすから、最早歸るが宜いぞ』兄弟『エ、平兵衛旦那、何うも相濟まぬことを致しました、只今お聞きの通りの次第でござりますから何うか宜しく願ひまする』と、互理長兵衛長藏の兄弟は、乾分を引率れまして、初めの虚勢何處へやら、嬉し涙を溢しまして歸つて仕舞ひました、藤十郎においても何かのことを平兵衛に頼み、藤『それでは平兵衛殿、此上永う居れば即つて未練の種、名残りは盡きませぬけれども最早お暇いたすでござる』平『左様でござれば強てお留めも致しますまい、平次のことは御心配下されませぬよう』藤『宜しう願ひ申しまする』と涙と共に我家を指して立歸りました

さてこれより互理長兵衛長藏の兄弟は月々必ず三度四度と平兵衛宅へ出入を致して、機嫌を取ると云ふ、恚うなると平兵衛においても来るたび毎に幾何かの心附を與るといふ有様で、双方ともに圓滑く落着りまして、相變らず出入を致して居りましたところが、一日の事彼の平次でございます、表の縁側へ出まして四方の景色を眺めて居りますると、村の若い衆多勢の者が草鞋を穿き締め、雲齋の稽古禪を各自が肩に掛け、甚句を歌ひながら通りますから、平次「オーイ若い衆」と聲を掛けた、件の若い衆の連中は、不意と立止り。「オ、坊ちやん、何でございます」平次「お前方はそんな風體して何所へ行くんだい」。「へい、私共は相撲を取りに行きますので」平次「フム爾うか、何處へ行くんだい」。「へいこの先の鎮守のお社で、相撲が出来ますので」平次「お社の境内にあるのだナ」。「へいへい左様でございます、貴方とこの民藏さんも、今日は何うせお出でなさいませう、貴方も御一緒にお出でなすつては、何うでございます」平次「フム其なら内の民藏も相撲を取るのかい」。「取りますとも、彼人は民勇といつて素人相撲の中では、闘でございます」平次「フム、一寸も乃公は知らなんだ」。「何如でございます、一緒ににお出でなさいませうか」平次「ウム民藏も行くのなら、乃公も行かう」。「お來でなされませ、今日の相撲は面白うございます、片一方は岩沼の若い衆、此方は槻木の若い衆の取組で、毎年血を見んと已まぬといふ位でございます、

今年も何うで血を見るやうな騒ぎでございますから、是非お出でなされませ」平次「血を見る、そいつは面白からう、乃公も後から行くから、好い場所を設つて置いて呉れ」。「宜しうござります」と若い者は皆々相撲場指して行つて仕舞ひました、ところが爾ういふ事情を知りませぬ所の民藏、待て、今日は何うかして、坊ちやんを連れずに行きたいものぢやな、連れて行くと乃公が遊ぶ事が出来ぬ、何うかして連れずに行きたいものぢやと、思ひました所から、雲齋の禪を懷中に捻り込んで、草鞋を袂に納れて、一寸用辨にでも行くやうな風體をして、ヒョコ／＼と出て行かうとするやつを、目の敏い平次はこれを見附けまして、民藏の野郎乃公を出し抜いて行かうと思つて居やアがるナ、ヨシ……と偶爾と民藏の袂を見ますると、民藏の衣類の端が綻びて、例の草鞋が下つて居る平次「民藏何處へ行くんだ」といはれて民藏はエツ失策つたとは思ひましたが平氣な顔で「民「エー一寸用辨に参りますので……」平「何處へ使ひに行くのぢや」民「へいその、何でございます、この向方まで行きますので……」平「向方へ行く……向ふへ行くのに、草鞋を何うるすのぢや」民「草鞋……草鞋が何處にあります」平「ハ、ア知らぬと思つて居るか、草鞋を袂袖へ入れて居るぢやないか」民「へい……草鞋なんぞ有りますものか」といふやつを、平次はツカ／＼と出て参りまして、草鞋の紐を引張りまして「平「民藏此品は何ぢや」民「オッこれは失策つた、此様な所へ出て居や

がつた、大變いことをしやした、モシ爾う引張りなすつちやいけません、何うも貴方の眼の
 敏いには感心しますな』平「ハア、、、民藏イヤ民勇、、民「オヤ民勇なんて、何誰に其
 様な事をお聞きなさいました』平「何人に聞いても宜い、何うも素人相撲の大關なんて、面容
 に似合はぬものぢやなア』民「御串戲仰しやつちやいけません、これでも却々相撲は取りませ
 せ、如何でござりませう、御一緒に行きませうか』平「ウム連れて行つて呉れ』民「ぢやア連れ
 て行つて上げますが、併し今日の相撲は、岩沼と槻木との取組で、毎次血を見るやうな喧嘩
 が出来すから、餘計なことを仰しやつたら悪いで』平「ヨシ、夫れぢやア何にも云やアしな
 い』といふので、これから平次に支度を致させまして、之れを引連れ岩沼の驛端れの明神
 さまの境内の相撲場を指して出て来ました、この明神といふのは、即ち武隈稻荷といふので
 長難神社ともいふ、なか／＼廣い境内でございます、この境内へ一ツの土俵場を拵へまして
 岩沼は東方、槻木は西方と分けてございまして、東の岩沼の方の棧敷には、代官勝田忠左衛
 門の伴忠之進といふ人が、捕卒の連中及び出入の角力者などを多勢引率れまして、瓢箪酒を
 飲みながら見物いたして居ります、此方は岩沼、槻木の双方の若いものが、入變り立變り
 て、相撲の勝負を重ねましたが、この日に限つて岩沼の方が毎度勝利を占めて居ります、其
 處で岩沼の若いものは口々に、體裁ア見やアがれ槻木の奴輩ア、麥飯ばかり喰つて居やがる

から、夫れで負けるんだ笑つて遣れ、お粥ばらめが』とワアーツと囃して居りまするを、聞
 きました斑鳩平次、元來が負けぬ氣性でございすから、憤ツと致しまして平「ヤイ一同、
 確乎取らぬか、何奴も此奴も力のない奴ばかりぢや、民藏一番取つて遣れ』民「イヤ宜しう
 ございす、私がこれから一番取つて遣ります、濟みませぬが坊ちやん、この衣服とそれか
 らこの財囊をお願ひ申します』平「ヨシ／＼と云ふうちに、民藏は衣服を脱ぎまして、禪を
 締込み土俵を指して出て参りました、此方は平次が民藏の衣服と財囊を預りまして平「イヤ
 ア財囊を持つて居やがるなナ幾何程持つて居るかしらん』と紙入を檢べて見ますと金子が二
 兩ばかりございす平「イヤア、大分持つて居るな、オイ仲賣』仲「へい何品を上げませう』
 仲「エー壽司を一兩とナ、夫れから酒を一兩ほど持つて来て呉れ』仲「エーツ、モシ坊ちやん
 酒を一兩と壽司を一兩、其様なに此處にはござりませぬ』平「分らないことをいふナ、其處に
 持つてゐなきやア、直に拵へて來い』仲「だが、其様なに仰山御注文なすつて、金錢が、、』
 平「オイ／＼金錢は心配することはない、夫れ前金を與る』と例の民藏が金子を仲賣に渡し
 て仕舞ひました、すると仲賣は大層悦びまして仲「イヤ宜しうございす直に拵へて参り
 ます』仲賣は本家へ出て参りまして、何しろ一兩と申しますると、些少のやうでございす
 が、昔時の一兩は今日の十兩ほどに當りますから、却々大したものでございます、辛と大勢

して拵へ上げました、其品を臺に載せて持つて参りまして、仲「へい、お待ちだうさま……」
 平「御苦勞々々、若い衆これを喰つてナ、岩沼の奴輩に負けぬやうに、確乎と相撲を取つて
 呉れ、萬一杯飲んだその上負けたら、乃公が嘔り着くせ」と云はれて榎木の若い者は、サ
 ア坊ちやんの御饗應だと云ふので、何うもガブ／＼飲む奴もあれば、ムシヤ／＼喰ふ奴もご
 ざいます、ところが此方は民藏でございます、チャンと褲を締め込みまして、土俵を指して
 上り込みましたが、なか／＼強うございます、岩沼の若い奴輩四五人を負かして、やんやとい
 ふ掛聲の下に以前の坐に復つて來まして、民「坊ちやん何うでございますか、民藏汝
 はなか／＼強いな」民「ナーニ強いついふ理由でもござりませぬが、併し坊ちやん此處にある
 壽司と酒は、何うなさいましたので」平「マア／＼何でも宜い、勝利祝一杯飲め……」民藏は
 不思議なことに思ひまして、民「何でござりまするか、坊ちやんの饗應で……」平「マア何うでも
 宜い、喰つたら宜いちやないか」民「だつて年齢の長かない坊ちやんに、金錢を費はしまして
 は濟みません、ちや斯う致しませう、私も何か饗應することに致しませう、オイ仲賣、仲賣」
 仲「へい」民「何うちや鰯があるかい」仲「へい／＼ござります」民「ちやアその鰯を一枚焼いて
 呉れ」仲「へい承知いたしました」民「一寸待つて呉れ、錢が間違ふと不可ぬから、前に拂つて
 置く……」モシ坊ちやん、俺の紙入を渡して下さい」平「ヨシ／＼」と紙入を渡すやつを受取り

ました民藏、内部を調べますると、金子
 といつては鑲錢一文もござりませぬから
 何うも妙な顔を致しまして民「坊ちやん」
 平「何ちや」民「この中に金子はありませ
 なんだか」平「ハア、ハア、」民「何を笑つて
 お居でなされます」平「マア／＼何でも宜
 い、お前充分喰べたら宜いちやないか、
 お前の金錢で、お前が喰ふのだから」
 民「モシ御串戲仰ちやアいけません、で
 は坊ちやん、この壽司やお酒の代價は、
 私の金子で……」平「爾うだ」民「大變いこ
 とをなされましたな、彼金は要るのでご
 ざりませんが」平「ナーニ心配することはない、
 乃公が返済して遣るヨ」民「ハイ……」
 ……」と澄まん顔をして居ります所へ、



出て来ましたのは奥州の俠客といはれましたる、例の亘理長兵衛長藏の兄弟でございます、兄弟「オヤツ坊ちやまでござりますか、何うも好くお出でなされました」平「オ、長兵衛の兄弟か、サア此處へ坐つて観るが宜い」兄弟「有難うござります、ちやア御免下さいませ」と亘理長兵衛長藏の兄弟は、十人ばかりの乾兒を引率れまして、平次の側へ控へて居ります、ところへ平次には兄に當りまする平造が又も飄然出て参りました平「オ、兄ちやんでござりましたか」平造「ヤア平次か、オ、長兵衛長藏兄弟も来て居るナ」兄弟「是は／＼坊さまでござりますか」平造「如何ちや今までの相撲の勝負は：：」平「ナーニ兄ちやん、今日は槻木の若い者が負けましてね、今民藏が漸う勝利を博つた所でござります」平造「爾うか：：」と觀て居りまするうちに、岩沼の方から破竹といふ名前を上げて出て来ました角力者、此人は岩沼の素人にて、關取といはれる位な手取りの名人でございます。

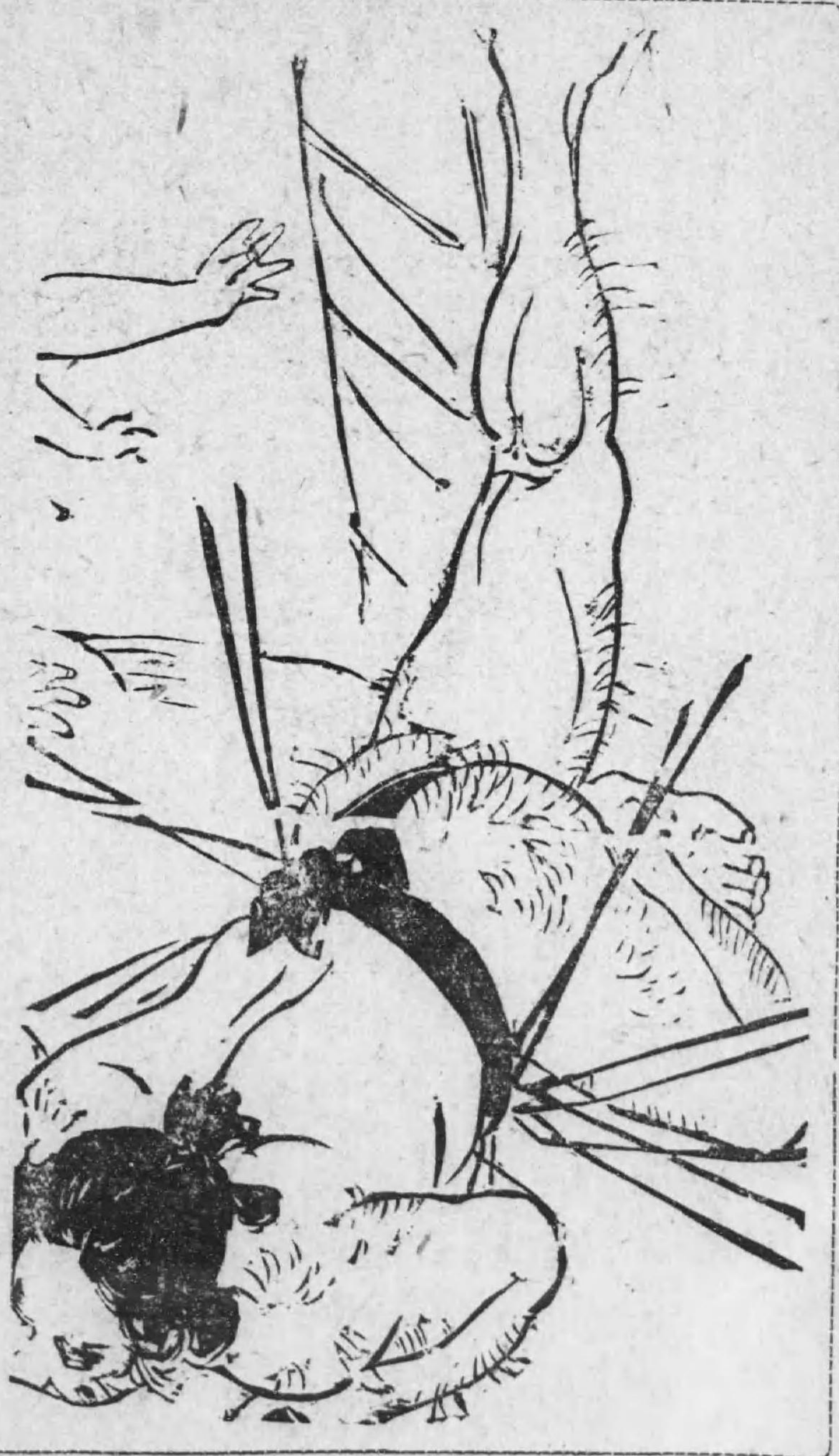
(第四席) 平造相撲を投倒す事、并に平造平次大隈嶺へ喧嘩に赴く事

夫れへ指して槻木の若い者が出て参りましたが、何しろ先方は手取りの名人といふのでござりますから、槻木の若い者は皆負けて仕舞ひました、これを眺めた民藏が「民「ヨシ乃公が對手になつて遣らう」と出て参りヤツ／＼と取組みましたところが破竹は民藏のため、苦も

なく負けて仕舞ひました、其處で勝田忠左衛門の倅忠之進が、何分にも破竹は岩沼の方で鳴らして居る男でござりますから、可愛くつて堪りませぬ、そいつが負けたものでござりますから、額に尊榮ほどの青筋を現はして自分が率れて来て居りまする江戸相撲の貧乏神まで取上げて居る、鶴渡り文藏といふ者に向ひまして「忠「文藏：：」鶴「へい何んでござんす」忠「汝出て取れ」鶴「エ、宜しうござります」忠「必ず負けてはならぬぞ」鶴「何を仰しやります、價値が知れたる素人相撲の奴輩に、負けて堪りますものかい、萬一負けたら江戸十六儀十六羅漢の上で鍛へ上げたこの腕にすみません、御心配なされますな」と鶴渡り文藏はウンと揮を締込み土俵の上へ出て参りました、此方は民藏、今しも降りやうとするやつを「鶴「オイオイ待たんせ、見たところ素人ちやアなか／＼取口が鮮かだ、乃公が一番揉んで與げませう」民「オ、お前さんは、鶴渡りの關取ちやアござりませぬか、モシ申戯いつちや不可ませぬせ、お前さんと俺が何うして取組が出来ませう、何卒御了見なすつて下されませ」と降りやうとするを「鶴「オイ／＼何をいはんすのちや相撲は合せ者ちや、強いが勝ち弱が負けと定つたものちやござんせん、一番取りませう」民「其様なことをいつたつて、なか／＼お前さんと取組むことが出来ませぬ」といつてゐるうちに槻木の若い者は「若「ウーム民藏さん取つちア不可ねえせ、先方はお前さん江戸相撲の貧乏神まで取つた人ちやアねえか、其様な者と何

うして取組むことが出来る者か、降りなさい……取りなさんな……』と一同聲を掛けて居りますると、其處で民藏が降りやうとすれば、鶴渡りが留めるし、殆ど困つて居ります、これを見た平次が平次『何を吐かしやがるんだ、ヨシ一番俺が取つて遣らう』と僅か九歳に足らない平次が、衣服をバラリと脱ぎ捨てまして、今しも出て行かうとするから兄の平造が平造『アイヤ待て……』平次『お兄ちゃん、何故お留めなされます』平造『血相變へて汝は何處へ參るのだ』平次『しれたことを仰しやります、民藏が困つて居りますから、私が一番取つてやらうと思つて……』平造『汝のやうな兒供が、彼の軀體なるところの角力取と取組をしたところで勝たれると思ふか』平次『夫りや、負けたつて乃公が啗り付いて遣ります』平造『其んな馬鹿なことをいふものではない、ヨシ民藏の名代として俺が一番取るから、其方は觀て居れ』平次『お兄ちゃん、夫れちや貴兄に任せますが、負けては不可ませぬぞ』平造『ナーニ負けることはない、安心致せ』と平造はバラリ裸體に相成り、土俵の上へ出て參りました、平造『サア民藏汝は退れ……』オイ關取、相手は何うやら疲れた様子だから、お前さんが夫れ程素人と取組みたいなら、俺が一番對手を致しませう』鶴『爾でござんすか、シテお前さんは楓木のものでござんすかい』平造『如何にも楓木の者でござる』○『宜しうござんす』民『モシ若旦那、お取りになつても大事はござりませぬか』平造『構はん』といはれて民藏は、下方へ降りて仕舞ひ

ました、此方は双方の若い者が口々に○『ヤイ行司を出さぬかい、行司を出せい』と頻りに喧しく申して居ります、ところへ場所馴れた一人が萬歳扇を持つて上つて參りまして○『此方鶴渡……鶴渡……、片方楓木……楓木……』と名乗りを揚げますと、ヤツと立上つた平造は、親から教へて貰つた體術に、身體の動作が自然と備はる防禦の用意、胸は男子の急所でございますから、兩方の手を持つて押へました平造『エイヤ』鶴『そりや來た』平造『サア來い』と、宛で柔術が劍術の稽古でござります、此方は双方の若い者が○『鶴渡り……楓木……』と頻りに力を添へて見て居ります、又平造は兩方の手で、胸を圍うて居りますから、鶴渡は心のうちで、何うも妙な相撲の取方をする奴だと思ひながらも、ツツと近寄つて來まして、平造の胸部を目掛けて頭突きを一ツバツと突きました、正當に受けたら堪りませぬが、流石は平造で、一寸と身體を轉して仕舞ひましたから、鶴渡りは自分の力量に餘つてヨロ／＼と蹠蹴くなり鶴『ドコイショ』と踏止り此處で四ツに双方が取組みましたが、平造は何しろ柔術を辨へて居りますから、グツと鶴渡りの腕を握りました鶴『こりやア何うも妙だ、力を入れやうと思つても、力が出やしないぞ』と思つて居るところへ、平造は指の先へ力を入れましてクリ／＼と揉みました、何しろ急所へ力を入れて、揉まれるのでございますから、堪つたものぢやアござりませぬ、鶴渡りはアツ痛いと蹠踏つて居るやつを平造



「エイ……ッ」といふなり、左しもの大きな身體の鶴渡りを投附けましたから、コロコロと土俵の外へバツタリ打倒れました、岩沼の若い者も餘り大きな男が、容易く轉けたものでございませうから、思はず知らずアワツと聲を揚げて居ります、勿論槻木の若い者は手をたきたきながら、〇「イヤ體裁ア見やアがれ、毎日麥飯を喰つて居やアがるから、水肥りに肥つて居やアがるのだ、確乎しろお粥腹奴が……」とドツと囀立てる、これを聞いた勝田忠之進は憤々と腹を立まして、〇「ヤア鶴渡、今一番取れ」と眼の色を變へて大音を振あげて居る、鶴渡りは此度取つたら頸の骨を折られて仕舞ふと、ブルブル震へて居ります、忠之進の言葉に背くことが出来ませぬ、といふのは文藏がこれまでの角力取になつたといふのは、忠之進の取立てに依つて斯くまで出世を致したので、不承不承に痛む腰を擦りながら、またもや土俵の上に入り込みました平造「ヤイまた来るのかい、サア来い」行司が夫れに出て参りました、例の通り名乗り揚げますと、双方がヤツと立上りましたが、平造は胸部を圍うたなり平造「サア来い、エイヤ……」愈々柔術でございませう、此方の鶴渡り、こいつは逆も正當に行つては不可ぬと思ひましたから、突然拳に力を要れまして、平造の横ツ面ビシヤツリ打擲らうと打つて来た奴を、バツと體を轉すその早さ、スカタン喰つて向方へよろめくやつを平造「オイ、何處へ行くんだ、此方だ……」〇「ナニツ……」と、云ふなり頬に平造の隙をねらつ

て居りましたが、何しろ劍術柔術に長けて居ります平造の身體には一寸の隙もございませぬ、鶴渡りは最う無茶苦茶で〇「ナニツ……」と云ふなり、拳を固めて平造の肋腹の三枚を目蒐けて打つて来るやつを、平造はバツと横に轉して、鶴渡りの兩の手をグイツと握り、平造「エイツ……」引かれましてから鶴渡りは、タチ……と近寄つて来る奴を、またもや右足を舉げて嫌といふほど蹴りつけましたので左しも大きな身體の鶴渡りが、よろよろと槻木の若い衆の控へて居る場所へ轉じて参りました、サア斯うなると、槻木の若い者は聲々に〇「イヤ體裁ア見やアがれ、汝は何の用が有つて乃公の所へ來んだ、大きな身體をしやアがつて、素人に負るとは何事だい、關取々々なんて自慢をしやアがる、斯様な奴を愛顧にする眞客の面が見たい」わいと罵言るやつが、一人や二人ちやございませぬ、多勢の者が斯ういふものでございませうから、忠之進は大に怒りまして、〇「ナニツ」と傍へに居ります所の、さらけの藤太といふ目證の頭をして居る奴に向ひまして、〇「コリヤ藤太」藤「はい……」〇「實に残念だわい、何うかして、彼の蚯蚓切りを負かして遣りたいものだ」藤「イヤ宜しうござります、若旦那の御機嫌を害ねやアがつた土百姓、乃公が見て居まするに、今の相撲は何だか訝しいことをしやがつたやうに思ひます」藤「フム……」藤「何うも素人の行司だから分らないのでござりませうが、相撲に嫌ふ逆手を出したに違ひございませぬ」藤「成程」藤「宜し

うござります、オイ若い奴輩、敵手を土俵から降すことは出来ねえぞ。〇「へい親分、何うしましたので」藤「何うするもねえ、彼の野郎相撲に嫌ふところの逆手を出しやがったのだ、そいつを素人の行司だから、巧妙く瞞着して勝利を取つたんだ、よつて彼奴を引出して、臍臍を四本柱へ巻附けて遣れ」皆々「心得ました」といふので藤太の多勢の乾兒が各自に得物を引提げ向ふ鉢巻玉棒、中には二挺剃刀、喧嘩刀乃至匕首といふやうな物を持ちまして飛び出しました、勿論此處の相撲は必ず血を見ねば納まらぬといふ相撲でござりますから、皆々喧嘩が荒うござりますから、突然土俵の周圍を取捲きまして。〇「ヤイ土百姓、サア相撲に禁じてあるところの、逆手を出して卑怯にも相撲に勝つとは不埒な奴、サア相撲の作法ぢや、土俵から降ろさないから覺悟をしろツ」とバラツと飛び込んで来る、平次はこれを見ると「平」サア、お兄さんに疵を着けては成らん」と、兄平造が帯して來ましたる處の一刀把るより早く見り抜き放ちまして「平」サアお兄ちゃん、確乎お遣なさいませ、夫れ刀を上げます」と例の刀を投げ附けました、平造が其刀を受取りまして平造「爾う吐せば、何奴此奴の容赦はない、ヨシ逆手といへば逆手になつて遣らう、萬一爾うなつたら如何するのだ」と例の一刀上段に振冠りました、平次「ヨシ公乃も出て遣らう」といふので、平次も、矮少い身體でござりますが、何しろ氣の勝つた子供でござりますから、今しも飛出やうとするやつを巨理長兵衛

長藏の兄弟が「兄」アモシ若旦那、斯様なことに、ジタバタ貴息がたが出たら箱が落ちます、相手には乃公ともが出ますから貴方々は依然として待つてお居でなされませ」平「夫れぢやといつてお前達ぢやア埒が明かぬわい」兄弟「モシ冗談いつちやア不可ませぬ、如彼云ふ奴は乃公等が恰ど好い相手でござります、兎も角お控へなすつて御覽なさいませ」といひつゝ、長兵衛長藏の兄弟が、衝々と土俵際まで出て參りまして兄弟「オイきられ、ヤイきられの藤太」藤「誰だい、憚りながら目證の親分たる乃公を捉へて、きられ……藤太なんて吐しやアがる奴は」長「オイ……きられ、誰でも宜いわい、爾ういふ風に出て來ると、豪さうに見えるな」藤「ナニツ……」長「イヤサ、眞個に、爾うして居る所を見ると豪いものだ、イヤサ強さうに見えるわい、きられ……」藤「オヤ乙なことをいふナ、何誰だい……誰だいといふのに……」長「喧しわい、黙つて居ろ、何人でもねえ今に面部を知らして遣る」といひながら着て居ります所の羽織をバラりと脱ぐその早さ、尤も着て居ります羽織といふは、裏は羽二重のギウギウしたやつでござります、衣服は結城縞の額裏取つたる裕を着し、一本獨鈷の博多帯を締め、刀は鐵尻の南蠻鐵の鐔で目貫といつたら金の無垢、紫色の提緒の着いたるやつを、片手に引揚げ、土俵の上に立上りましたるその勢ひは、何しろ奥州限つての大親分、何所の賭場へ參りまして、三丁奴に見られぬ親分衆でござります、兄弟「オイきられ、姓名が聞きたきや

今云つて聽かすが乃公等は他の者ちやアねえ、亙理長兵衛長藏の兄弟ちや、止立をしたのが何うしたのだ、鳥なき里の蝙蝠で、代官の俵を頭に冠つて威張りやアがる、馬陸蟲とはおのれのことだ、ヤイ誰が逆手を使つたのだ、乃公はチャンと傍で觀て居るのちや、殊に岩沼の若い衆なり、また槻木の若い衆なぞが、これなら角力の手が分るだらうと思つて出した行司だ、夫れがチャンと見て勝つた方へ軍扇を上げたやつが何が不思議だ、汝等は遠隔い處に居やアがつて、それが分るかい篋棒奴、サアこの若旦那に手を掛けて見やアがれ、亙理長兵衛長藏の兄弟が敵手になつて遣るんだ、ヤイ汝等の様に二足の草鞋を履く奴は穢らはしいわい」といはれて驚きましたのはきられの藤太でございます、何で藤太が亙理の兄弟に向つて、一言も言ふことが出来ないかと申しますると、この兄弟の者に抵抗つたら自分等の損でございます、何か召捕者でもありますると、直にこの兄弟の所へ出て参りました、何うか親分斯うく云ふ理由でございますから、何分宜しう願ひ申しやすの一言で、その罪人が直に容易く召捕られると云ふ有様で、殊にまた金銭に不自由を感じますると、親分濟みませぬが、斯うく云ふ理由で金子が要りますと云へば、金子を貸して遣ります、其點で藤太に於きましては今までの勢ひに引換へて、藤モシ親分、乃公ア何も云ふ氣もござりませぬ、何しろ若い奴輩が、ギヤア〜吐しやアがつたので、後から叱りに出ましたのでござります

「〜」と何うも曖昧な答辯に、亙理長兵衛、長藏の兄弟はこれを聞きまして、腹のうちでは可笑くつて耐りませぬ、長ア、爾うか、夫れちやア分つた、芋の頭も頭となればゴテックもものだ、分つたことを云ふなア、爾うすると今の若い奴が、逆手とか何とか云つて苦情を云ふやつを、汝が止めに出たと云ふのだな、藤ウム、ヘイ、長ヨシ、其様なら汝は頭ちやアねいか、譯の分らねえ乾兒だつたら、打撲つて仕舞へ、藤エ、宜しうござります、ヤイ若い奴、汝等何が逆手だ、イヤサ誰人が逆手を使ひなかつたのだ、分らねえ事を云ふ奴だ、この馬鹿野郎」と云ふなり、自分の乾兒の横ッ面を目蒐けてビシャーリ撲りました、堪らぬのは乾兒でござります、心のうちでは馬鹿〜しい、親分が臍腑を卷附ろ、降すな〜んて云つて何を云ふんだと、怪訝な顔を致して居ります、藤ヤイ、乃公が、このくらゐ止めるのに分らぬか」とまたもやビシャーリ打擲る、若い奴は泣出しさうな顔をして、〇「オイ〜誰か代つて呉れ、乃公ばかり撲られて居るんだい、親分だから分らねいぢやアねいか、〜」と云ふなり、若い奴輩はバラ〜と逃げて仕舞ひました、忠之進に於きましては、これを見るより益々憤々と致しまして、忠ウム覺えて居れ、亙理長兵衛、長藏の兄弟とやら、また二つには槻木の平造平次の兩人、今に一泡吹かして呉れる、サア一同従いて來い」と云ふなり、自分の連れて参りました所の相撲取並に目明の連中を引率れまして、棧敷

を後方に相撲場の外方へ出て参りました、此方は平造平次、並に長兵衛は後に残つて相撲を見て居りましたが、最うツイ日も暮れかゝつて参りましたから、平造平次最う歸宅らうぢやないか』平宜しうござりませう』と云ふので、互理長兵衛、長藏と共に槻木を指して歸つて参りました。大隈嶺の手前まで参りますると、長「エイ若旦那、此處でお別れ申します、お歸宅になりましたら、何うか旦那さまに宜しう仰しやつて下さいませ」と此處で長兵衛兄弟は大隈嶺の方を指して行つて仕舞ひました、此方は平造平次が何心なく我家を指して歸らうとする所へ、長兵衛兄弟は急息き引返して來まして、長「モシ、若旦那、坊ちゃん」と呼び立てる平造「長兵衛か、全體何うしたのぢや」長「へい餘の儀でもござりませぬが、只今乃公共が大隈嶺の藪疊まで参りますると、何だか人聲が大層致します、ハテナ何うも不思議だと思つて、密つと近寄つて見ますると、何うも驚くぢやござりませんか、多勢の者が焚火を致しまして、竹槍を拵へて居る者があれば、また刀を持つて居る者もござりまして、喧嘩の準備を致して居る様子、こいつは不思議だと思つて見て居るうちに焚火を消しまして他人の歸路りを待つて居る様子でござります、依つて萬一今日の相撲の遺恨から、岩沼の奴輩が貴方がたへ復讐をしやうとするのではござりませぬか、爾うだつたら貴方がたへ負傷があつちや、銀と鉛と換へるやうなもので、何うか道を變更てお歸りなすつて下さいませ、跡

は俺等兄弟が引受けますから……』平造「イヤ、爾うではない、一時道を變へて免れるにした所が、また爾ういふものでもあれば、將來に如何云ふことをするか分らぬ、先んずれば人を制すとの比喩、吾これより罷り越して、その者を敵手にするから安心を致すやう、併し前以て斷り置くが、お前達は必ず助太刀することは出来ないぞ……』兄弟「とはまた、如何云ふ理由で……』平次「萬一汝等の腕を藉りたすると、後で拙者の名の汚れであるから、手を出すことは相成らぬ』兄弟「モシ御申儀いつちや不可ませぬ、布施の旦那さまに乃公共がお約束を致しまして、萬一貴息がたのお身上に關ることが出来たら、乃公共が引受けますと申して置きました、だから貴息方の危険い所を觀て居られるものぢやござりませぬ』平造「イヤ、お前達の手を藉つて我難を免れたといはれては……』兄弟「左様でござりますが、だといつて……』と兄弟が頻りに助太刀をせうといふやつを、傍で聞いて居りました平次でござります平次「イヤ兄弟、阿兄ちゃん仰しやることを背いてはならぬぞ』兄弟「へい何うも爾うまで仰しやりやア致方がござりませぬ』平次「サアお兄ちゃん御準備をなさいませ、私も共々に参りませう』平造「ア、イヤイヤ汝はこれから歸宅つて呉れ、爾うしてお父上に兄弟造が斯ういふ理由で、大隈嶺において多勢を敵手に斬結ぶが、御心配なさらぬやう、また萬一兄の身上に凶事があつたら、兄に代つて父上に孝行をして呉れよ』平次「ア、イヤ、お



兄ちやん爾うちやアござりませうが、貴兄を一人遣つて、私は見捨て、歸ることは出来ませぬ、第一お父様に對して、爾ういふことは出来ないうちやアござりませぬか、二人で行くのが不可ないと仰しやるのなら、何うか貴兄お歸りなすつて下さいませ」平造「お前は何か事を申すのちや、お前のやうな小兒の體で、大きな男ばかり多勢居る中に行つたとて、恰で枯柴を背負つて火の中へ這入るも同様だ、何うか兄の願ひだ歸つて呉れ」平次「いえ、何うあつても私は歸りませぬ、貴兄のお手討ちに相成らうとも、私は歸りませぬ」平造「爾うか、左までいふのなら、如何にも同意を許すであらう、併し豫て申して居る通り、劍術の極意といふものは、身を敵に任して敵の急所を突けといふのが極意であつて、我が身體を厭ふやうでは不可ないぞ」平次「イヤ夫れは承知致して居ります、萬一先方が私の皮を斬つて來たら、皮を斬らして私は肉を殺いで遣ります、また先方が肉を斬りましたなら、私は骨を斬つて遣ります」平造「ヤア夫れは誠に勇しき一言、爾ういふ覺悟であれば大丈夫である、だが其方に得物が無いな」平次「ナ、お兄ちやん、得物なんぞは何にも要りません」と偶爾と向方を眺めますると、二三間前に道路が二つに岐れて居ります、その分岐にこれより大隈嶺といふ棒杭が立つて居ります、その棒杭の處へツカカ〜と進んだ平次が、その棒杭を手に掛けながら平次「ウーム」と力を入れますると、流石は後世に名を残すだけの平次でございます、小兒な

がらも力が大層でございませうので、さしも大きい棒杭が倒れ掛つた、そいつを平次が双の腕に力を入れると引抜きまして、根元の土を拂ひ、二三回ビューと籠手調へをして平次「お兄ちゃん、これなら大丈夫でございませう」平次「ヤア、豪い、それで安心をいたした：：コリヤ民藏よ、其方は早く立歸り、お父上に斯様々々の次第と詳しく話をいたし、御心配をなさらぬやう申して呉れ」といふなり兄弟の者は細帯取つて早速の櫛、手拭に後鉢巻をいたし大隈嶺を指して、勢ひ良く飛出しました、此時大隈嶺の藪壘に掛つて参りました、が、バラ／＼と出でましたるは異形の扮装、凡そ五十人許りと云ふ者が、各自に獲物を持ちまして、兄弟の側へ進み寄り、「待て待て、ヤア蚯蚓切り：：土堀り、今日の相撲場に於て、能くも酷い相撲を取りやがつた、その恩報に先刻から此處に待て居るのだ、覺悟をさせ」と云ふなり、各自が竹槍を振舞して出て來ますやつを平次、平次は面も振らず飛び込み、一人の奴が今しも竹槍を扱いて、胸元を目覚めて突いてくる奴を、平次は棒杭を持つてバツと刎ねましたから、竹槍は宙を飛んで上の方へ飛ぶ、「エツ失策だ」と云ふやつを、右の頬邊から額へ掛けて、ビシヤリ打ん撲りましたから、如何でか以て堪めませうや、その者は顛倒つて絶命に及びました、すると右の方からまたもや、突込んで來る、バツと體を轉して向方へよろめく奴を、鷹天目覺けてビツシヤリ打ん撲り、左から來る奴をば、横に拂つ

た爲に脾胃を一ツ打たれて「アッ」とその場へ指して打倒れる、またもや多勢の者が突いてくるやつを、千變萬化虚々實々、丁々發矢と小兒に似合はぬ働き振り、一同アツと感心して居る位でございませう、此方は平造が一刀スラリ扱拂ひまして平造汝等を殺すは刀の汚れだが、何うも致し方がない」と前方から來る奴は拜み討ち、左方から來る奴を刎ひ斬り、虚を狙つて後から不意を討たうとするやつを、劍道の達人は太刀風三寸にして身を轉す、正當に受けては堪りませぬ、ヒラリ體を轉したが早いか、背後よりして鷹天から唐竹討りに斬棄てます。

(第五席) 平次人殺しの罪を一身に受け召捕らるゝ事、并に平次旅中

盜難にかゝる事

子供ながらも平造、平次二人が斬つて／＼斬りまくるといふ勢ひでございませうから、喉うち三人五人と死骸の山を築くといふ有様、鶴渡りは少々手傷を負ひまして「ヤアこいつは耐らぬ、一巻よりは二巻が肝心、兎角生命が物種だ」とタツ／＼と逃出して仕舞ひました、これを眺めましたる平造は、ホツと呼吸を繼ぎまして、血の着いたる一刀を口でグイと扱きながら平造「ヤイ待て：：」今しも追駈けやうとする所へ平次「お兄ちゃん、お待ちな

さい……」と平次が駈寄つた、平造「オ、平次か……」平次「お兄ちゃん」平造「勝つて兜の緒を
 締めよと言ふ事がある、必ず油断は相ならぬぞヨ、此處に伏勢があるかも知分らぬから……」
 平次「お兄ちゃんも、決して御油断はなされますな」と兄弟兩人は油断なく四邊を睨んで居り
 ます、その所へ駈附けましたる長兵衛、長藏の兄弟兄弟「ヤア若旦那さま、お目出度う存じま
 す、併し何うも坊ちゃん今日の働き振りは神か佛と思ひました、能くもマア彼のお幼少い
 のに出来ましたなア」平次「ヤア長兵衛、何うちや吃驚いたしたか」長「イヤ何うも感心致しま
 した」平造「併し平次、最早敵は居らないと見える、だが澤山な人殺しをしてこの儘にも致さ
 れまい、就ては其方は一時も早くこの所を立退いて、屋敷へ歸つてお父上に孝行いたして呉
 れよ、拙者はこれより名乗り出で、相當の處刑を受けるから……」平次「ア、イヤお兄ちゃん
 爾うは参りませぬ、貴息は御長男のこと、殊にお父上の實子でござります、甚だ水臭いやう
 な事を申し上げますやうではございませぬ、私は布施藤十郎の子で、云はゞ貫はれた子で
 ござります、依つて貴兄がお處刑にお上りなされましたれば、お父上の血統を絶さなければ
 ばなりません、ちやに依つて、貴兄は何うかお歸宅り下されました、父上に孝行を遊ばして
 下されませぬ、私はこれより名乗り出まして、お處刑を受けるでござりませぬ」平造「コリヤ、
 馬鹿な言を云へ、何うも貰つた兒を處刑に上げたとしては、汝の父布施藤十郎殿に義理が濟

ぬわい」平次「イヤ、夫れは、貴兄が要らざる義理だてをなさると云ふもの、私には藤太郎
 と云ふ舍弟がござりますから、布施の家は絶えるやうな事はござりませぬ、依つて此段御安
 心を下されました、何うかお歸りを願ひます」平造「イヤイヤ其方は生永へて、父に孝行を致
 して呉れ」と兄弟が死を争うて居ります、長兵衛は切りに感心を致して長「エ、若旦那さま
 私、私が斯う申しまするのは、嗚呼がま敷うはござりまするが何うも坊ちゃん仰しやる方が
 一理あるやうに考へます、殊に貴息は十五歳も過ぎなかつたお身上、坊ちゃんはまだ幼年の
 お方でござりまするから假令名乗つてお出でになりましたも、罪科を減じられる所は、一等
 も二等も三等も減じられるやうに思ひます、よつて貴息はお歸宅りなされました、坊ちゃん
 をお行りなさる方が宜しうござりませぬ、とマア私は考へます、殊に私も聊か思案がござり
 ますから、御心配ござりませぬ」平造「爾うか、ちやア是非に及ばぬ、夫れでは平次、其方は
 名乗つて出て呉れるか」平次「ハイ御心配はござりませぬ」平造「併し夫れにした所が、代官勝
 田忠左衛門の倅忠之進の死骸が此處にあるが、これは如何したものであらう」といふやつを
 長兵衛が引取つて長「イヤ夫れはあつても構ひませぬ、俺が後で工夫がござります」平造「然
 らば何事も、萬事宜しう頼む」といつたが心のうちでは「アア今日の相撲へさへ行かなけ
 れば、兄弟が此處に生別れはすまいもの」と左しもの平造も流るゝ涙を臉で支へ無言の儘で

平次の手首をグイと握り平造「平次、ちやア行つて呉れるか」平次「お兄ちゃん、夫れではこれが別れでござりまする、永の間繼子實子の隔てなく、貴息は私を克う可愛がつて下さいまして、有難う存じます、假令この身は死するとも、魂魄この世に止まつて、父上やお兄さんのお身上を守ります、何うか御無事でお暮しなされて下されますよう」と兄弟手に手を取交し、ホロリと溢す一雫、男を磨く長兵衛、長藏の兄弟も貰ひ涙を催しました、此方は平次が涙を袖にて拂ひ平次「サアお兄ちゃん、何程別れを惜みましても、際限のないこととござりまする、そのうち萬が一代官のために召捕られるやうなことがあつては、私の苦心も水の泡、これにて御免を蒙りまする」と平次は屹度精神を取直し、棒杭小脇に搔込みながら勢ひ克く代官所を指して駈出しました、平造も其の後姿を打眺め平造「オイ平次、最う一回此方を向いて呉れ」平造が姿の見ゆるまで見送りしながら、涙と共に槻木の我家を指して立歸りました、此方は平次が代官所を指して出て行く折柄、遙か向方の方から代官勝田忠左衛門は鶴渡りの報知により襷十字に綾取りまして、栗毛の馬に打跨り大身の槍を搔こんで、カバ／＼と急いで参りまする、後に續く一人は、これぞ即ち鶴渡り文藏で、馬の尾に取纏いて参りまする其後には七八人の下役と見えまして、各自に十手を振り上げながら、急いで参りまする平次「ヤ、ツ、乃公を召捕りに来たのちやナ」と平次は立止まつて見て居りますると、此方では

鶴渡が「ヤア旦那さま、貴方さまの若旦那を殺した奴は、向方に居る小兒でござりまする」忠「爾うか、ソレ者共召捕れい」といはれて下役の面々はバラ／＼と進んで来まして、「御用だツ、神妙にしる」と打つて掛る、平次「喧しいわい、御用だと来るのは固より覺悟の前、乃公の方から名乗つて出やうとする所だ、固より人を殺した上は生る考へは些少しもない、速かに召捕れい」忠「コハ神妙なる致しかた」とその儘平次に繩を掛けて仕舞ひました、其處で勝田忠左衛門は平次の繩附きを、引立て歸つて参りました忠「ヤア／＼者共、繩附を庭前に廻せと吩咐けて忠左衛門は奥へ入つて了つた、此方は下役の者は平次を庭前へ据ゑまして、待つて居りますると、間もなく勝田忠左衛門は縁側に立出で、郡内のしとねを敷かし、その上に座を据ゑまして忠「コリヤ夫れなる小兒、面を上げい」平次「ハ、ツ」忠「汝は何が故に拙者の伴忠之進を首め、多勢の人殺しを致したか、何れ其方一人の所業ではあるまいサアこの場において、尋常に連類を申すが宜い」平次「恐れながら申上げます、殺しましたのは私一人でござりまする」忠「ア、イヤ馬鹿なことを申せ、汝一人で彼だけの人殺しが出来るか」平次「へい夫れは出来ません」忠「然らば何を持って殺したか」平次「それやア私が持て参りました棒杭で撲り殺しました」忠「ウム左様か、然らば刀劍があるといふことだが」平次「へい、そりやア先方が多勢でござりましたから、味方同志で斬つたものでございませう、棒杭で殺

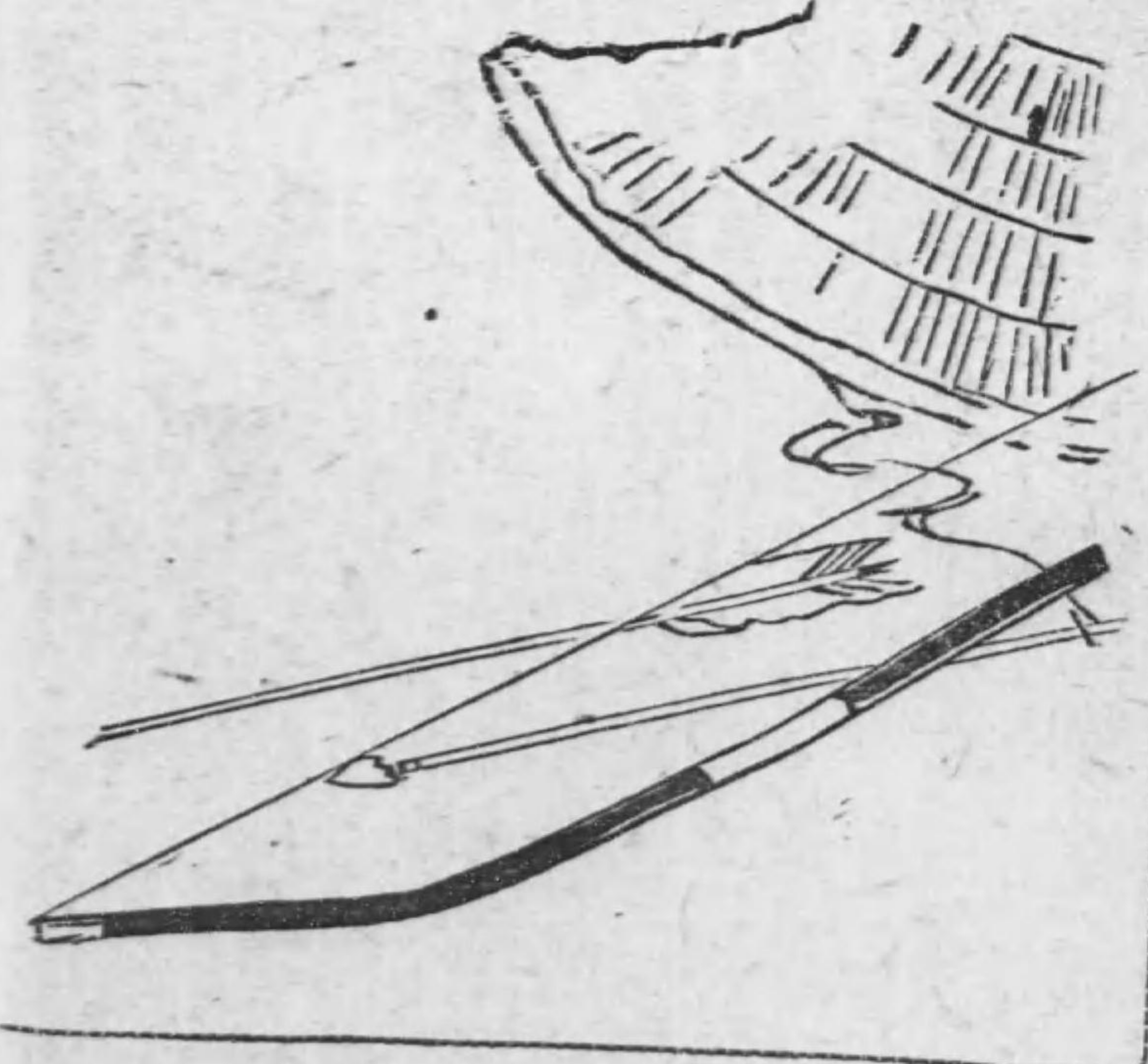
した奴は、皆な私が殺したのでござります」忠「ウム愈々夫に相違ないか」平次「毛頭相違ござりませぬ」忠「ヨシ夫れに相違なければ、夫れにもいたし置くが、現在我子の敵であるから、これより汝を眞ッ二ツに致すから左様心得ろ」平次「百も合點、二百も承知でござります」忠「ウム好い覺悟だ、わが子の敵觀念せよや」忠「一刀上段に振冠りましたる勝田忠左衛門此方は平次がもうチャンと覺悟を極めて居りますから、恟ともせず兩手を合せ平次「サア確乎斬つてお呉んなさいまし」と眼を瞑つて居る、忠「汝は斑鳩平兵衛の倅ぢやナ」平次「左様でござります」忠「ウム」シテ其方は弟平次ぢやのう」平次「左様でござります」忠「ウム」では只今首を打落すから左様に心得よ」ヤア者共、鶴渡り文藏を此處へ呼べッ」と聲を掛けますと、文藏は夫れに出て参りまして 忠「へい旦那さま、何御用でござりまする」忠「文藏其方この平次の顛を引張つて居つて呉れ」文「畏まりました、ヤア平次とやらいふ子兒、今に生命を奪つて遣るから、神妙にしるい」と云ひながら一方の手で平次の顛のところを持ちまして、一方は平次の耳をグイと引張つて居ります、忠左衛門はこの體を眺めまして 忠「エイッ」と聲を掛けるや否や、平次の首を斬ると見せかけて、鶴渡り文藏の頸をスバリ打落しました、文藏といふ奴は好い面の皮で、油斷をして居る所をバツと斬られたものでござりますから、アツといふ間もあらばこそ、首級は向方を指してコロコロ、平次はおのれの

頸を二三回左右へ振つて見て 平「オヤッ」モシお代官さま、這は何故の人違ひ、さては可愛い我子を殺されて、發狂なされましたか」忠「コリヤ」黙れ、苟くも代官を勤めて居る所の勝田忠左衛門假令可愛い倅を殺されたとて、血迷ひは致さぬ、能く物を考へて見よ、今回の起原りといふのは即ちこの文藏が素人仲間の相撲に交つて、角力を取らねば、我が倅の生命を奪られることであるまい、さすれば即ち怨みはこの文藏にあるのだ、依つて我子の怨敵文藏の首を打ち落したのが何といたした」平次「ハイ」忠「何うちや分つたか、併しながら其方の實父は布施藤十郎といふ者であらう」平次「へい如何にも平兵衛殿は養父、實父と申しますのは布施藤十郎でござります」忠「成程然うであらう、その布施藤十郎と申す者は、我が女房の兄である、さすれば其方は拙者の甥に當るものぢや」平次「エーッ」其様なら私は叔母さんの子を殺したのでござりますか」忠「如何にも左様ぢや」平「まア其様なら私は從弟兄を殺しましたか」忠「眞ッ平御免なすつて下さいませ、何うか私の繩目をお解きなすつて」忠「繩を解けば如何いたす」平次「何うも從弟兄を殺したとあつては、斯うしては居られませぬ、この場において切腹を致します」忠「コリヤ」假令其方が切腹いたしましたとて、倅忠之進が生蘇つて来るものではない、依つて今日この場において汝を手討ちに致したと見せかけ、命を助け、其方は江戸表へ罷越し弓馬鎗劍の術の研究いたし、英名を天下に轟かして呉れ、夫れが何

より忠之進への功德である、爾うしてこの後何か事件があつた節には、忠之進に代つて拙者の相談に乗つて呉れるやう』平次『ハイ有難う存じます、其様なら叔父さんのお詞に従ひまして、生命を惜むではございませぬと、一旦この場を立退きまして、死んだと思つて勉強致し必ず美名を揚げるでござりませう』忠『ウ、爾ういふ決心こそ拙者の悦びの上やある』と此處で平次の縄目を解いて遣り、奥の一室へ連込み分袂の盃を致しまして、衣服大小刀及び旅費の金を與へ、その儘江戸表を指して出立をさせました、後で忠左衛門は鶴渡り文蔵の死骸を荒菰に包みまして世間體は平次の死骸と見せかけ、野邊の送りを營みました、さてお話變りまして此方は亘理長兵衛、長藏の兄弟でございます心のうちでは、アア坊ちやんは如彼やつて勇ましく名乗つてお出でになつたが、聞けばお手討になつたと云ふ噂、残念なこ
とぢやわい、ウム勝田忠左衛門覺えて居れと心の中に思つてゐる、さて斑鳩平次は漸々出て参りまして、奥州街道の相馬中村といふ所まで参りますると、折柄後の方から商人と見え
まする一人の男が、『オオイ坊ちやん』と呼ぶ、平次は偶爾と後方を振り向きまして平次
『ハ、ア田舎の商人だな、斯ういふ奴は乃公が幼少いから、道中の慰み物にしやうと思つて
呼んで居るのに相違ない、ヨシ此方から一ツ嘲弄つて遣らう』と平次はまだ十歳に滿らぬ小
兒でございませぬけれども、前々より申上げる通り餘程伶俐の質でございませぬから、脱漏りは

ございませぬ平次『ヤア町人、何用があつて呼んだのぢや』坊ちやん貴息は、何處へお越
なさいませぬ』平次『ア、拙者か、拙者は武藏國豊島郡江戸表へ罷出で、弓馬鎗劍の術を研究に
行く者ぢや』坊ちやん『お幼少いのに、なかなか豪い者でございませぬア、併し貴息は今晩何所でお
宿りでございませぬ』平次『ナニツ、旅館か、何うも初めての道中であるから、何處とも決つ
て居らぬのぢや、何うぢやその方案内をして呉れるか』坊ちやん『宜しうございませぬ、ぢや
一緒にお越しなさいませぬ』平次『ウム拙者も一人で退屈して居る所ぢや、然らば同道を致さう、
併し汝は何處まで行くのぢや』坊ちやん『ヘイ、私も江戸表へ歸る者でござります』平次『爾うか、夫れ
は恰ど幸ひのことぢや、何分萬事頼むぞヨ』坊ちやん『ヘイ、承知いたしました、ぢやア御一緒に
参りませう』と兩人が連立ちましてその晩は、武藏屋市兵衛といふ旅館に泊ることになり
成りました。○『許さつしやい』亭『ヘイお越し遊ばしませ毎度有難うさまで』平次『サア今
晩は一宿を頼むぞ』亭『ヘイ、何うかお泊りを願ひます』平次『斯ういふ乃公は仙臺藩中であ
る』坊ちやん『ヘイ、拙者の姓名は鳩斑平次といふ者である』亭『左様でござりまするか、何ぞ
お上り下さいまするやう』平次『此處に居るのは、拙者が従者に率れて参つた者である』亭『成程
……』平次『コリヤ町人』坊ちやん『ヘイ』平次『何うぢや何の室に致そうナ』坊ちやん『左様でござります、二階
へ上りますと、小便に行くのが悪うござりまするし、と申して階下の室では亦、二階へ上る

人の段梯子の音が聞えまして、誠に耳障りになりまするし、また店頭の間は朝早い出立の人が、種々と準備を致しまするので、これまた青蠟うござります、よつて離室にしは如何でござりませう」平次「成る程夫れが宜いナ...コリヤ、離室座敷に案内を致して呉れ」亭「承知いたしました」といふので、これから兩人は離室座敷に泊込むことに相成りました、ところが彼の一人は、成るべく他人の居へがあるのてござります、此方の平次は恰憫とは申しましたが、充分の所へ眼が届きませぬ、其處で寢室へ這入りまして安心を致し寝ることに相成りましたが、



翌る朝となりますると、平次が眼を覺しまして偶爾と横手を見ますると、町人の姿が見えませぬ平「ハテナ...如何したんだらうと思ひましたから、手をバチ／＼と拍きました、すると旅館の女中が出て参りまして女中「お召なさいましたか」平「一寸乃公の衣服を出して呉れ」女「ハイ貴息のお召物は如何なさいました」平「何もしない、衣服は整然と枕許へ脱いで置いたが枕許にないから、お前さんが何處かへ仕舞て呉たと思つて呼んだのちや...」と言れて女中は怪訝な顔をしながら女中「モシ坊ちゃん、其様なことは一向に存じません」平「ハテナ何うも不思議であるはい」といつて居るうちに、平次は彼の大事な叔父から貰つた、準備の金子二十兩といふものを、納れて置きました胴巻を捜つて見ますると、これもござりませぬ平「ヤヤツ胴巻がないぞ」女「エーッ、モシ坊ちゃん胴巻を如何なさいました」平「オヤッ...床の間に置いた、刀もないぞ」女「アラマア、何う遊ばしましたのでござります」平「是りや大變だ...オイ女中亭主を呼んで呉れ」女「ハイ畏まりました」といひながら女中は亭主に而々と申しましたから、亭主は吃驚して其處へ出て参り亭「モシ坊ちゃん、如何遊ばしましたのでござります」平「如何遊したもない、大變なことが起つた、昨夜一緒に泊つた町人は如何した」亭主「へい、彼のお方は今朝早くお起き遊ばしまして、實は大變い物を忘れて来たから、坊ちゃんの起きなさるまでに取つて来たい、夫れで直に取つて来るが、萬一お眼が醒め

たら夜前お約束をした處で、待つて居りますからといつて下さいと仰しやつて出でお出でになりました」平「エ、…失策つた、夫れで宿料は如何いたしてある」亭「へい宿料は坊ちやんに、お貰ひ申せと斯ういふお詞でござりました」平「ナニツ、大變なことを致した、彼奴ア盗賊だ」亭「へエー、なに盗賊と仰しやいますのは…」平「實は亭主聽いて呉れ、斯ういふ理由だ」と、亭主に話を致しますると亭「へエーシテ貴息は何處でござりまするか」平「實は奥州仙臺の侍」といつたのは詐言だ、誠をいふと、乃公は槻木の百姓平兵衛の伴の平次といふ者ちや」亭「へい其様なら、貴息は私を一杯瞞着しなすつたのですね」平「爾うちや、實は豪がろうと思つて…」亭「モシ申戲仰しやツちやいけません、其様なことをなさるから、盗賊にやられますのです、其處で貴息は其様に小さい身體をして、一人で何處へ入らつしやいます」平「江戸へ行くのちや」亭「衣服もなけりやア、金銭も無しに其様事、逆も江戸へ行けませぬよ」平「亭主如何したものだらう」と平次大分困つて居ります、亭「氣樂な言を仰しやいますな、ちやア仕方がござりませぬから、親御の方へお報知せ申しませうか」平次「馬鹿云へ、江戸へ行かうと思つて、漸つとのこと出で来たのちや、それにお前斯様な所で、斯う斯ういふ理由だといつて報知せりやア、折角思ひ立つたことも水の泡だ」亭「夫れちやといつて、裸體で道中は出来ませぬまい」平次「ナニ、乃公ア裸體でも江戸へ行くんだ、マア物を

考へて見い、旅費が有つて行くのなら、何もその人の技術が有るといふ理由ではない、夫れやア至當ちや、金子がない衣服もない、また先方へ行つても、行く所がないと云ふ所へ行つて、一番出世をするといふのが眞個の立身ぢやないか」亭「へい夫りマア爾ういふやうな譯ではござりませんが」平次「ここで済まぬが、最う奪られた物は仕方がない、依つて宿錢だけ貸して置いて呉れぬか、乃公が立身したら返済して遣る」亭「へいマア」目的にせずと待つて居ります」平次「其處で氣の毒だが、渡船賃を少々貸して呉れ」亭「へいマア宜しうござります」平次「氣の毒ちやが草鞋を一足なア、乃公の足に適ふやつをば呉れ」平「モシ宿錢は貸して呉れ渡船賃も呉れ、草鞋までは無いちやアござりませぬか」平次「何も借限りちやアない、立身をしたら返すのだ」亭「へい…出世と云ふやつがなア、何うも目的になりませぬが、マア宜しうござります、貸して上げませう」平次「夫れから大變い氣の毒ちやが、握飯に梅干を容れて、小さいのちや不可ぬから、大きなのを三個ばかり入れてお呉れ」亭「オヤ、克うマア其様なにははれませぬ、だが仕方がござりませぬ、宜しうござります」といふので、亭主もなかく面白く見えて、平次がいふ通り草鞋を一足、握飯が三個、小使錢を十文を出しまして、これを與ることに致しました、平次は厚く禮を述べ、襦袢一枚で以てその三品を携へて出て参りました、何うも氣樂な者でござります、漸次と歩つて参りますると

晝の間は宜しうございましたが、日が暮れて参りますと衣服はなし、腹が空つて来ます、加之に泊る所がないと来ましたから、飢餓い腹を抱へながらブラ〜と参りますと、入相の鐘がゴーンと鳴つて居る、四邊は何だか淋しく相成りました平次「アアお父ちゃん毎々ながら物語りに、旅行をして入相の鐘を聞くと、燈火の消える程淋しいものはないと、仰しやつたが眞個に爾うぢやない、乃公も晝間は何とも思はなかつたが、日が暮れて斯様に淋しくなると、お父さんのことを思ひだすわい、アア今頃はお兄ちゃん、學問をしてお居でなさるだらう、またお父さんは緩り寝てお居でなさるだらう」と、思ひながらも漸次と出て来ますと、最う腹が減つて一歩も歩けませぬ、其處で一軒屋の軒に這入りまして寝やうと致しますと、犬が八方から、ワン〜ワンと吠えて来ますから、寝ることが出来ませぬので、已むを得ずその村を出て、悄悄と歩つて参ります折柄、何處かに迷子があると見えまして、遠音に聞える人の聲。〇「迷子の迷子の三太郎やといふ聲が路間に響いて物凄く、如何な平次も慄と寒氣が差して来て、平次「アア旅行は憂いもの辛いもの、可愛い子には旅をさせろとは好ういふたものだ、これを思ふと、親の膝下に居るほど實に結構なことではない朝は朝星夜は夜星火母が働いて、吾等を満足に育て、下さるが、これを思ふと親の恩といふものは、實に勿體ないものだナ」とその點はまた小兒でございますから、親のことを思ひ

出しまして、ホロリと涙を溢しながら出て参ります、偶爾と何方を見ますると、一つの地藏堂がございます、そいつを見附け出した平次は平次「ハ、ア彼所に何ぞものが供へて有るかしら：と、思ひましたから、衝々と地藏堂の前へ来て見ると、固くなつてはゐますが、二ツの餅が供つて居る平次「ア有るある、有難いなと、その餅を手に取上げて、ムシヤムシヤと喰べました、何しろ最う固くなつて味も何にもございませぬ、けれども空腹いときに不味い物なしといふ、俚諺がございます通り、平次は何とも思はず、只瞬くうちに喰つて仕舞ひ平次「ヤ、美味か



つた』最う一ツ有るかしたらと、思ひまして探つて見ますると、何か斯う固まつたものがござ
います平次『ヤア待て待て有るわい、こいつは有難い』と突然口中に入れましたが、直に吐出
して仕舞ひ、平次『ベツベツ〜、悪いことをする奴があるものぢやアな、餅と思つたら粘土
の捏ねたやつを供て置きやアがつた、酷い事しやアがるわい』ア〜とつぶやきながら平次『併し
咽喉が乾いたが、何處かに水がないかしらと、不圖見ますると花筒がございます、その花筒
を抜いて溜つた水を一口飲んで、腹を撫りながら地藏堂の内方へ指して寢込んで仕舞ひまし
た。

(第六席)

平次地藏堂に追刺を捉え實母の仇を討つ事、并に平次

江戸表へ出づる事

平次は、一ツの餅で餓ゑを忍び、花筒の水で渴を醫め、その夜は地藏堂の内方に這入つて、
一夜を過ごさうと、其儘一寝入りいたしましたすと、此時タツタツ〜といふ足音がふと耳に入
りましたから、何であらうと例の花筒を片手に引提げて出て見ますると、闇を破つて二人の
大きな男が、長いやつを引抜きながら難談を致して居りまする。○『サア兄弟向方から来る町人
素直に金を出せば可し、萬一出さなきやア荒療治と出掛けるんだ』△『ム、合點だ、だが昨夜は

頭は好い仕事をしたさうだなア』○『爾うヨ、併しこの仕事の方が大きからうよ』△『左うだら
うかな、何本位持てるだらうか』○『爾うだな、乃公の見込ぢやア多分のことはあるまいが、
五十兩や百兩の金はあると睨んでゐる』△『爾うか、シテ彼人は何者だい』○『爾うサ、ありや
ア見た所が商人の番頭の風だな』△『素直に出したなら人を殺すのはよそうヨ』○『夫りやア爾
うだ、何も人を殺すのが目的じやアねえ、だが悪圖々々云やア仕方がねえから殺害して仕舞
へ』△『成るべくなら穩かに行らうヨ、夫りやア來た〜』と談話をして居るやつを聞いた平
次は平『ハ、ア盜棒だな、ヨシさういふ悪い奴は何奴此奴の容赦はない、昨夜も盜賊に逢つて
俺は大變い目に逢つて居るんだ驚き殺して遣る』と花筒を片手に構へて様子を窺つて居りま
す、斯くとも知らず向ふから山形に重の字が着いた小田原提灯を片手に提げたる一人の町人、
丁度年齢は二十六か乃至二十八九歳でございまして、旅刀を一本帯して少々の荷物を連尺に
いたし町『ア〜急ぎの用で夜道を歩くんだが、何うも夜道といふものは氣色の悪いものだ』と
獨語をいひながら來懸つた、待受けてをりましたる所の兩人の盜賊は、道路の中央に例のビ
カ〜する太刀を抜いて立つて居ります、これを眺めた町人は、早やブル〜顔ひ出して逃
げることも出来ませぬ、○『オイ金を出せ、ぐづ〜吐かしやアがると此刀でお見舞ひ申す
ぞ、早く出せ』町人『へ〜へい、どう仰有つても金といつちやアござりませぬ』△『ナニツ…』

其様な言をいふとお前身の爲めにならねえせ」町人「でも無いものは……」○「ヤア兄弟打斬つて仕舞へ」○「合點だ」といふなりキラリ／＼する太刀を眞甲上段に振冠り、今や町人の腦天目蒐けて斬下すといふ、間髪を容れざる一刹那、斑鳩平次はツと其側に近寄り、片手に持つて居ります所の、花筒を振上げまして今しも町人を目蒐けて斬下さうといふ、背後から腦天を目蒐けて一つ打ん擲りました、擲られて堪りませうや盗賊は、アツといつてその場へ打倒れる、今一人が○「オヤアコン畜生」と平次に斬つて掛らうとする、横に擲つた平次の力量一人の奴は肋腹を充分に打たれて、キヤツといひながら向方へ逃げて仕舞ひました、いま一人が起上つて又もや平次に斬つて掛る奴を、花筒でキツと受けながら臍の處を、嫌といふほど突きましたから痛いといひながら下腹を抱へて○「ヤア豪い奴が出て來たぞ、是りやアマア普通の人間ぢやアねえ、地藏尊の御生れ變りだ……」といひながら道路や田畦の嫌ひなくド／＼と逃げ去つて了りました、平次は莞爾と微笑を含みながら、平次「叔父さん……モシ叔父さん、どこも怪我はありませんか」といはれて町人は両手を合せながら町人「へい坊さん大きに有難うござります、お蔭さまで二つとない生命を助かりました」平「ヤア何をいふのぢや、面白かつたなア」町人「モシ串戯じやアございませせん、何が貴郎面白うござりますか」平「だつてこの花筒でボカーリ打ん擲つて遣つたら、皆んな逃げて仕舞いやアがつた」町人「い

ヤ最うお年に似合はぬ豪いお方でござります」平「併しお前は何處ぢや」町人「へい私は江戸でござります」平「江戸といつた所で廣い、江戸は何處だい」町人「江戸は神田小柳町でござります、私の主人と申しますのは呉服屋重兵衛といふ、私はその番頭でござります」平「ハ、ア左様か、シテ何處へ行くのぢや」町人「へいこれから江戸に歸る者でござります」平「ム、左様か、お前は金を澤山持つて居るさうだナ」町人「へい五十兩ばかり持つて居ります」平「大金を持つて夜中歩くのは險ぢや、併し江戸へ歸るのか」町人「左様でござります」平「何うぢや乃公も江戸へ行く者ぢやが一緒に行かうか」町人「ハハ願つたりかなつたりお供を致すでござりませう」平次「併し乃公は金子が一文もないのぢや、夫れで何卒宿賃だけ貸して呉れぬか」町人「へい／＼それやア宜しうござります」平次「その代り盗賊が來たら、生命を的に乃公が働くから」町人「へい何うかお頼み申します」平次「其處でナ聽いて呉れ……」町人「何でござります、氣色の悪いことを仰しやいますネ」平次「ナニ心配することはない、實は腹が減つて困るのぢや、汝が辨當を持つて居れば乃公に呉れないか」町人「イヤア宜しうござります、旅行をする者は辨當を持つて居ります」と町人は荷物の中から行李辨當を出して町人「坊ちゃんお菜は何にもござりませぬが、何うかお喰ひなすつて」平次「ヤア有難い」とその場で辨當をムシヤ／＼と喰つて仕舞ひ、平次「サア行かう、その小田原提灯は俺が持つて行くから……」と平次は小田

原提灯を片手に提げ、前に立つて行きましたが、漸やく福島の驛の手前まで出て参りますと夜も明けましたが、此處は松原でござりまして餘り人通りがござりませぬ、偶爾と向方を見ますると、松の根に三人の悪い奴が立つて居りますから町「モシ坊ちゃん、向方に悪い奴が立つて居ります」平次「オヤ居やがるナ、待て〜」といひながら凝と様子を考へて居りますと、一人の奴が目早く二人を認めて「ヤイ汝等が前夜地藏堂の前で、大變い目に遇つた奴といふのは向方から来る奴ぢアねえか」△「へい〜頭彼兒でござります」○「オイ〜申戯ぢやアねえせ、彼様なちひさい小兒に仕事に邪魔をせられるなんて、其様な馬鹿な事があるかい、行け〜」△「だつて頭、彼様な小さい奴でござりますが、なか〜豪い奴でござりますせ」○「ナ〜ニ彼様な者が如何するものか、早く行け、乃公が従つて居るから安心をしろい」△「ちやア宜しうござりまする」と配下と見えて二人の奴が、此方を指して歩つて來まするやつを番頭が見て早や顔の色を青紫色に致しながら震えて居ります、平次は泰然自若として、平次「番頭さん」番「へい坊ちゃん何でござります」平次「何うだい今向方の奴輩の談話を聞くと、昨日乃公が擲つて遣つた二人の奴と見えるな」番「へい其様なにいつて居りますナ、併し如何いたしませう」平次「ナ〜ニ安心をしてお居で」と平次は何か心のうちに考へたものと見えまして適當の石を拾ひながら、其石を手拭に包みまして、端の方を自分の指に巻付け先方へ知れぬ

やうに、背後へ匿して居ります、ところへ出て來た二人の奴「ヤア待て、汝らア昨夕地藏堂の前で、公乃等を大變い目に遇した餓鬼だナ」平次「ヤ叔父さん、乃公ア地藏堂の前で大變い目に遇したことはないせ」△「コリヤ馬鹿なことをいへ、サア昨日の返報しかするのに覺悟しろい」平次「叔父さん乃公ア何にも知らねいのだヨ」○「馬鹿云へ、汝は乃公を擲つたに違へぬ、これを見る、紫色になつて居るわい」平次「其様なことをいつたつて、乃公は知らないヨ」と云ひながらジツと近寄つて來まして、向方の油断を見澄し、右の手拭に石を包んだやつを以つて、一ツ打擲りました、すると一人の奴眼から涙を出して、持つて居る刀を投げながら△「アツ痛い、こいつは堪らぬ…」と逃出しました、今一人の奴が○「ヤア友達の敵…」と斬込んで來る奴を、またもや平次は例の手拭でもつて肋腹を目蒐けて打ちつけました、ウムと云ひながら其場へ打倒れ目を白黒に致して居りましたが、漸とのことに横腹を抱いてタツ〜と逃げ出しました、頭といふ奴が頭「ヤア生意氣千萬な小ビツちよ奴…」といふなり腰なる長刀を引抜き、平次に向つて斬つて掛つて來るので、平次は例の手拭の石をリユウ〜振廻して居りましたが、何しろ膽玉の大きな平次でござりますから、自分の體を構ひませぬ、此方は何分にも生命が惜しいものでござりますから、頻りに刀を持つて接遇つて居りましたが、如何なる機會か平次がリユウと振り廻して居ります所の手拭の石が、先方の



刀へ巻附きました 平次「サア占めたぞ」と云ふなり、一生懸命に力を出してグイ〜と引張つて居ります、此方は刀を奪られてはならぬと、同じく必死の力で引張つて居ります、其中に何しろ刀と手拭のことでございますから、引張る力でバツと切れて仕舞ひました、其處で先方の頭と云ふ奴は、奪られまいと力を入れて居つた所でございますから、力が餘つて後方へバツタリ打倒れ、起上らうとする奴を起しもあへず、斑鳩平次はバラ〜ツと賊魁の腹に跨がり、ワツと云ひながら左の頬邊へ噛附いた、何がさて一生懸命に噛附いたのですから堪りませうや頭「痛い」といふ奴を、又もや右の頬邊へ嫌といふ程噛み附まして。平次「ヤイ、汝は相馬中村で乃公と一緒に泊り込み、乃公の寝て居つた油断を見澄して、大小刀衣類金子まで奪つて逃げた盗賊ぢやナ」頭「ヤツ：：ぢやア彼の時の坊ちやんでございましたか」平次「爾うだ、サア早く金子を返せ」頭「イヤ宜しうござります、金子を返します、坊ちやん、併し金高は何程でございましたか」平次「イヤ他人の金子を奪つて置きながら何程といふことがあるか、サア早く返さぬか」頭「だつて幾何でございましたか」平次「奪つて金の高が分らぬといふことがあるか、早く返せ」頭「奪つたことは取りましたが、幾何有つたか分りませぬ、何うか貴息から仰しやつて下さいませ」平次「ぢやア仕方がない、三十五兩だ」頭「オヤツ：：坊ちやん、申談いひなすつちやアいけません、十八兩でござりましたヨ」平次「サウ汝は知つて居

つて乃公に尋ねたのだな』頭『お前さんの懸値が、餘まり酷いちやアござりませぬか』平『知れた事を云へ、汝知つて居つて他人に尋ねるから、懸値をいつたのだ』頭『其様な無茶な懸値がございますか』平次『ぢやア早く十八兩返せ』頭『イヤ承知致しました』と漸う起上りまして、おのれの懐中に手を入れ取出しました皮財囊、平次『オヤツ』と平次は驚きましたといふのは、この皮財囊に(磯谷)といふ字が記してござります、豫て平次においては實父布施藤十郎から、汝の實母といふ者は、同藩士磯谷勇といふ人の娘のお琴といふ者である、そのお琴が殺された時に持った皮財囊に、磯谷と記してあつたが、その財囊は盗賊が殺して持つて逃げたものである、萬一他日磯谷と記した皮財布を持つて居る人を認めたら、其者こそ實母の仇敵であるから、必らず討取れよ』といはれて居りました、平次は心の中で『ハ、ア扱は此者こそ我が實母の仇敵に相違ない、汝の爲に實母を殺されたばかりに、我は實の父母の側に居ることも出来ず、他人の手に育てられたのだ、憎さも憎き盗賊奴と思ひましたから、前に手下の儕輩が逃げる折に、落して置いた刀を拾ひ、賊が今しも油断をして、皮財布から金を取り出さうとして居る處を窺ひ、突然ヤツと云ふと肩先目覚めて斬込みました頭』アツ何うするのだい』平次『ナニツ何うするも斯うするもあるものか、おのれ忘れもしまい十ヶ年前の事であるが、汝は我が實母を殺した覚えがあらうがな』と、いはれて驚く盗賊エ、ツ：

馬鹿なことをいへ、汝の實母を殺した覚えはない』平次『其方こそ馬鹿な事を申せ、槻木と岩沼の間の繩手地蔵堂前において我實母を殺し、只今持つてゐるところの皮財布を奪つたであらうがな』頭『エーッ……其れぢやア、彼の時の赤兒は其方であつたか』平次『如何にも乃公だ、サア、實母の仇敵覺悟をせよ』と、刀を振り翳して斬込んで參りました、賊は致方がございませぬ。』おのれ……』といふなり平次を組留めやうと焦慮りますすけれども、何しろ肩先を一刀斬附けられてゐるから勢ひがない、けれども同じく腰なる一刀を引抜いて、チャリと斬結んで居ります、そのうちに漸次勢が盡きて来る有様、ヨロ／＼ととするやつを平次『コン畜生……』といふなりザクリ賊の片足を斬り落しました。』アツ』といふなりその場に打倒れるやつを、起しも立てず飄然飛込んで馬乗に跨り、氣管を目覚めてブツリと突通しました。』ウツア……』といふのが此世の別れその儘息は絶えてしまひました、平次は徐かに刀の血汐を拭ひ、平次『冥途にござる母上さま、これにて修羅の妄念を晴して下され』と兩手を合して伏し拜み、懸て身装を繕ひながら、番頭は何うして居るかとお向方を眺めると、番頭は餘りの恐怖に、ブル／＼と慄ひながらも目をバチツカせて人形の如く突立つて居ります。平次『オイ番頭さん』番『へ、イ』平次『面白かつたらう』番『モシ坊ちゃん、貴息到頭お殺しなされましたなア、大變なことになりましたせ……』平次『なアに心配することはない、此奴ア

私の母親さんの仇敵だから殺したのちや」番「へエ……だが人を殺したら矢張り殺人罪になりますせ……」平次「イヤ其様なことは安心して居なされ」と兩人が話を居る處へ、通り掛つたのは役人衆でございませぬ「コリヤ、其方共は何故あつて人を殺したのだ」平次「實は斯う斯ういふ仔細でござりまする」と一伍一什の物語りを致しました、其所で役人は「成程爾うか、ちや兎も角役所まで来い、爾うして申開きをするが宜い」といふので平次は致方もございませぬ、番頭と共に役人に連れられて役所へ出まして、前條の通り申開きを致しますと、役人は殺されて居るところの賊を調べまして「イヤ宜しい、如何にもこの者は當地を彷徨くところの悪人である、殊に其方も實母の仇敵を討つたとして見れば、差支はないから早速出立するが宜しい」と平次には何のお咎めもなく、その上賊の持つて居たところの皮財囊は、その儘平次に下し置かれましたので、平次は大きに悦び、番頭と共に難なく江戸神田小柳町、吳服屋重兵衛の宅に参りました、番頭は主人に如上の次第を悉く物語りを致しましたから、主人重兵衛も舌を捲いて感心いたし、そのまゝ、風客同様、暫らくは遊ばして置くことに相成りましたので、平次も何處を目的といふ宅はなし、これ幸ひとブラ／＼遊んで居る中にも、何といふ人が剣道が巧いか知らんと、毎日々々彼方此彼を捜して居りまする、そのうちに冬物の賣出しとなりましたが、只今は警察が行届いて誠に結構でござりますが、何しろその時

分は幕府の政治をいたす時分でございまして、何うも悪い奴輩が徘徊をいたして、屋敷の折助とか何とか云ふ者が出て来まして「オイ一寸この切をもつて行くヨ」といふ風に、店に吊つてある所の端物を持つて行くといふ有様、爾ういふときに店の者が「モシ其様なことをして貰つては可くませぬ、何うか代價を……」「オイ／＼この印が見えぬかな、乃公は何處何處の仲間だ、代價は後から取りに来るが宜い」とその儘行つて了う、其處で店の者が後から取りに行きますると、此方は知らぬといふ一點ばり、そいつを餘り喧しくいふと、手討にいたすと云ふことで、到頭泣寝入りになつてしまひます、夫れがために江戸の吳服商では賣出しの當日は、多分の金を出して店頭で博奕打を雇ふて置きました、悪い奴が来て、店の反物でも持つて行かうとすると「オ、兄弟、乃公の持場だ、何うか其様なことは堪忍して呉れと聲を掛ける」「オ、ア爾うか」とその儘何事もせず、行つてしまふといふやうな譯でございませぬ、そこで重兵衛の宅は大きい吳服商でございませぬので、一人では行かぬといふので、二人ばかり博奕打を雇ふてあります、今日しも冬物賣出しの當日なかく賑かでございますから、平次は店の次の室で外の方を眺めて居りますると、兩人の奴が頻りに談話をいたして居る「オイ／＼兄弟」△「オ、何だ」○「何だといつて何方を見ろよ、ソレ／＼来やがった」△「何が来たんだい」○「何がつて、ソレ拘摸が来やがった、ア、無益々々」○「何が無益なんだ」○「見

ろい向方を……ッラ附きやアがつたな、ア、可哀想に彼の奥さんと娘さんは……△△ム、眞に……オヤ、彼れちや叶はねいな。」といつて居るうちに、拘摸が奥さんを左右に搦んで、一人は左の方に附添うてブラ／＼行くうちに、いま一人の同類が何方から来るなりドツと奥さんに突當つたから、奥さんはヨロ／＼とよめきながら、右の拘摸に倒れ掛つた、すると右に居つた奴が「オイ何うするんだ」といふなりハツと突きますと、奥さんはまたも左の方へヒヨ／＼と寄り掛つて来る、その處に乗じて左に居つた拘摸が、奥さんの帯の間にある財囊を奪り、背後の方に年期小僧のやうな風體をして居る奴へ渡しました、すると其奴がおのれの背中へ財囊を入れ、その儘向方へ喰はぬ顔でサツサと行つてしまふ、此方は奥さんが何も其様なことは存じませぬから、漸と踏止つて奥「これは失禮を致しました」とこれまた向方へ行くといふ有様、それを眺めた斑鳩平次は、平次「オヤッ酷いことをしやアがる」と衝々と戶外へ飛出すが早いか、素知らぬ風で行く年期小僧のやうな風體をして居る奴の横ツ面を、嫌と云ふほど一つ投附けました、アツといふなり眼をバチ／＼さして吃驚して居る、その間に平次は其奴の背中へ手を入れ、例の財囊を取つておのれの懐中へ納め、漸と氣がつく拘摸の襟首を掴んで、ビシヤアリ投附けた、その儘に呉服屋重兵衛の宅へ飛込みました、此方は投附けられて一生懸命起き上るが早いか、タツ／＼と逃げ出してしまひま

した、平次は彼の奥さんの前へ参り平「エ、奥さん……」奥「ハイ／＼私でござりまするか」平次「へい貴女でござります、一寸お尋ね致しまするが、貴方は何か紛失したもののか、或は奪られなすつたと云ふやうなものはございませぬか」奥「ハイ……何も別に私は……」偶爾帯の間に手を入れて見て、奥「アラツ……コリヤマア、何うした事であらう……コレ娘や」奥「ハイお母さま何でござります」奥「お前さんは財囊を御存知ないかえ」奥「貴母が持つてお出でになりました」奥「マア夫れが無いんだヨ」と母子諸共懐中袂をさがして驚ろいて居ります、平次は莞爾笑ひながら平次「モシ／＼その紛失した財布といふのは、此品でござりませう」と例の財布を出して見せまると、奥「ハイ如何にも其品に相違ござりませぬ、して其品を貴方が何うして、持つてお居でになりますので……」平「いや御不審は御道理……實は先刻貴女へ突當つた奴が拘摸でござりまする」奥「エーッ」平「サア彼奴は巾着切で、お前さんの財布を奪つたやつを、私が回復したのでござりますから上げませう」奥「マア夫れは／＼何うも有難存じまする」と財布を受取りながらその儘行かうと致しますから平次「ア、モシお主婦さん、一寸待つて下さりませ、成程お返し申せば貴女の物でござりますから、決して私は兎や角う申しは致しませぬが、何うも一時でも貴女の物を、私が懐裡に納れたものでござりますから、何うもその儘で歸つて戴いては、お歸りになつてから金子が足りないとか、何とか云ふやう

なことがあつては、私も氣が悪うございます、萬一お歸りになつて、爾ういふやうなことがあると、扱は彼の小僧が親切に見せ掛けて、内實は盗んだものであらう杯と、思はれるに相違ない、それが町人か百姓のお主婦さんでござりましたら、爾ういふ處へ氣も注きは致しませぬけれども、お見受け申せばお侍のお主婦さんならば一應は檢めある筈、一度お檢ためを願ひます」といはれて奥さんは、子供に揚足を取られ紅赤な顔色をしながら奥「これは失念を致しました、決してお疑ひ申すでござりませぬが、爾うまで仰しやれば、一應檢ためまして戴きます」と財布を開いて中を改め奥「エ、お金は不足ではござりませぬ」平次「在りましたか」奥「ハイござります」平次「在れば結構でござります、ちやアお歸りなされませ」奥「併し貴息はこのお宅のお子さまでござりまするか」平次「ハイマア其様なもので……」奥「オホ、ホ、して呉服屋さまで……」平次「左様でござります」奥「左様なれば御免下されませ」と店へ這入つて來まして種々と買物をいたし、奥方はお嬢さんと共に歸つてしまひました、後で彼の店番に雇うてある俠客者が「オイ坊ちやん……坊ちやん」平次「何だい」何だいちやアありませぬ、お前さんのやうな者がありますか、能く物を考へて見なさい、彼の奥さんは誰と思ひなされる」平「おれは知らぬ」〇「お前さん神田小柳町に道場を開いてござる、日本一の劍術者で駒木根八兵衛友房先生といふ、九州の大天狗といふくらゐのお方で、江戸三十六道場あ

るその中での取締をして居らつしや
る、先生の中でも先生と呼ばれる人の
奥さんだヨ」平次「ハ、ア爾うか」〇「コ
レ沈着いて居る場所ぢやアない、いま
奥さんの歸りがけの口上を聞いて見る
と、こりやア騒動の事だせ」平次「騒動
……して奥さんは何といつて居つたの
ぢや」〇「何でも子供の分際をして、私
に恥を搔かしたから、宅へ歸れば旦那
さまに話をして、彼の小僧を今に何う
するか待つて居といつたが」平次「真個
か」〇「真個だとも」平「大變いことにな
つたア、ちやア萬一憤つて來たら彼の
子供は奥州へ歸つたと、都合よくいつ
て呉れ」〇「其様なことがいへるもの



か「平次」いへの事があるものか」と、兩人が頻りに話をいたしてゐる處へ、折しもあれ駒木根八兵衛友房先生、頭髪は筑前にして、長い大小落差し、手には南蠻鐵親骨の扇を携へ、高下駄を穿いて、吳服屋重兵衛の戶外へ來ました、これを見た店の者「モシ坊ちゃん、ソラ駒木根先生が來ましたせ」平「エーツ來たか、ぢやア叔父さんお前の背後へ隠して呉んナ」と平次は俠客者の背後へ隠れて居ります友「ア、免せ」○「コレハ、サアドウかお上り下さりませ、毎度有難う存じまする、何か御入用で……」友「ア、イヤ、拙者は別に品物を求めに參つたではない、只今拙者の妻子が賊難に遭はうとする所を、お助け下された小兒があると聞いて、取敢ずお禮を申したいと推參いたした譯、何うかその小兒に一應會はせて下され」と叮嚀に申し入れました。

(第七席) 平次駒木根八流の奥儀を窮むる事、并に平次大森主膳の道場を破る事

物蔭にて友房の挨拶を聞いて、平次は流石は子供丈けに案外の思ひを致し平次「オイ、何も憤りに來たのではないぢやアないか、お禮を申したいといつてるのだ、ヨシ一ツ禮を受けて遣らう」と衝々とその席へ出まして平次「ヤアこれは、駒木根大先生とは貴方でござります

るか、お姓名は豫て承まはつて居りますが、お眼に掛るは今日初めて……何うも子供に似氣なき難かしく挨拶をしたので、友房先生は吃驚いたし、二三尺横に飛び上つた位でござります平次「エ、賊難をお救ひ申したといつては、嗚呼ケ間敷でござりますが、只だ賊を追散つて金子を取返して上げました許り、お禮なんぞと申されましては、甚だ恐れ入ります、先づ何は兎も角此處は端近でござりますれば、マア、奥へお通り下されませうやう」友房「でござるか、挨拶は後へ廻し、しからは御免を蒙ります」と駒木根八兵衛友房先生は、呆氣に奪られながら奥の一室へ通りまして、例の風呂敷から菓子箱を出し、その上に名札を載せ友房「エツ餘り失禮ではござるが、唐突の際何かとは存しましたが、一刻も早くと心得、取る物も取敢ず他から到來致した品物ではござれど、お納めの程願はしう存じます、只だ拙者の名儀を知り賜はんことを願ひたく、引出物の代りでござる」と出すを平次「これは、御丁寧なる御挨拶、折角のお志辭退いたせば、却つてお志を無にする道理でござるから、有り難く頂戴仕まつります」と名札を取つてこれを眺め平次「ウム……駒木根八兵衛友房……成程……」番「名札を懷裡に納め平次「ア、番頭……」番「エ、坊ちゃん、何御用でござります」平次「一寸硯箱と白紙を持って來て呉れ」番「ウムえらがつて居やアがる、食客の分際で」平次「何を申すのぢや」番「イヤ此方のこと……」とつぶやきながら、硯箱と白紙を持って來ました

平次は白紙を名札形に載りまして、サラ／＼とおのれの姓名を書きまして、いま貰つた菓子箱の上に載せ、駒木根先生の前へ差出しまして平次「エ、駒木根先生何かはと存じましたが、餘り突然の際他から到來した品物ではござるが、只た私の名義を知り賜はんことを……」といふものだから駒木根先生ニツコと笑ひを催しながら友「でござるか、イヤなか／＼面白の子ちや、いま拙者から遣かはした菓子箱を出すとは……こりやア餘程伶俐な子ちや……エ、併し此の御名刺を見ると斑鳩平次とござるが、萬一御身は斑鳩平兵衛殿の御流れでござらぬか」平次「ヤア如何にも御意の通り、斑鳩平兵衛の次男でございます」友「ウム……」平次「私の父は只今奥州仙臺から、少し離れた槻木といふ處で、武士の道を廢め百姓と相成つて居りまする」友「ア、左様でござるか、加藤家十勇士の一人狸平兵衛と申さるゝお方が、主家斷絶のために農民とまでお下りなされたか」平次「ハイ」友「イヤ夫れも却つて御氣樂でござらう、だが其許の父御平兵衛殿とは拙者兄弟同様の交際をいたして居つたものでござるが、加藤家斷絶の際に到頭お別れを申した限り、何うしてござることやら、頼と音信を絶ちましたやうな次第、御無事とあれば重疊々々、しかしその許は當地へ何等の御志願あつてお出でになりませんでしたのぢや」平次「實は私武藝を鍛練いたしたく、それがため罷り越してござる……」友「ウム師匠は最早お取りになりましたか」平次「ハイ、何うも私の眼に叶ふ師匠をまだ見出しませ

ぬ……」友「ム、成程、しからは失禮ながら御指南と申せば嗚呼間ヶ敷ござるが、劍道の御相談を致しまするから、些とお來なされい」平次「ア、流石は駒木根先生だけあつて御謙遜、しからは貴方の道場へ明日から推參しまするから、宜しくお願ひ申しまする」此處で別れを告げ友房は歸られました、これから平次は、翌日から辨當を持って毎日雨風の厭ひなく稽古に通つて居ります、何しろ朝は暗りから出まして平次「ヤア先生、最う御眼覺になつては如何でござります」友「オ、平次殿が大層早いではないか」平次「なか／＼早いどころではございませぬ、サア何うか一本願ひまする」友房先生も仕方なくお起に相成まする、と平次は平次「ヤア先生お洗面の水は、此處にござります」友「オ、有難い……」流石平兵衛どの、息子だけあつて、萬事に氣が注ぐわい」と他人に一本教ゆるものは、平次には三度も四度も教ゆるといふ有様で、丹精を抜んで教へて居ります、此方は此方で平次が、一生懸命に稽古を致しまするから、漸次技倆が上達いたし、その年齢十八歳になりましたときは大概駒木根八流の奥儀を大略覺えること、相成つた、抑もこの駒木根八流と申しまするのは、第一が火術、第二が馬術、第三が水練、第四が忍術、第五が手裏劍、第六が棒、第七が劍術、第八が體術でございます、斯ういふ八流を覺えるのでございますから、餘程長らく掛らねば流儀を覺ゆることは出來ませぬ、けれども平次は人と違ひ頗る熱心でございますから、年齢十八歳になるまで

に大略八流を覚えましたが、けれどもまだ奥儀を習ふことは出来ませぬ、ところが或年のこと
 でございましたが、駒木根先生においては、近頃少し身體が不快いので、その代稽古を平次
 がいたして居りました、一日のこと一通の手紙が来ました、その手紙は何處から来たかと
 申しますると、駒木根先生の兄の八左衛門友成といふ人がございます、その友成が九死一生
 の病氣であるから餘計ない兄弟、一度死目に逢ひたいといふ、赤紙附の手紙でございます、
 そこで駒木根先生も行きたいは山々でございますが、何しろ此方も病氣でございますので
 平次を膝下へ招ぎ友「實は斯様々々である、就いては乃公が名代の其方、奥の供をいたして
 参つては呉れまいか」平次「イヤ承知仕りました」といふので、これから奥さんの供をいた
 して、平次は一人の仲間を伴ひ、兄八左衛門友成の住所、京都を指して参ることに相なりま
 した、道中長の旅路も恙なく京都へ着を致しました、種々介抱を致しましたところが、心配
 をした程でもなく、日々に病氣全快をいたして参りましたので、皆々大きに喜んで居りまし
 たが、全快して見ると奥さんも、平次も江戸の方が氣に掛りますから、友成に別れを告げ、
 平次は奥さんの供をいたし、江戸神田小柳町駒木根先生の宅へ歸つて参りましたが、常に門
 に懸けてございまする看板がございませぬので、平次は不審に思ひながら玄關へ掛りますと
 下僕の熊助といふのが飛出しまして「熊「ヤア若先生、お歸りなされましたが、旦那さまは貴

下のお歸宅を待つてお居でになります」平次「爾か、併し熊助、表に看板がないではないか」
 熊「へい御座いませぬ、それに就きましたは、段々と仔細がございませぬので……」平次「仔細
 がある、全體何うしたのぢや、看板といふ物は片時も下すものではない」熊「へいそれが何
 でござります、この神田小柳町三丁目に道場を開いて居る大森主膳、神保源吾といふ者がご
 ざいます」平次「ム、それが何うした」熊「其人が兄弟打揃つて道場を開きました、頻りに弟子を取
 らうとしてゐましたが、弟子が一寸も参りませぬ、そこで先生は御病氣、貴下は京都へお出で
 になつて指南する者がないところから、門弟のお方にもツイ休んで貰ひました」平次「ウムウ
 ム」熊「ところが其點を附込んで、兄弟のものが揃つて参りまして、先生の御病氣を知りつゝ、
 看板掛の立合をしやうとすることになりました」平次「フム……」熊「ところが先生は御病氣の
 ことでございませぬから、段々仔細を申して立合をお断はりに相成りました、すると兄弟の者
 が出放題にも馬鹿なことをいへ、我々兄弟が恐しいから、僞病を遣ふのであらうと申します
 ので先生は、イヤ決して作病ではござらぬ、病氣の癒り次第にお立合を申さうと申されまし
 たが、作病に相違ない、この看板は病氣全快まで預つて歸るといつて、到頭看板を下して持
 つて歸りまして、今じやア自分の門外に放つて置き、雨曝にしてあるさうでございりまする
 世間の人が駒木根先生は最些と豪いお方だと思つて居たが、彼様なことをせられて黙つてゐ

るやうでは、矢張り大森兄弟の方が豪いと見える、何故看板を取返しに行かぬであらうと市中では大笑ひ、それがために門弟衆も、今ぢやア大森の方へ取られて先生は病氣ながらも、非常に残念がつて貴下のお歸宅を毎日指折敷へて待つてお出になりますので：』と聞いて平次は見る／＼うちに、髪逆立ち兩の拳を握り詰め平次「エーッ：それは大變だ」といふなり突然奥さんと共に奥の一室へ参りました、駒木根先生のの前へ兩手を支へ奥「旦那さま只今歸りましてござります」平次「先生只今歸宅仕りましたござります」といふ聲を聞いて駒木根先生大きに悦び友「オ、奥も歸りやつたか、平次も戻つて来たか、ア、能く歸つて呉れた、残念ぢやわい：無念だわい」と嬉し泣に、涙をホロリ／＼と落してお居でになる、平次も師匠の胸中を推察いたし、同じく無念の齒切りをしながら平次「恐れながら御胸中お察し申します、熊助から承はり私は残念に存じます、貴師さまの御名代と申しては嗚呼ケ間敷うござりますが、これより私が先方へ参りまして、看板掛の試合をいたし、彼等兄弟を打つて打つてうち倒し、彼等の看板を下しまして看板を取返して参りますから、何卒暫時お暇を願ひまする」友「ア、能くぞ申して呉れた、然らば何分にも頼むぞよ」平次「心得ました、では行つて参ります」と未だ旅装も解かぬうちに、立ち上つた斑鳩平次、奮然として床にございまして、木刀を執より早く戶外へ飛出しました平次「ヤア熊助」熊「へい」平次「これから大森の道

場へ乗込み、看板を取返しに行くから其方も準備をいたして續いて来い」熊「宜しうござりまする」といふので、熊助、其跡に續いた、間もなく大森主膳の道場へ参りますると、平素は至極閑靜でござりますが、近頃は門弟が出来まして、駒繋ぎ場には十頭ばかりの駒がつないである、内方ではお面：お籠手といふ勇ましい掛聲、なか／＼賑かでござります、平次は玄關へ突立ち、平次「頼もう」と案内を乞ひますると、取次が出て来まして「ハ、ッ何地の何人でござります」平次「拙者は神田小柳町一丁目に道場を開いて居る、駒木根八兵衛友房の一門弟斑鳩平次でござる、大森どの御在宅ならば看板掛の立合、師匠に代つて推参をいたしてござる、宜しくお取り次を下されたい」いはれた取次は屹驚仰天、その儘奥の一室へ走つて参り「エ、先生申し上げます」主膳「ヤア慌だしい何事ぢや」「イヤ最う大變でござります」主膳「大變と申して何事ぢや」「何うも驚きました」主膳「何を驚いたのぢや、早く申さぬか」先生周章ぢやア不可ません」主膳「拙者は何も周章では居らぬ、其方が狼狽へて居るではないか」爾でござりますか：主膳「爾うでござりますかもないもんぢや、早く申せ」主膳「實は何でござります、只今斯様々と申して、斑鳩平次といふ者が、看板掛の立合を申込んで居ます」主膳「エーッ、それぢやア何か、駒木根の小天狗と云ふ、平次が出て来たか」主膳「へい」主膳「そいつア大變ぢや、その平次と申す者は本國へ立歸つて、二度と再び當江戸

へ來ぬ筈ぢやアないか」○「私は左様なことは存知ませぬ」馬「どうも大變いことになつた、平次が來ては到底敵はぬ、何うしやう源吾」源吾「どうも仕方がないから、病氣とか不在とか仰しやいませ」主膳「では不在と申して呉れ」○「その何で、只今在宅と申して置きましたので」主膳「何うも困まつたなア、ぢやア病氣と申さうか」○「でも先生、貴君方が先方へ來らしつやつたとき、僞病ぢやといつて看板をお持ち歸りになりましたらう、だから病氣なんていたつて、平次といふ奴が承知致しますまい」主膳「それは爾うだ、ぢやア仕方がない此方へ呼べ」○「大事ござりませぬか」主膳「構はぬ」最う斯うなつたら百年目だ、呼べ、何のまだ年齢が若いといふことであるから、如何に技倆が出来ればとて、門人共を相手にさし、そのつかれたところを拙者が一本参るとすれば大丈夫じや」○「では呼んで参ります」と取次は玄關に出て参り○「エ、どうか此方へお通りを願ひまする 平次」でござるか、しからばお許しなされい」と怯す臆せず勇氣凛々と一室へ通りまして平次「ヤア大森どの神保どの、先以て御機嫌の體を拜し恐悦に存じます、かくいふ拙者は駒木根八兵衛取房の門弟、斑鳩平次と申す者でござる、師匠の代理として、今日は看板掛の立合を願ひたく推参いたしましたでござる、どうか一本のお立合を願ひます」と慇懃に挨拶を致しました、主膳「ハ、ア左様でござるか、拙者は仰せの如く大森主膳、神保源吾の兄弟でござる、以後お見識り置かれて宜しうお願ひ申す、

ついでには御申込の儀承知をいたしたが、拙者の作法として、他流試合は先づ門弟から願ひますから、左様御心得下されたい」平次「承知 仕りました」と平次は袴鉢巻の準備に及び、袴の股立を高く取り道場へ立出でましたが平次「ヤア御門弟、拙者は斑鳩平次と申す未熟者でござる、何うかお手柔かにお願ひ申します、何誰と對手は選びませぬから、我と思ふお方は遠慮なくお出なさい」といはれて門弟共は互ひに顔見合せ ○「モシ彼は駒木根の小天狗といはれる、平次といふ者でござる、到底我々は敵ひそふなことはござらぬ」△「如何にも左様でござる」と誰一人出て仕合ふといふ者がなげ平次「サアお出でなさらぬか何誰でも宜しうござる」といつて居るうちに、平次の技倆を知らぬ奴が ○「では拙者がお相手をしたすでござらう」とその場へ出て來たが、ヤツと立上るが早いか、ボン／＼ボンと二三度打合つたかと思ふと平次「お面：：」○「参つた」と退つてしまふ、すると代りの奴が出て來ると、これも間もなく平次「お籠手：：お代り：：」またもや出て來ると、平次「お胴：：お代り、宛で蕎麥か饅頭を喰ふやうにいつて居る、ところが平次も表面では温順しう見せて居りますが、内心はおのれといふ腹立ち紛れに打つてござりますから、打れた奴は皆な紫色に變つて居るといふ有様で妙な面をいたして居ります、最う誰も相手に出る者がなげやうになりましたので、平次は太刀で煽ぎながら、平次「大森どの：：イヤナ大先生、お約束でござる、速かにお立合ひ下され」



大森主膳は最早致方がござりませぬ。濫々ながら木刀を執て出て来まして「主膳」然らば拙者お敵手をいたすでござる。平次「望むところだ、サアお來でなさい」と双方方通り目禮を致しながら主膳「先づ〜」平次「先づ〜と、サット木刀を執て別れましたが双方一足退つて、ヤツヤツと掛聲をしながら、平次はタツ〜と二足三足、主膳の側へ近寄が早い。かボ、ンボーンと二三度打合すなり、真劍捲取りといふやつで、平次は主膳の木刀を



叩き上げた、すると主膳はヨロ／＼とよめくやつを平次「お胴：：」主膳は平次の大力に打たれて、横さまに一間ばかり飛で打倒れた、そいつを平次が「まだ参りませぬか」といふなり、ビュー／＼と五六度力に任せて撲きました、何うも剣法の作法として参つたといふ聲がないと、幾位打れても仕方がござりませぬ、主膳は打れながら主膳「ウーム：：ま、ま、参りました」平次「左様か：：然らば神保どの、お出なされ」いはれて神保源吾は心の中で、今度出たら乃公は打殺されるわいと思ひましたから俄に横腹を抱へながら源吾「あ、あつ、痛い、い、い、エ、平次どの俄の腹痛、何うも残念ながらお立合は出来ませぬ、全快を致しましてから、お立合を仕りませう」とその場逃れの逃口上、莞爾と笑つた斑鳩平次「ハ、ア左様でござるか、こりやア定めし作病でござらう」源吾「イヤなか／＼作病ではござらぬ、全くの病氣でござります」平次「御病氣とあれば致方がござらぬ、然らば御全快まで看板はお預かり申す」と平次においては玄關へ出て参り平次「熊助々々」熊「へい」平次「看板を下して呉れ」熊「ヤア夫りやア最う疾くに下してございます」平次「早い奴だなア、ちや續きなさい」とこれから平次と熊助は駒木根先生の看板と、大森主膳の看板を擔がせまして、師匠の無念晴をして悦び勇んで歸つて参りました熊「エ、若先生、何うも此様な心地の好いことにはござりませぬなア」平次「爾ちや随分愉快ぢやのう、少しも早く立歸つて、お師匠のお喜びする顔を見たいわい」

熊「爾でござります、先生さまの御病氣もこれで全治るかも知れませぬ私は一足お先へ参りますと、熊助は一散走りに駆出しましたが、折柄、向方から旗下と見えまして、一人の仲間を連れて出て来た一人、偶然と熊助の擔いで居る看板を眺め「ア、コリヤ／＼待／＼」熊「へい」○「其方の持て居る看板は、全體夫れは何うするのぢや」熊「へいこれは私の若先生が看板掛の立合をして勝て持て歸りますので」○「ハ、ア、して貴様の若先生とは誰だ」熊「只今後からお歸りになります、駒木根先生の御門人でござります」○「爾か、併しその看板を持歸ることはならぬ」熊「へいならぬと仰しやつてもこれは双方相對上持て歸りますので」○「イヤならぬ、全體彼の道場は拙者が建た物、その看板も拙者の物ぢやから、持歸ることは相成らぬ」熊「だつて貴下：：」○「早く下さぬか」熊「けれども勝て持て歸りますので」○「成らぬと申せばならぬわい」熊「其様な無法なことがありますものか：：モシ若先生々々々」といつて居る處へ、平次が少し後れて歩つて参りました平次「熊助何うしたのぢや」熊「へいこのお方が看板を持つて歸ることは成らぬと仰しやいますので」平次「ハ、ア夫れは全體何ういふ理由で：：」熊「斯う／＼仰しやいます」平次「ウーム：アイヤ貴方は何誰でござる」○「拙者は旗下近藤新左衛門の伴、同苗新十郎と申す者だ」平次「成程、併しこの看板は大森主膳と勝敗を決した上、双方應對上持ち歸るのでござる、承まはれば道場なり、また看板共貴殿がお拵へにな

つたるよし、左れどもこの看板は、大森主膳の名前が記してござるから、萬一この看板に就て御異存がござれば、貴方は大森へお掛合になるが至當と存じます』新「イヤ何と云ふても、持返ることは罷り成らぬ」平次「只無茶苦茶にならぬでは相分らぬ、私は持歸るから左様心得なさい」新「イヤ何うしても相成らぬ、拙者は技倆でも持歸らさぬぞ」平次「ハ、ア是れやア面白、さらば私も腕前で持つて歸ります』新「コリア拙者は旗下だぞ」平次「左様か、貴方は旗下か諸侯かは存じませぬが、理のないことは恐れはしませぬ」新「イヤ吐いたり青二才：：」と大刀の柄に手を掛け、今や拔放さうとする、平次に於ても一刀の柄に手を掛け、双方がチリ／＼と寄らうとする、此時遅れ走せに來掛つた新十郎の仲間金助 金「モシ若旦那お待なされませ」新「イヤ金助制止するな」新「マア若旦那、私のいふことをお聴きなされませ、決して悪くは致しませぬ、成程平次さまとやらの仰しやること一々御道理、貴方は大森に掛合ふのが至當、平次さま何うかその看板はお持歸りなさいませ」新「コリア金助、持て歸らすといふことがあるか」金「イヤ宜しうござります、私の胸にござりますちや：：サア御遠慮なくお持歸りなさいまし」平次「左様か、お前さんはなか／＼能く道理の分つた人ぢやの、では持歸ります』と平次は熊助と共に歸つてしまひました、跡で新十郎は佛頂面「コリア金助」金「ハイ」新「何故貴様は制止するのだ」金「恐れながら若旦那、お制止申しましたのは、餘の

儀でもござりませぬ、能くものを考へて御覽なされませ、貴方が劍術を教へてお貰ひなされます大森先生、その師匠の主膳でさへ負るくらの奴でござります』新「ウム、夫れに貴方が幾らお抵抗ひなされたとして、勝てる道理がござりませうや、その場においてお生命をお落しになるは必定でござります、古人も云つて居る通り君子は危きに近寄らずといふのが、この點でござります』とこの金助却々講釋が巧い 新「ナール程：：」金「それよりか一先づ、お歸りなされましてお朋友をお招ぎになりました上、貴方のお父上は馬の御師匠、私がこれから山中原内さまのお邸宅へ参りまして、源内さまが南部の太守さまから頂戴になりました、門人を何うしても乗せぬといふ荒馬、その馬を旦那が乗つて見たいから、何うか貸して戴きたいと申します、左うすりやア先方は悦んで貸すに相違ござりませぬ」新「ウム／＼それから何ういたす」金「そこで私が駒木根八兵衛の道場へ参りまして、實は斯様々々でござります、ついでに一度先生にお乗を願ひたいとかう申します』新「ウム／＼爾すると先方は病氣だからといつて断ります、そこで、しからは御門弟の平次殿でも宜しうござりますから、是非一度乗つて戴きたいと申して御覽なさい、屹度平次が出て來ます』新「成程」金「そこで高田の馬場へ曳出します、夫より前にチャンと貴方は、お朋達衆を連れて銘々馬で先へ行つて待つて居ります』金「ム、」新「爾して平次は何も知りませぬから、その荒馬に乗ると、貴息方が馬を

叩くと見せて、平次を叩き殺すといふ計略、何と巧いものでござりませう」新「イヤなか〜、
 好い工風ぢや、金助感心をいたしたぞ」といつたが、この金助なかく感心は出来ませぬ、
 何故かと申しますると、この金助は奥州白石の城主、片倉小十郎殿の家臣、馬術の指南番を
 以て祿高二百石を頂戴いたして居る野口金太準方といふ人で、馬術の勉強をするに就て主人
 からお許容を受け、當江戸へ参り近藤新左衛門が馬術の名人と聞きましたところから、彼が
 定めて上手であらう、何うか教へて呉れよと申したところで、奥儀は容易に教へて呉れぬと
 極つて居るから、仲間奉公に住込んで、餘所ながら奥儀を盗まうといふ了簡で、仲間に住込
 んで居るので御座います。

(第八席) 平次高田の馬場大難の事、并に大久保彦左衛門山中源

内平次へ好意の事

野口金太準方は、仲間となつてゐた處で中々馬術の奥儀を盗む譯には行きませんので、何う
 か好い工風はないか知らと思つて居る所へ、斑鳩平次と口論を致しましたので、程能くこれ
 を制止して、計略を運らしたのでござります、その理由は平次は駒木根の小天狗とも呼ばれる
 人間、定めて駒木根先生の稲田流の馬術を知つて居るに相違ない、そこで双方に馬術の喧嘩

をさせ、良い方を盗んで了へば、跡は野となれ山となれ、城主へ御指南を申そうといふ了簡
 で、態と喧嘩を奨めたのでござります、だからなか〜感心どころではないので、新十郎に
 おいては爾う云ふ事とは、神ならぬ身の知らう道理もなく、喜び勇んで我家へ歸つて参り新
 『金助其方は早速山中源内殿へ参つて、彼の暴馬を借りて来い』金『承知致しました』といふの
 で、ホク〜もので出て参りましたは山中源内の屋敷、何しろ旗本八萬騎の中で指折の名家、
 千五百石を頂戴いたして屋敷も大層立派でござります、金助は玄關へ参りまして金『お願ひ
 申し上ます』取次が出て○『何者だ』金『へい、私は裏番町の近藤新左衛門の、仲間金助と申す
 者でござります』○『ム、成程』金『エ、主人新左衛門申しまするには、甚だ恐れ入りまするが、
 御當家には實に何うも素晴らしい暴馬があるといふことを聞いて居る、就ては一度乗馴して見
 たいから、拜借をして来いといふこととござります』○『ハ、ア左様か、御主人に聞いて見る
 から、暫時控へて居れ』と取次はこの事を、源内へ申入れますると源『ハ、テそれは恰ど幸
 ひである、拙者も誰かに乗り馴して戴きたいと思つて居る折柄、近藤どのは馬術の指南家、
 早速渡すが宜い』○『畏まりました』とこれから例の暴馬を金助に渡しました、すると源内自
 身が玄關へ出られまして、源『近藤殿の仲間金助とやら、御苦勞ぢやのう』金『へい何う仕つりま
 して』源『何うか御主人へ、宜しく頼みますると傳へて呉れい』金『承知仕つりました』源『何う

せ其方の主人の屋敷では、乗馴すといふ譯には參るまいな」金「ハイ左様でございます、主人の申しまするには高田の馬場を拜借して、乗ると申して居られました」源「ハ、ア左様か、夫は好い場所ぢや、何うか御主人へ宜しく申して呉れ」金「有難う存じまする、左様なれば拜借して歸りまする」と金助は暴馬を率ひ歸つて來ました金「エ、若旦那、馬を借りて歸りました新「オ、金助それは御苦勞々々、マア今日休まして白米を一升程食はして置け」金「畏まりました」とこれから白米一升馬に食はせまして、馬繋ぎ場へ繋いで置きました、何しろ暴馬へ白米一升も喰はしたのでございますから、勢ひ切つてヒ、ンヒ、ンと頻りに嘶いて居る、さて翌朝に相成りますと新十郎が金助を招ぎまして新「エ、御苦勞だが、豫てその方が申した通り、平次の處へ行つて旨く申込んで來い」金「心得ました、御安心なされませ」例の暴馬を率いて歩つて參りましたは、神田小柳町駒木根八兵衛友房先生の屋敷でございませう金「ハイお願い申しまする」熊「ドーレ何方から」金「エ、私は番町の中山源内の仲間、金助と申す者でございます」熊「ハ、ア」金「主人申されまするには、甚ば恐縮ではござりまするが、この暴馬をば南部公から頂戴に及びましたが、なか／＼我々共では乗馴すことが出来ませぬ、就ては駒木根先生は稲田流の、馬術の達人と承まはり及んで居りますから、高田の馬場を拜借して置きましたによつて、乗馴して戴きたい、この儀お願い申して來いとのこととござり

ます、何うか先生へ宜敷お傳への程を願ひまする」熊「左様でござるか、兎に角伺つて見るでござる」と熊助が駒木根先生の室に參りまして熊「エ、旦那様只今番町の中山源内さまから、斯様々々と申して參りました」と聞いた駒木根先生は、何分病氣でございますから、自分が乗馴すといふ譯には行かない、なんでも有名なる山中源内の頼み、殊に南部公の馬として見れば、萬更謝絶る譯にも行きませぬ、そこで斑鳩平次を招ぎ友「其方を呼んだのは餘の儀ではない、只今筒様々々に申して參つたが、拙者は到底乗るとは出來ぬ、よつて其方拙者の名代として乗馴して呉れ」平次「ハツ委細心得ました、師の御名代といつては嗚呼ケ間敷うござりまするが、一つ乗馴して見ませう」とこれから腹帯確乎と結び、馬乗袴を穿ち、後ろ鉢巻に及んで鞍を携へながら玄關へ出て參り平「山中源内殿のお使は、貴方でござるか」金「ハイ」平「左様か、高田の馬場で乗馴しても差支へはないのでござるナ」金「ハイ、此とも都合はござりませぬ」平「左様か然らば」金「といふのでバツと例の暴馬に乗りましたが、他の人ならなか／＼鞍に止まらして置かぬ馬であるが、平次がエイと手綱を締め腰を極めますると、如何なる暴馬も温順に、カツ／＼と前へ進みまする、金助は心の中で「ハ、アなか／＼乗るわい、こいつア面白いぞ」思ひながらも印半纏をばツと肩へ掛るなり、エイ／＼と馬の尻から附いて參ります、此方は平次においては何事もなく、門前で地乗りをし、門を

出ますると一鞭加へて平「ハイヨー」と聲を掛けますると、馬は逸物乗人は名人、高田の馬場を指してカバ〜、何うも疾いの早くないのぢやアござりませぬ當今の汽車も三舎を避けるといふ工合に砂煙を揚て駈出した、金助は息も切れ切れに續いて参ります、程なく、高田の馬場此處まで参りますると、平次は馬の足を緩くしながら、向方を見ると這は如何に凡そ五十頭ばかりの駒に跨つた武士此人ぞ近藤新左衛門の門人で、旗下の二男三男でございます、豫て喋合はして平次の来るのを待つて居るので、夫れ〜聊か馬術の心得のある人ばかりが、二手三手に別れ、頻りに乗廻して居ます、平



「ハテナなか〜美事なもの、併し何うしたものか知ら」と平次思ひながら後方を顧振つて平「ア、イヤお仲間」金「ハイ」平「見受ける處が、馬場で大層駒を賣てござるが何れもお旗下らしい、拙者は浪人者の身分、お歴々の乗てお居でになるところで、駒責をいたして苦しいござらぬか」金「ハイ〜、なアに貴方、山中源内さまの馬を乗ならずといへば、先方は平伏をして、貴方のお邪魔をするやうなことはございませぬ」平「左様か：〜」といひながら、何の氣もなく駒を馬場の中へ入れましたもの、先方は旗下の歴々方、おのれは浪人者のことのでございますから、遠慮の上にも遠慮をして、馬を乗こなさうと致しますると這は如何に、今まで亂乗をして居つた四十八頭の騎者は、バツと一時に三方に別れたかと思ふと、三方から平次の方へ向つて近附いて來ました、平次は心の中で這は怪しからぬと思ひながらも、彼方へ避けやうとする間に、遅れて二二三の騎者は平次を目蒐けて、鞭で打たうとするやつを、平次はおのれの鞭で、バツと外して此方へ行かうとする、けれど何しろ四十八頭の馬で圍んで、責めるのでございませぬからなか〜容易のことではございませぬ、前も後も右も左も、詰め掛け〜平次一人を圍んで打倒さうとするやつを、平次は彼方へ避け此方へ逃れ、一生懸命の働きをいたして居りましたが、前後左右よりビシャーリ〜と打込んで來る亂暴狼藉の仕方に、平次も立腹いたし大音を張揚げて平「ヤアそれなるお方々暫らくお待ち下され、何の意

趣遺恨あつて、斯くも拙者に對して狼藉を遊ばさるゝや、拙者はお歴々のお旗本と見受けられたから、遠慮をいたして居るではござらぬか、遺恨あつてのこととござれば、潔きよく名前を名乗り尋常に勝負をなさらぬか、餘りといへば無法千萬、卑怯なお振舞い……』と呼はりますると、皆々『ヤア汝等ごときものに意趣も意恨もないわ、我は只だ我馬を乗馴すためである、汝を打つのではない馬を打つのだ、併し汝から勝負を望むとあらば、随分對手になつて遣はすから覺悟に及べッ』といふなり晃然抜いたる氷の刃、各目上段に振冠り、平次を目蒐けて斬り込んで参りますから、此方の平次は大いに驚いた、平『ヤア理不盡なり』と刃も抜かず鞭を以て稻田流の馬術を現はし、此方へ現はれ彼方へ隠れ、千變萬化虚々實々の秘術で、避けて居りましたが、如何せん先方は四十八人、此方は一人でございませぬ、最う絶對絶命の場合となりましたから平『エイ』と云つたが如何なる呼吸か、連錢栗毛の南部産の逸物勝れた馬でございませぬ、四足を縮めてヒイ、ンと、一聲高く嘶くよと見た間に、前なる騎馬の頭の上を飛越した、皆々『ソレ飛越したぞ』と、追蒐けて来るやつを構はずドン／＼と逃げ出した、勿論平次は恐しいではございませぬ、なれども將軍のお膝下、殊に師匠は病氣の身體、對手は旗本、おのれは浪人と遠慮をして居るので、實に若年の身ではございませぬが、名前を世に揚ぐる位の平次でございませぬから、流石は天晴な心得でございませぬ、ところが何しろ四十八頭

の騎馬侍が追蒐けて来るので、平次も最う致方がないと度胸を定め平『ヤア斯くまで遠慮いたすに、尙ほ抵抗うて来るとあれば是非に及ばぬ、サア死を定めたこの平次、何奴斯奴の容赦はない、皆殺しにいたすから覺悟に及べい』といふなり今しも一刀の柄に手を掛けました、が、イヤ待て暫し、成る堪忍は誰もする、成らぬ堪忍するが堪忍と思ひましたので、又候彼方此方へと駒を乗廻して居ります、此方は山中源内でございませぬ、我馬を乗馴して呉れるとあれば、何うも見棄て置くといふ譯に行かぬ、近藤殿に遇つて一言の禮を述べたいと、早速身装束に及びまして高田の馬場へ出向いて参ります途中、不圖出會ひましたは、有名な大久保彦左衛門忠教老人でございませぬ、彦『オ、源内何處へ行くのぢやな』源『大久保の御老體でございませぬか、平素も御健勝で恐悦を申し上げます』彦『其方も無事で重疊ちや』源『有難う存じます、實は今日近藤殿が、私の馬を乗馴して遣らうと申しますので、高田の馬場まで一禮を述べたいために、参りますのでございませぬ。』彦『爾うか、夫りやア面白からう、拙者も退屈で困つて居るところ……一緒に参らう』源『御老體もお來せになりまするか』彦『参らう』と兩人打連れ立つて出て來ました高田の馬場、偶爾と向方を見ると斯は如何に、四十八頭の馬に跨つたる旗本の連中が、僅か一人の若年を取圍み各々劍戟を揮つて、ワア／＼と斬込んで居りますから、這は怪しからぬ、將軍下のお膝下に於いて白晝劍戟を揮ひ、加之も多勢で



只だ一人の青年を相手にいたすとは……アツと驚いたる山中源内、續いて大久保彦左衛門の
 兩人、呆氣に取られて見て居ります折柄、向方から誰か知らしたものが病中ながらも駒木
 根八兵衛友房、平次が危いと聞いたるところから、身は衰弱を來たして枯木に等しい状況で
 はございませぬが、以前が以前昔取つた杵柄、眞正といふ時には常人のやうな者ではございま
 せぬ、腹帯確乎と結び大小刀を腰に佩みながら、馬に打跨がつて出て來ました友「ヤア今日
 の會頭は何方でござる、我門人斑鳩平次に對して刃物三昧をなさるゝは、如何なる仔細で
 ござる、ことによればこの駒木根八兵衛が割腹をいたして申開きを仕らん、如何なる事情か一
 應仰せ下されたし」と曇り聲を揚げて申しましたが、なか／＼聞き入れる様子もなく益々斬
 込で行く旗本連中、今は致し方ないと覺悟を致しました八兵衛友房「ヤア平次、最う是非
 に及ばぬ、拙者が許すから劍戟を抜いて斬つてしまへよ、駒木根八兵衛此處に控へたり、必
 ず敗れを取るな」と聲を揚げる、これを聞いた平次は「オ、お師匠さままでござりまするか
 然らば御免……」といふなり抜き放ちたる關兼光の一刀、水も滴るばかりの業物大上段に振
 冠つた新「ヤア小賢しや平次」と斬込んでくるやつを平次が「何を」といふなりエイと斬
 下した一刀に、憐れむべし近藤新十郎は、胴體二つとなつて血煙と共に果敢なく消えてしま
 った、○「ヤア師匠の息子が殺られた……新十郎どのが殺された、ソレ師匠の息子の敵」と

いふなり平次を目蒐けて斬込むやつを、平次においては彼方へ轉じ、此方へ避け神出鬼没の
 働き、實にや陽炎稻妻か、なか／＼の勇者でござりまする、ところへ馬上鎗を小脇に抱え込
 み、襟鉢巻を嚴めしく乗込み來つた近藤新左衛門、新十郎の死體を見るより大音聲「ヤア
 ヤア駒木根八兵衛の門人、斑鳩平次とやら我子の敵覺悟に及べい」と今や平次を目蒐けて突
 き込まうとする、此方は八兵衛友房これを見るより、血眼にてグツと睨み「ヤア新左衛門
 拙者が相手をいたす待てツ」とその場へ乗込まうとする折柄、今まで様子を眺めて居りまし
 たる山中源内、大久保彦左衛門の兩人が、その場へ衝々と出て來まして「ヤア近藤新左衛
 門、暫らく待てい」と聲掛けられて偶然と眺めますと、大久保老人でござりまするから新
 「これは駿河臺さままでござりまするか」如何にも大久保彦左衛門ちや……コリヤ源内、其
 方新左衛門に一禮を述べたか」源「ハ、ツ御免……ヤア近藤どの、此度の御親切源内深く御禮
 を申しまするぞ」新「これは異つたお言葉、何が故に拙者に禮などを……」源「さればでござる
 昨日貴殿の御仲間金助とかいふ者が拙宅へ參つて、我主人新左衛門の申さるゝに、南部公か
 ら頂いた暴馬があるといふことを聞いて、一度乗つて見たいから貸して呉れいといふ口上に
 拙者も貴殿も馬術の御師範家、これは何うも有難い願うてもない幸ひと悦びまして、何うか
 御主人の御親切の段有難う存する、宜く申し傳へて呉れよと頼んだのも、拙者の馬を乗馴し

て戴きたいためでござる、夫れを何ぞや、只今見受けるところが貴殿がお乗り下さるかと思ひの外、平次とか云ふ若年者に乗らし、拙者の馬を多勢して鞭ちなさる杯とは如何なる儀でござる、但し拙者に遺恨はしあつてのことか、御返答承はりたい』新「ウーム」源「サア新左衛門どの如何でござる、何故あつて拙者を偽り、我馬を打擲なされしか、かくまで恥辱を受けては、この源内旗本一統へ對し笑ひの種でござる、殊に大久保御老體の前へ對しても相濟みませぬ、サア打擲されるくらゐであるから、寧ろそのことに殺して下され、實に貴殿の御親切を喜び、一言のお禮を申し、また馬術を拜見せんと來掛る途中、大久保御老體に面會して同道して馬術拜見に罷り越した拙者、餘りと云へば不埒ではござらぬか」彦「爾ぢや、乃公も源内とは逸れぬ交情である、依て源内の馬を乗馴して呉れると聞き、ア、新左衛門の親切辱けない、依て乃公も一言の禮も申したいと、老人の身をも顧みず態々罷越した次第、しかるに斯る有様とは驚き入つた譯である：ア、源内、其方の馬を多勢して打つたがために、到底彼の馬は役に立たんぞ、序でのことぢや乗れぬ馬なら殺して貰へ」大久保老人もなかく、意地の悪いお方でござります、近藤新左衛門は一言の申し聞きが出來ませぬ新「ア、何うも誠に相濟みませぬ、その申開きは後日仕つるでござりまするから、今日の處は倅の敵斑鳩平次をお討たせ下されませうならば、有難き仕合に存じまする」源「ア、倅の敵

を討つと申さるゝが、萬一返り討になつたら如何しめさる、死んだものが口を聞かれやう、道理がないではござらぬか」彦「爾ぢや、源内、なかく、旨いことを申した、此方は新左衛門残念で堪りませぬ、心の中で何を吐しやアがる、彼様な若年者が、乃公の片腕にも足るものか、それに返り討だ、糞面自くもないとは思ひまするが、何うも對手が大久保彦左衛門でござりまするから、夫れは斯うぢやとはいはれませぬ、只だウムと唸つて居りまする、彦左衛門は面白半分彦「萬一彼の青年と新左衛門が戦つたら、必定返り討は定つて居る、四十八人を對手にしての働き振り、なかく、立派のものぢや、死んだら何の役にも立たぬから生息ある中に澤山いつて遣れ、コレ源内申さぬか」源「ハ、サア新左衛門どの何うして下さるのぢや、大久保御老體の前も耻入ることとござる」新「イヤ誠に夫れや何うも、倅の無調法で私の知つたこととござりませぬ、甚だ恐れ入りまするが、何うも御老體には此の點の處を御推察下されまして、倅の敵討をさして下されませ」新左衛門は只管に頼んで居ります彦左衛門老人は源内に向はれ彦「源内敵討をさして遣れ」源「ハアツ：」彦「だが新左衛門、向方に居る多勢の旗本の倅、彼人ア其方の弟子であらう、然すれば師の影は七尺退つて踏まざとやら、何れ其方へ助太刀をいたすに相違ない、そこで不憚なものは彼の青年と駒木根八兵衛、就いちやア弱きを扶け強を挫くのがこの彦左衛門の氣性ぢや、依て其方へ皆弟子共が

助太刀するときには、この彦左衛門と源内は、浪人者の平次とやらに助太刀をいたすから、左様に心得い：コレ源内準備をいたせ」源「承知致しました」といふなり、山中源内においては下緒を脱して早速の櫓、後鉢巻をいたし刀の鯉口を寛げて居ります、サア斯うなると近藤新左衛門も閉口をいたし新「ア、モシ暫らくお待ち下されませ、左様仰せ下されましてはこの新左衛門は貴方に向ける刃はござりませぬ、何うかお止まり下されませ」彦「ハ、ア左様かな、しからは馬は如何いたす」新「ハ、ッ、何とか好い工夫はござりますまいか、彦「爾う貴様がいへば、この彦左衛門も打棄て、置くといふ譯にも参らぬ、何うちや其方の倅は尋常の人ではあるまい、失禮ぢやが發狂をいたして居るのう」新「ハ、ッ、心の中で、さては發狂といつた方が宜いのだと、思ひましたから新「如何にも仰せの通り、少し心も狂つて居るやうに相見えませ」彦「爾うであらう、全く發狂の業で、其方の知らぬ間に馬を借出したのであらう」新「左様でございます」彦「ササ其點だ、其方の倅が殺されたと思へば腹が立つ、なれども彼は斬られて死んだのではない、狂氣のためにおのれが馬から落ちて死んだのぢや、宜いか、だから敵と思ふことは一つもない譯、殊に將軍家のお膝下において、劍戟を拂ふなどは以ての外、却つて事を荒立て、は其方の家名に關はるぢやで、發狂で自死したとお上へ届けるが宜い、何んと其様なものだらう、跡の後悔前に立たずといふ謔もあ

るぢや」といはれて近藤新左衛門、見す／＼倅を討たれたのでござりまするが、彦左衛門老人のいつたことを考へると、何うも自分の方に利益がござりませぬ、新「イ、ヤ成程、大久保御老體が仰しやる通り、如何にも我倅は浪人者に斬られて、命を落したのではござりませぬ、彼は全く自死したに相違ござりませぬ」彦「爾うか、そう申せばよい、馬の儀は此の彦左衛門が引受けたから、新十郎の死骸を持つて此所を引取るが宜い」新「ハ、ッ承知致しました」と新左衛門は我子を討たれたながらも、敵を討つことも出来ず、無念ながらも新十郎の死骸を弟子共に頼んで、駒の脊に乗せ我家を指して引取りました、後に大久保彦左衛門は駒木根八兵衛友房をお招ぎに相成り彦「コリヤ八兵衛友房、大層寢れたのう」友「ハ、ッ御老體には、只今のお捌き友房有難く御禮を申上げます」彦「ハ、ッ、なアに爾う禮を申さないでも宜い、併し此者は若年とはいひながら適れ勇士だのう、名前は何と何地の産である」友「ハッ彼れは奥州仙臺藩でござりまして、斑鳩平次と申します」彦「左様か、なか／＼感心な者ぢや餘程馬術も鍛練いたして居ると見え、源内の馬はお蔭で良い馬になつたぞ：コリヤ平次とやら、この彦左衛門も厚く禮を申すぞ」平「ハ、ッ、これはこれは大久保さまでござりまするかお名前はかねて承知いたし居りまするが、お目通り仕りまするは今日初めて、先づお時候のお障りもなく、御機嫌の體を拜しまして恐悦に存じます」彦「オ、其方も壯健で結構ぢや、



また寸閑があつたら駿河臺の予の屋敷へも遊びに来るが宜い』平『有難う存じまする』彦『コリヤ源内最う歸らうかのう』馬『ハ、ツ』彦『何うちや乃公もこの馬に乗つて見やうか』源『サアサア何うかお乗り下さいませ』彦『爾うか、では御免を蒙る』と彦左衛門老人はヒラリ馬に跨つたかと思ふと彦『ヤア源内續いて来いヨ』と一鞭當て、ハイヨイカバ〜と去つてしまつた、源内は驚きながら源『モシ大久保の御老人、お待ち下され』といひつゝ跡からドンドン飛んで行きました、さて跡では斑鳩平次は師匠駒木根八兵衛友房先生の前へ出まして平『これはお師匠御病氣中甚だ恐れ入ります、お障りはござりませぬか』友『イヤ實は斯様々々の噂を聞いたから、病中を打忘れ早速駈附けた譯、今にも大事にならうとする處を、大久保さまのお蔭で、先づ無事に相濟んで此上もない喜びぢや、必ず心配をいたして呉れるな』平『左様でござりまするか、然らば一刻も早く歸りませう』と銘々は其儘に立歸りました。

(第九席) 平次安達幡軒齋を打擲の事、并に平次勝田忠左衛門に

邂逅の事

これから平次が八兵衛友房先生の駒の轡を取り、徐々と神田小柳町一丁目の屋敷へと歸つて参り、醫師を招いて師匠の看護手當をいたしました、すると何ういふものか漸次と病氣が快

くなりまして、凡そ一月経たぬうちに薄紙を剥ぐ如くに、全然と快く相成りました、家内の喜び本人は申すに及ばず、平次においても大層喜んで、芽出度く其日を暮して居ります、ところが一日のことでございます、駒木根の玄關へ來ました一人の仲間。〇「へい御免を蒙ります、お頼み申します」と訪ねた、熊助が出て「熊へい何誰でございますか」〇「エ、私は近藤新左衛門さまに奉公をいたして居りました金助と申す者でございます、何か先生にお目通りを願ひたいと仰しやつて下されませ」熊「ハ、ア左様か、暫時お控へ下さい、熊助は奥へ参り、このことを駒木根先生へ申しますと、八兵衛友房不審の體、友平次、金助と申せば過日偽はつて其方を誘き出した奴ではないか」平次「左様でございます、友其者が何故に目通りを願ふのであらう」平「サア何ういふ事情かは存じませぬが、彼は何うも尋常普通の仲間とは思へませぬ、よつて此處へ招ぎまして聞いて見るが宜うござりませう」友「成程、では此處へ通すがよい」熊「畏まりました：ヤア金助さんとやら、先生がお目に掛ると仰しやりますから、お通り下され」金「有難う存じます、では御免下されませ」と金助は奥の一室へ通り、遙か此方へ兩手を突き金「ハ、ツ初めて御意を得ます、私は奥州白石の城主片倉小十郎の家臣、野口金太準方と申す者でございます、實は馬術の奥儀を究めたく、當江戸へ出まして近藤新左衛門殿は將軍家馬術の師範家と承はり、尋常では到底奥儀を教へて呉れませ

んと思ひまして、仲間と相成奉公いたし、餘所ながら窺み取らうと存じましたところが、なか／＼窺むことが出来ませぬ、如何しやうと案じ煩ふ折柄、御門弟平次殿と新十郎殿が口論をなされまするを幸ひとし、即ち今度の喧嘩を仕掛けましたは私の計割でござります、そこで双方の馬術を見ますと、貴方さまの御流儀が遙かに近藤の上に出て居りますので、今日失禮を願ひず入門を願ひに罷り出ました次第、何卒御教導の儀偏に願ひ申し上げまると懇懇に願ひ入れました、そこで駒木根八兵衛先生も大きに感心をいたされ、早速承知をいたし平次は兄準方を弟といたし、互ひに勉強をいたしその奥儀を究めましたから、野口金太準方は師匠に暇を乞ひ、奥州白石を指して歸つてしまひましたが、此方は平次が駒木根八兵衛友房先生より、駒木根八流の奥儀皆傳を受け、恰も龍に翼を得たる如く、天下恐るゝ者なしといふ技倆、教ゆる師匠、習ふ平次も非常な悦びで、尙ほ怠らず師匠に仕へ、ます／＼勉強をいたして居りましたが、圖らずも駒木根八兵衛殿は、天草騒動について肥前へ行かねばならぬこととなり、茲に師弟惜き袂を別ち友房は江戸を出立いたして了ひました、斑鳩平次は先づ歸國しやうと、數多の門弟より餞別を受け、段々と歩つて参りましたのが、奥州街道福島驛でござります、勿論立派なる衣服大小刀、背面には少々の荷物を連雀に負ひまして、角髪的美男子、威風自から具備つて居ります、福島驛の中央へ掛りますと、この地の

名物焼鮎を商なつて居りまする宅がございますから、平「免せ」とツカ／＼這入つた事「へいこれはお來でなさいませ」平「名物の鮎で、一本燭をいたして呉れ」亭「畏まりました」と早速鮎の那綴に焼鮎、酒を一銚子添へて持つて來ました平「ヤア御苦勞々々」一人旅の氣樂さ手酌で頻に飲んで居りますると、折柄此處へ來ましたのは安達幡軒齋といふ浪人者で、頃日福鳥へ足を駐め、劍術指南の道場を開いて、弟子も二三十人あらうといふ先生、近在では大層威張つて居りまする、門弟を兩三人從へまして平「ア、亭主免せよ」と應揚に這入つて來ました事「へいお出で遊ばせ」とは申しましたが、何しろこの幡軒齋といふ奴は、酒屋で酒を飲んでも、代價を拂つたことのないといふ亂暴者でございますから、亭主も心の中では、また出て來やがつたと、思ひながらも、何しろ劍道の先生といふので、表に其様な色を見せませぬ事「何うかお上りなされませ」亭「オ、何うも其方の酒を飲むと、他の店の酒は不味くて飲めぬ」亭「ウム有難迷惑」亭「ナニツ」亭「イヤ此方のことで：：毎度代價といつたら序いで／＼といふが唇に序といふ日はありやしない、眞個に斯ういふ人間に掛つちやお堪り奉もあつたものぢやない」亭「オイ：ブツ／＼口の中で何を申して居る」亭「イエ何も申しては居りませぬ」早く持つて參れ」といひつゝ、奥の室へ行かうとする中、例の班鳩平次が類に一杯飲んで居るやつを眺めて、心に一物、御免と挨拶をして通るかと思ひの外、態と無言で平次の前に置く

てある態を蹴附けながら、次の間へと行つてしまひました、平次は轉がらうとする銚子を取留めながら平「ア、何うも無禮な奴もあればあるものだ」と、餘り氣にも留めませぬ、心の中では馬鹿者奴と笑ひながらも、平然として飲んで居りまする、これを見た亭主が「ア、オイ、アまたお客様へ喧嘩を吹掛けアがる、眞個に代價は呉れぬし、加之に來てござるお客様まへ無禮するなア、如彼いふ人間を福鳥に置くとは分らねえや」と八兵衛は心配しながらも、罵らへをして居りまする、平次はかういふ處に居つたら、また相手にしなければならぬやうなことが出来るかも知れぬ、事を早く發つて行かうと思つて居りますると、幡軒齋はチロ平次を眺めて居りましたが、態で平「ア、コリヤ亭主何だこれは牛旁が煮えて居らぬではないか、斯様なものが喰へるか」といふなり平次を目蒐けて鮎鍋を投附けました、狙は違はず平次の腰へ的中しましたから、如何な平次も立腹をいたし平「おのれツ」といふなり立上からうと致しましたが平「イヤ己に如かざるものを友とする勿れ、ヤア對手にならぬ方が宜いと、知らぬ顔を致してまた飲んで居りまする、處へ戶外の方から、年齢十歳か十一歳ぐらゐの子供でございます、肩の抜けたる襦袢を一枚身に纏ひまして、片手に桶を提げ此茶屋の前へ來ましたが、〇「叔父さん今日は：：」と這入つて來ようとする亭主の八兵衛が「ア、ヤア／＼今日は這入つて來ては不可」〇「其様な事をいはずに、鮎を買つてお呉んなさい、

お父さんのお薬を買ふ錢が足りませぬから：：」八「要らぬ／＼また買つて遣るから：：」〇「叔父さん、貴方のお宅を目的にして來ましたので、お父さんのお薬の代價が足りませぬから、何うか買つてお呉んなさいなア」八「オイ／＼買はないよ、乃公が何かい、汝の親父の薬代が足らぬからといつて、是非餘を買はねばならぬのかい」〇「爾うちやアございませぬが、助けると思つて買つて下さいなア貴方の宅では餘は買つて置いたつて、無益にもなりますまいから：：」と頻りに子供が頼んで居ります、之れを見た斑鳩平次平「オイオイ小僧、餘は幾錢だ」〇「ヘイドンジュは此處に一升許りございます」平「ウムウム」〇「あの一合が四文で、一升が四十文に買つて下さいませ」平「ヨシ／＼乃公が五十文で買つて遣るから、此處へドゼウを置いて行け」と五十文の錢を遣らうとする時、八「ア、コリヤ／＼ドゼウ商、何程に買つて買つた」〇「ヘイ五十文に買つて戴きました」八「爾うか、拙者百文に買はうから、此方へ持つて來い買つて遣る」〇「ハイ有難うございませぬが、もう此方の旦那に買つて貰ひました」と子供に似氣なく正直に謝絶つて仕舞つた。平「イヤ／＼小僧先方で百文に買つて遣らうと仰しやるのちや、遠慮は要らぬ買つて貰ふが宜い」〇「有難う存じまする：：左様なれば旦那さま何うか百文に買つて下さいませ」と蟬軒齋の前へ持つて參りました。八「ヤア乃公は三文でも要らぬ、夫れよりは彼の侍に百文に買つて貰へ、買ふといへば宜し、萬一買はぬといへば

拙者が腕に掛けても買はして遣るから：：」〇「其様な御無理なことを仰しやるものちやござりませぬ、彼の旦那が五十文に買つて遣ると仰しやつたのを、貴方が百文に買つて遣ると仰しやりますから私は持つて參りましたので：：」八「拙者は要らぬと申すに、彼の侍に百文で買つて貰へ、サア早く行かぬかい」〇「ちやア五十文に彼のお侍さまに買つて貰ひますと、行かうとすると、八「コリヤ拙者が百文に買つて遣るから、其處へ餘を置いて行け」〇「眞個に買つて下さいませか」八「ナニツ眞個に買つて下さいませか」何事だ、彼方へ行け、最う要らぬわいと子供を可哀想に奇めて居りますから



平次が見兼ねまして「ア、小僧、それでは拙者が百文に買つて遣はす」といふやつを聞いて、蟠軒齋「ア、コリヤ、十貫文に買つて遣はすから、此方へ持つて来い」といはれて、子供は幼な心にも立腹を致しまして、「ヤイ馬鹿にするな、子供と思つて弄物にしやアがる、此方の旦那が百文に買つて遣はすから来い」と然ういつたら、三文でも嫌と吐すのだらう、汝等に賣らない……賣るものかへ」此方へ来やうとするを、蟠軒齋は眼に角立て、蟠「ナニツ……汝等たア何事だ」○「云ふたが何うした、コリヤ子供を弄物にするより、なせ大人を弄物にしないのだ、斯うやつて鎗を賣つて歩行くのも、遊びや好で賣つて歩行くのではないのだ、お父さんやお母さん、またお姉さんまで三人と云ふものが、病気で臥てござるから、此様な小さい腕で鎗を捕つて来て、その日を活計して居るのぢや、弄物にするな」蟠「ヤイ武士に向つて無禮の奴」と一刀取つて突立ち上り、子供を目覚めて飛掛らうとする、平次は見兼ねて制止やうと致しますると、蟠「ヤア田舎武士の青二才、汝等が出る場所ではない……引込んで居れ」平「ア、イヤ左様ではござらぬ、吹けば飛ぶやうな子供を、貴方は何んとなさる蟠「ナニツ、如何やうに致すとも汝の世話には相成らぬ」平「爾ういふ譯のものではござらぬ、只今承はつて居れば餘りとした亂暴、幼い子供を弄物になさるといふは、武士にあるまじき行爲、斯るものを勢つて遣はすこそ武士の本分でござる、夫れとも是非小兒を對手になさ

るといふことでござれば、身不肖ながら小兒に代つてお對手を致しませう」蟠「ヤア吐したり青二才、覺悟をいたせ」とスラリ一刀抜くが早い、平次を目覚めて斬下して来るやつを、平次は泰然自若といたして、手に持つて居りましたる鐵扇でバツと刃を打ちますると、腕がヒリ／＼ツといたして蟠軒齋はその場へ刀を落してしまひました、門弟共は、こいつア敵はぬ、一藝より二げいが肝腎」と師匠を振棄て、その櫛戸外へ逃げてしまひました、此方は平次が逃げやうとする、蟠軒齋の首筋掴んで捻伏せながら平「ヤイ先刻から無禮の段々、武士に似氣なき汝、若年と思ひ侮る不埒の所業、相手にするに足らぬと思ひ、黙つて居れば増上り、親姉のために苦勞をいたす小兒をまで、弄物にいたすとは何事である」と大力無雙の平次に首を押へられて蟠「ア、痛い、何うも誠に悪いことを致しました、眞平御免下さい、必らず今後は心を悔めますから……」と涙を流さぬ許りに謝罪して居ります、平「改むると申せば免しても遣はすが、併し當家の拂ひをいたせ」蟠「ハイ致します、當家の拂ひは何程でござります」平「ア、コリヤ亭主、この侍の喰つた代價は何程だ」といはれて亭主八兵衛は最前から心地好げに眺めて居りましたが、早速出て来まして「ハイ、旦那何うも有難う存じます、貴方様がお居でになりました、今日代價は貰へぬのでござりました、何うも忝戴なう存じます、それでは最初からの代價を戴かれませうか」平「ム、其方も稼業ぢや

初めから全部戴くが宜い』八『有難うございます、それでは旦那さま済みませぬが、丁度十七兩でございませぬ、過日チヨイと勘定をいたして置きましたので、今日の分は除けまして十五兩になつて居ります、そこで今日の分は二兩二分戴きたう存じます』亭主八兵衛も此時こそと思ひましたか、澤山掛値を申して居ります、蟻『ナニツ今日のが二兩二分だ』八『へエ』蟻『鎗鍋が四人前と、銚子が三本だ』八『左様でございます、この節は鎗が高うございますので……』蟻『馬鹿にして居やアがる、餘り高いわい』平『イヤ爾う仰しやるな、當家の稼業で、聊かは利得にならねば立行きませぬから』といはれて蟻軒齋も致し方がございませぬ、到頭十七兩二分といふ金子を拂つて、狐鼠々と這々の體で逃げ出しましたが、此方は亭主八兵衛平次の前へ頭を下げ、八『ヤア何うも旦那さま、有難うございます、私もこれで胸が爽然と致しました』平『イヤ何うも馬鹿な奴だ、シテ彼の者は何といふ者だ』八『へイ、彼の人は安達蟻軒齋と申しまして、近頃當所へ参りまして、道場を開いて居りますので……』平次『ハ、ア左様か、何うも如彼云ふ奴が多いには困るな』八『左様でございます、何うか緩然と召飲つて下さいませ、貴方さまが、幾らお飲みになりました、チャーンと蟻軒齋の分へ、掛値を申して取つてございますから……』平『ハハ、イヤ、ヤなか、面白……併し小僧』〇『へい平』サア鎗代が百文、夫れからこの一兩は其方へ遣るから、お父さんへ何なりとも買つて上

げて呉れ』と、別に一兩出しました。〇『へい有難うございますが、この一兩はお返し申します』平『何故返すといふのぢや』〇『お父さんが理のある金子は貰つても宜しいが、理のない金子は假令一文たりとも貰ふことはならぬと、平素申して居られますから』平次は感心いたし、平『ウム、イヤ成程道理である、けれども此金は、拙者が此方の孝行に感じて遣はすのだから、受取ても理のない金子といふものではないから、持つて返るが宜い』〇『けれどもお父さんに叱られますから』平『爾うか、では萬一お父さんがお叱りになつたら、此宅の伯父さんに理由を話して貰へば宜い』〇『左様なら伯父さん、萬一お父さんが立腹になさつたら来て下さいませるか』八『ヨシ、行つて遣るとも、乃公が旦那さまから戴いたことを、お父さんへ云つて遣る』〇『有難うございます……夫れでは旦那さま頂戴致します、此金でお父さんやお母さん、またお姉さまへも、お薬を澤山飲ますことが出来ます』と小供は嬉し涙を流して、欣々として我家へ歸つて参ります、これを眺めた斑鳩平次、平『ウム、孝行な子だ、何うも彼の様子を見ると、何點か武士らしきやうに思ふが、何うして斯く苦勞して居るのであらうと、思ひましたから、當家の勘定を強いて拂ひまして、ことによつたら助力をいたして遣らうと、小兒の跡からつけて参りました、此方は右の小兒がスタ、歩つて参りましたが、福島の驛から凡そ十三町許り離れました、夫婦ヶ池といふ處がございませぬ、その

池の堤へ蒲鉾形の小屋を建て、戸の代りに破藁を吊つてございませう、これぞ竹の柱としてでも申しませうか、この小屋の前へ来まして兩手を突へた後の小兒が「お父上、お母さまお姉さま只今歸りましてござります」この聲を聞いて内方から出て来ましたは、母親でございませう、四十路の上をニツ三ツ越したかと思ふ女が、身には汚穢しい衣服を纏ひ、大層糞れた容貌をいたしては居りまするが、何となく氣高い點もございませうし、殊に破れた帯とは申しながら、嚴然と正しく結んで居りまする母「オ、忠次郎歸つておじやつたか、定めし今日は困つたであらう、お前は朝早く出ましたが、母は頓とお茶を添ることを忘れまして、不自由であつたであらう」母「イエお母さま水を掛けて喰べました」母「オ、爾うであつたか、何分母も病氣で氣が注かなかつた、堪忍してたも……」母「勿體のうござります」母「併し忠次郎、頭日はお父さまも、大分お鹽梅の好いといふのも、皆汝の孝行からでこの母も悦んで居ります、サアチャンとお父さまにお眼に掛るが宜い」と兩眼に涙を浮べ、忠次郎の手を取つて、内方へ這入りました様子、平次はこの體を見て、ハ、ア、さては由緒あるお方と見えるホンに氣の毒なものだと感心しまして、密と小屋へ近づいて尙も狀況を考へて居りまする、外面に立聴く人のあるとも知らず、忠次郎は父の側へ參りまして「忠「お父上、只今歸りました」父「オ、忠次郎か、御苦勞ぢや、汝に苦勞許りさして相濟まぬ、これといふも父が病氣の

ためだから免して呉れヨ、何うちや今日は鱧は取れたか」忠「ハイ、私はあの吉田新田の方へ參りましたが、彼の方が鱧が餘計に居りまするから、澤山に取れました、何うかお悦び下されませ、私も大分鱧を捕ることが、巧手になりましたから……」といふを聞いた父親はビリツと身體をふるはし、兩眼に涙を浮べ「父「ア、忠太郎、鱧を捕るのが巧手になつたとは何事ぢや、アア變れば變る人の行末と水の流は、如何に成行くやら分らぬとは、實に能く申してある……」と今更ながら感慨胸に迫つて、覺えず忠次郎をグイと引寄せ抱き締め、身をふるはし嘆いて居りまする、この體を見て母親姉嬢も側へ這ひ寄り兩人「ア、忠次郎、淺猿しい心になつて呉れやつたのう、鱧を取るのが巧手になつたとは」と父子四人が互に顔を見合して、ホロリと溢す涙の雨、漸時は嘆いて居りましたが、忠次郎は起き上つて懷裡の財布を取り出し「忠「お父上お悦び下さいませ、今日は慈仁あるお武家に出會ひまして、澤山に金銭を頂戴致しました」と財布の中から取出す一兩の小判、父親はビックリ致し、突然忠次郎を捉つて押へ「父「コリヤ忠次郎、貧ゆるの窃取かは知らねど、何故斯様あさましい心になつて呉れた、苟且にも一兩と云ふ大金、鱧を賣る者の手に這入る道理がない、他人さまの金子を盗すんだのであらう、エツ憎くき奴……」と側に在りましたる長煙管を振り擧げて、忠次郎をビュー／＼と打け附けました、母親と姉嬢は兩人「ア、コレ申し、何うかお止まお下さいま

し、貴方は御病氣のお身體ではござりませぬか、萬一お身體に觸つたら、それこそ大變でござります、コリヤ忠次郎、何故お前は淺猿しい心になりました、お父上なりこの母が、平素申して居るではないか』と怨めしげに忠次郎を眺めて居ります、忠次郎はこれ／＼斯様と申譯けいたしますが、なか／＼律義一遍の父親は承知を致しませぬ、斯る處へ戶外から斑鳩平次が平「ア、イヤ、この金子に就ては決して御息が、盗み取られたのではござらぬ、即ちその金子を恵みましたは拙者でござる」と、唐突に蓆を揚げて這入らうと致しますると、思はず見合す顔と顔平「オヤツ貴方は』父』オ、其方は：』と餘りの奇遇と、變つた有様に互に落涙をいたし平「叔父上さまではござりませぬか』忠「ア、面目ない、其方は平次ならずや、ア、能も成長をいたし、立派なものになつて呉れた』平「叔父上、一別以來御無沙汰を仕りました、いかにも變れば變つた貴方のお姿、全體如何なる事情でござります』忠「イヤ平次、能くこそ尋ねて呉れた、この勝田忠左衛門斯く零落いたしました事情といふは斯様ちや、聽いて呉れ、其方を江戸へ出立させた後は拙者は代官を停められて、太守の指南役を仰せつけられ、最と幸福に消息して居つたが、圖らずも九州浪人太田七郎左衛門といふものが仙臺へ参り、家老伊達彈正とは伯父甥の間柄で、武術を申立て仕官いたしたいことを太守へ申上げ、拙者と立合に及んだその節、只一と打に負かしたのだ』平「成程』忠すると三月の節句の日太守より御酒

宴に招かれ、大層酩酊を致して退つて來る大手馬場、計らず拙者へ打當つたものがあつたから、周章者とのみ心得屋敷へ歸つて見れば、腰に吊げて居つた太守より拜領の印籠がないちや』平「へい／＼』忠「是りやア何うも大變なことをいたした、何分太守より拜領の品、他人に取られたとは何うも申出ることには出來ず、右やせん左やと種々心配をいたして、密々探索をいたして居つた處、四月の十四日名取川の堤において、足輕坂田與市といふものが、何者にか殺害せられ、その側に落しあつたは即ち拙者が奪られた印籠、その品を證據に殺人罪は拙者であるといふことに相成り、種々と申開きをいたし、彼品は奪られたものであると、申したなれども何故盗まれたら、そのとき届け出さぬかと云ふので、到頭永のお暇に相成り、當地に参つて圖らず病氣に罹り、所持の金子も使ひ果し、今日の零落…と、涙ながらに一冊の物語を致した、忠左衛門の述懐を聞いた平次は慨然と嘆息いたし平「イヤ憎みても餘りある太田七郎左衛門、御心配なされますな、この平次が吃度復讐を仕つりますから…」懐中から金子十兩を出しまして平「餘り少うござりまするが、當座の小遣錢に差上げます、何うか一冊も早く養生をなされて、この平次が吉左右をお待ち下さいませ』と此處で勝田忠左衛門父子に別を告げ、斑鳩平次は奥州仙臺を指してドン／＼乗込んで参りましたが、先づ兎も角も父斑鳩平兵衛を訪ねようと、根本の我家を指して歸つて來ました、十年経ては一昔

とやら家の状況も變つて居ります、平次は徐ろ懐舊の情に打たれ、暫時は茫然と眺めて居りましたが、應て玄關へ掛りまして平「お願ひ申す、御免下さい」と聲を掛けます、奥より出て來したのは、平次を成育て呉れましたる民藏でございます民「ヤアお來でなされませ：：オヤ何うやら見たやうなお方：：ハテナ」と小首を傾けて頻りに考へて居ります、夫りやアその筈でございませう、何しろ十年も経て居る上に、子供の時に別れましたのでございませし、また立派な侍風になつて居りますものゆゑ、一寸思ひ出せませぬから、民藏は首を右左へ振つて妙な顔をいたして、平次の顔を眺めて居ります、平次は心の中で可笑くて堪りませぬ。

(第十席) 平次伊達陸奥守へ足輕奉公の事、并に平次早川團平へ劍

術指南の事

平次はブツと吹き出さうと致しましたが、漸つと堪へて平「オイ其方は民藏ではないか」と聲を掛けましたが、民藏は何うも思ひ出しせませぬ民「エ、何誰さまでござりましたかなア」平「最早見忘れたか、何しろ其方も無事で重疊ちや、斯う云ふ拙者は平次ちやわい」と云はれて驚く民藏が民「エーッちやア若旦那さまでござりましたか」平「如何にも平次である」民

「ヒヤマア若旦那何うも立派にお成りなされました、眞個に能くマア御成人なされましたなア、貴方何んだつて、頼むなんて仰しやるのでございます、貴方のお宅へお歸りなさるのに他人ケ間しい、ズツとお通りなされませぬかい、イヤ何うも旦那さまもお悦びでござりませう」と自分が云ふ事丈けを申して置いて、民藏は周章で奥へ駆込みながら民「ヤア旦那さま、周章では不可ませぬぞ、何うもなか／＼立派なものでござります」平兵「オヤオヤ民藏、何を狼狽へて居るのぢやア：：何が立派だ」民「イエその何でございます、私も見ました時は見違へました」平兵「コリヤ／＼、何だか乃公には全然分らぬ、何を見違へたと申すのぢや、フム其方が云ふ事は狂人同然、些と落着いて申すが宜い」民「ヘー／＼イヤ私が餘まり嬉しいので恐れ入りました、エ、その若旦那がお歸りになりました」平「ウーム：：平造が歸つて來たと申すか」民「イエ平次の若旦那がお歸りなされましたので：：」平兵「エーッ何と申す、あの平次が歸つて來たか」民「左様でござります」平「ウム能く歸つて來た、ア、乃公も逢ひたくて堪らんだ、サア早く此所へ連れて來い、コリヤ何を愚圖々々いたして居るのぢや、早く連れて來ぬか：：」と平兵衛に於いては大層な喜悅、民藏は度を失ひまして、キョロ／＼致しながら玄關へ出て來まして民「サア若旦那、大旦那さまがお待兼でござります、早くお通りなされませ」と草鞋を脱すやら、洗足の湯を汲んで來るやら、漸つと平次を奥へ案内を致しました、

此方は平次が徐々と父平兵衛の前に出まして、頭を低げ兩手を突かへて控へて居ります、平兵衛も暫時は平次の立派なる風采に見惚れて居りましたが、懸て平兵衛オ、平次か、能くこそ歸つて来た、アア大層立派になつたのう」平「ハ、ア：：お父上も御無事で此様な悦ばしい事はございませぬ、長らくの間家出を仕りまして、不孝を重ねました段は平に御勘辨下さいませ」平兵衛「アイヤ、全く其方が好んで出た理由ではなし、兄平造の身代りとなつて、代官所に自首つて出たのが、運好くも助命をせられ、江戸表へ勉強に参つたと云ふ事は承はつて居る、決して其方の不孝ではない」平「恐れ入ります」平兵衛「併し平次、其方が江戸表へ武術修業に参つたと聞いてから、平造も舍弟が勉強をするとして見れば、兄の身として依然と草深い田舎に居られないと云つて、稽古道具を擔いだ儘何地へか出立をいたしましたわい」平「エーッ：：その何地へ参るとも仰しやらないで、お出ましになりましたか」平兵衛「ム、爾うちやそこで乃公も大層心痛いたして居つた處が、過日筑後の久留米から手紙を寄越したが、彼も無事に一心に劍道修業をいたして居るから、安心をするが宜い」平「夫れは結構なことで、私は羨しう存じます、時にお父上、私は貴父へ一ツ折入つてお願いがございます」平「ム、何事ぢや何も父子の間柄で爾う改たまつて申す事はない、何なりとも申して見い」平次「エエ甚だ恐れ入ります、私に改めて三箇年のお暇を下さいますよう、願はしう存じます

る」平「ナニ三ヶ年の暇を呉れいと申すか」平次「御意でござります」平「ウム：：武術修業の爲に諸國を遍歴する精神か」平次「ヘエ爾うではございませぬ、貴父に對しては恐れ入る事ではございませぬ、實は私の叔父に當ります勝田忠左衛門」平「ウム、代官をお勤になつて居つた勝田殿か」平次「左様でございます、その叔父が九州浪人太田七郎左衛門、當時は仙臺公へ抱へられ七百五十石の指南役でござりますが、その七郎左衛門の爲に斯様々々の次第で遂に浪人の身と相成り福島の驛に於いて圖らずも面會致しました、イヤ最う病氣の爲に非常の零落、これも畢竟太田七郎左衛門のなす業と思へば、私は胸も張裂ける程残念にござります、依て叔父の復讐をいたしたく、それ故にお暇を願ひたう存じます」聞いた平兵衛は顔色を變へまして平「コリヤ控えて居れ、彼の太田七郎左衛門と云ふものは、當今は太守へ對して指南番、其方ごとき若年が何しに太田を對手に復讐が出来るか、まだ、汝が技倆では到底及ばぬこと、却つて彼の爲に打果されるは必定、されば叔父の敵を討つことも出来ざるのみか、この父に對しては嘆を見せる道理、今暫らく辛棒をいたすがよい」と平次が駒木根八流の、奥儀を究めて居ることは存じませぬから、子を思ふ親心頻りに制止して居ります、此方は平次が莞爾と笑み平次「お父上決して其の御心配には及びませぬ、なほに太田七郎左衛門ごときもの、何程のことやござりませう、只だ一討にいたして御覽に入れます」父「コリ

ヤ、またしても左様な亂暴なる事を申す、兎角血氣盛なる時は前後の思慮分別もなく、自然自惚が強くして、決して左様な事を申すものではない。平次「左様仰がございませぬ、私の技術お檢べ下さりませ」平「何と申す、父に對して言葉を返す不孝者、價値の知れたる汝ごとき未熟者が、苟且にも太守の指南番たる太田を對手にするなんぞとは、螳螂の斧も同然だわい平次「イエ、左様ではございませぬ」平「フム爾う申せば、この父が檢べて遣はすから準備に及べい」平次「ハ、ッ有難う存じまする」平「併し前以て申し置くが、この父は加藤家十勇士の一人とまで呼ばれ、朝鮮征伐にも數度の功名をいたした狸平兵衛である、必らず父子の情を捨て試合中は俺は容赦はしないから、其方も父子の縁を絶つたと思つて遠慮なく打込んで參れヨ、詰り拙者を太田七郎左衛門と思ひ、叔父の敵を討つ覺悟で居るが宜い」平次「委細承知 狂りました」とこれから平兵衛は豫て秘藏にいたして居る三間柄の槍、鞘を除してリュウと扱きまして驪然庭前へ飛出しました、此方は平次でございませぬ、袴の股立高く掲げ、下緒を脱して早速の襷鉢巻確と結びまして、一刀ズラリと抜き放し平次「ヤア太田七郎左衛門覺悟に及べ」平「何を小癪な」と槍の穂尖を平次の水月目蒐けて狙を定めました、此方は平次が眞劍白刃止の秘術を以て青眼に構へ平次「エイッ」平「ヤッ」と双方暫時の間は互に隙を狙つて居りまする、この音響を聞くなり驚いて飛び込んで來ました民藏「民」やヤ大旦

那さま、久瀾にお歸りなされましたる若旦那、何の罪があつて斯く御成敗を遊ばします」平「民藏驚くには及ばぬ、平次が技術を試すのであるから、其處に在つて見物いたせ」民「左様でござりますが、私は何うなる事と、心配をいたして居りました。モシ若旦那、必らずお負けなさいませぬ」平次「ウム今にお父上を打据ゑるから見て居れよ」民「やア何うもお勇いことと、確乎お行りなされませ」と民藏も拳を握り、何うかして平次が勝てば宜いかと、妙なもので平次を最員に思つて居ります、此方は双方互ひに突けば開き打てば轉し、一上一下と飛鳥のごとく働いて居りましたが、そのうちに平兵衛が如何なる障を見出しけん、エイと突き出す槍、平次が、顯然と軀を轉すその早業、突き損じて平兵衛が槍を取直さうとする處を平次「御免」と云ふなり槍の千段巻の處をビシッリ打ました、すると何う云ふものか、ビリビリツと腕に麻痺が來まして、平兵衛は槍をその場へ落して了つた、飛込んだ平次は刀の刀背で平兵衛の頭上を押へ平次「お面。：。平」參つた、いや何うも天晴れ天晴れ、これならば太田七郎左衛門を對手にいたして、敵が討てるに相違ない、大丈夫であるぞヨ」平次「恐れ入りします」と平次は退つて兩手を突へました「民」やア若旦那、何うも大層な技術でございませぬ、全然大旦那はなつて居りませぬ」平「おや、何を申す」と平兵衛も苦笑する、奥の一室で父子酒宴と成りましたが、その翌日平次は父平兵衛と相談をして仙臺の城下を指して歩

つて参りました、何うかいたして太田七郎左衛門を討取りたいと、種々苦心に及び、茲に足輕の株を求め身は足輕と相成りましたが、その時分足輕の株といふものは五十兩六十兩といふ具合で賣買が出来ましたものでございます、平次は五十兩で足輕の株を求めましたから、姓名を改めて松本源助と命けました、ところが足輕と申しますものは、ホンノ僅な祿でございまして、吾々のやうになか／＼手許は苦しいでございます、何しろ五石二人扶持を以て女房もあれば子もあり、中には両親や兄弟がある者もございしますから、祿許りでは到底凌げませぬので、大概手仕事をいたして生計の道を助けて居ります、然るにこの松本源助の平次は、親許は豊富で月々幾金か送つて参りますし、また仙臺には實父布施藤十郎といふ大盡がございしますから、これからも送つて来ると云ふ有様で、少しも不自由はございませぬ、何しろ何うかして早く太田を討取らうと、夫れのみ工夫をいたして居りました、茲に同じ足輕に早川團平といふ少々周章者がございます、女房に子供がございしますので、手仕事に扇の骨を削つて居ります、一日この團平の宅へ出て来ました松本源助、門口から衝々と這入るなり源「オヤ早川さん今日は……」團「オ、これは松本さんでございしますか、先日はお祝ひに預りまして、何うも有難う存じます、サアア何うかお上りなさい」と座布團を其處へ直します源「イヤお構ひなさるな」お辭儀をしながら、座布團を敷いて其處へ腰を掛け 源「エ、早川

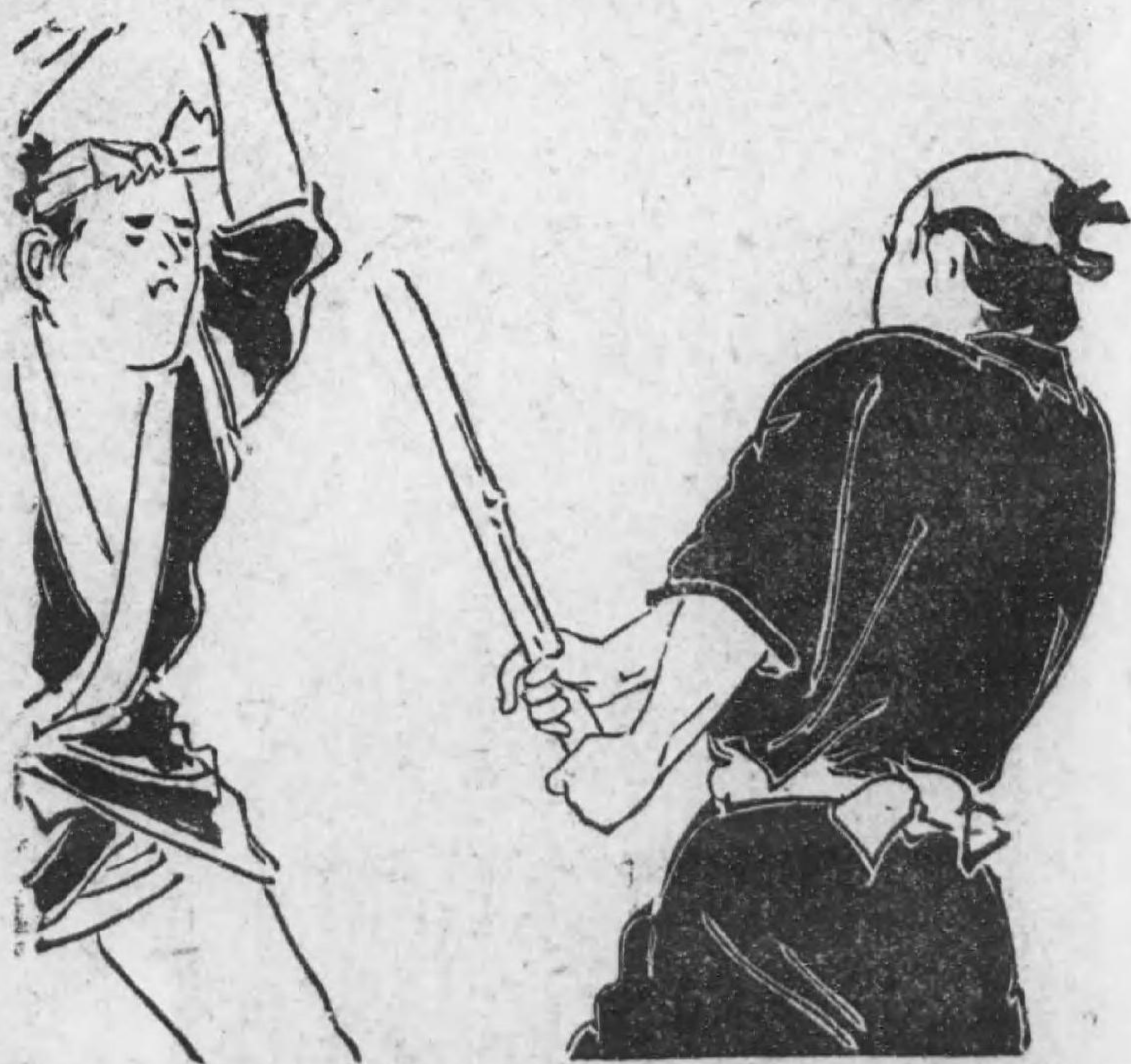
さん、貴方は何をしてお出でになります」團「ヘイ是りやア扇の骨で」源「ハ、ア、してその扇は太守のお持料でござりまするか」團「串戲仰しやちやア不可ぬ、太守のお持料でござりませぬので、これは私の内職でございします」源「へ内職とは何でござる」團「アハ、妙なことをお尋ねなさる、結局扶持のみでは活計が足りませぬによつて、斯して扇の骨を削つて居るので源「ウーム團平殿、そいつア少しく考へが違つて居りますな」團「何故考へが違つて居ります」源「何故と申して、扇の骨を削つて、賃錢は何程ぐらゐになりますな」團「左様、マア朝から夜業に掛けて二百五十文、少し間が好いと三百文ぐらゐになります」源「夫れちやア内職をせぬでも、少し儉約をすれば随分活計が出来ないことはござりませぬ、内職をする閑暇に剣道でも御勉強なさるが宜いではござらぬか、素破戦争といふ場合に、敵が矢玉を飛ばして参つた節に、内職に扇を削つて居つたとて敵の首級を討取ることも出来ませぬ、その時にやア儕等能く承まはれ、仙臺家の臣早川團平、平日扇の骨を削つて居る技倆、汝の顔面を削つて遣るから、覺悟に及べなんて云つたところが、豈夫敵は逃げはいたしますまい、サア其處でござる、平素武術を勵んで置けば、ヤア早川團平此處にあり、我と思はん者は來つて勝負を致せと、名乗りを擧て敵十騎や二十騎討留めて御覽なさい、如何なる出世をいたすか分りませぬぞ、凡そ人間と生れ來て立身出世をしやうと思はぬ者は誰一人もござるまい、然れ

ばその立身をいたす資料を勉めねば、人間と生れて来た甲斐はござらぬではないか」團「イヤ松本氏、夫りや拙者とても存知て居りますけれども、拙者のやうに甲斐性なしでは、到底出世は思ひもよらぬ」源「サア夫れが不可い、夫りやア自暴自棄といふものでござる、昔し一休禪師が何と申されました、成せば成る、成さねば成らぬ、成るものを、なさぬは、おのが心ゆゑなり、と仰しやつた、随分人のすることが出来ないことはござらぬ、精神一到何事かならざらんで、おのれが熱心にしやうと思へば必ず出来ぬものではない、詰り出来ぬといふのは、おのれは甲斐性なしだから可けないのだ、彼の人は賢いから出世をしたのだといふやうな、皆なおのれから是を投げるから出来ないのだ、爲せば成る、爲さねばならぬ、成るものを、なさぬは、おのが心ゆゑなり、何と其様なものではござらぬか」團「イヤ何うも貴方は講釈が巧い、夫りやア源助さん貴方の仰しやることは道理ぢやが、夫れが私共に出出来ないといふのが、假令剣術を習ふにも禮儀といふものが要りませう、そいつが我々には出来ませぬぢや、だから如何に此方が熱心に出世の材料を拵へやうと思つても、金子がなければ出来ませぬないことで、さア夫れも前の指南審、勝田忠左衛門どのであつたら、實は斯ういふ譯で懷中が淋しうございますからと申したら、稽古料なしに教へても下さいませうが」源「ウム」團「このお方はお氣の毒にも他人を殺したといふ疑ひで、長の浪人となられましたので我

我も落膽いたして居りますぢや、又た今度の太田七郎左衛門といふ奴は、それやア勝田殿とは雲泥の相違で、イヤ最う威張りやアがつて、それも何でさア中年から九州の方から出て来やアがつて御家老が叔父さんに當るので指南番になつたのでござりますが、その御家老の伊達弾正さまを頭に冠つて人を人とも思はぬ高慢、目下のものを見たらギロ／＼睨み附けますぢや、そりやア睨むくらゐなら辛抱が出来ますが、御承知の通りお目見以上のお方へ遇ひますと、土下座をして御挨拶をしなければなりませぬ、それも天氣の時はまだしもでございまするが、雨天と来たら堪つたものではありませんやアしませぬ、だから普通のお方は、それをさせるが氣の毒と思召して見て視ぬ舉動をなされますが、あの七郎左衛門は爾うではござりませぬ、態と挨拶をさせやうとて足までグイと睨み附けますから、挨拶をせずに居られませぬ、斯う云ふ風の悪い奴眞個に忌々しくて……」と圖に乗つて饒舌り立る源「ウムそんなお人でござるか」團「だが彼奴は私共を蠅虫同様に思つて居ますから、何うしてなか／＼謝禮なしに教へて呉れませう、私は實のところ、習ひたいのが山々でございますけれども、彼様な奴にベコ／＼お辭儀をしたつて、今申す通り却つて口へ風を引かすやうなものですから、マア／＼いはぬ方が優だと思ひまして、實は習はぬのでござります」源「ウム……イヤそりやア決して太田七郎左衛門に限るといふ譯のものでもなし、他に彼れよりかツツと出来る人が

幾らもありません、其人へ頼んで習はつしやれ、謝禮も何も要つたものぢやアない、何うです其人へ頼んでは』團へエー、ぢやア何ですか七郎左衛門より、ツツと上手な先生が他にありませんか』源エ、あるとも』源イヤこの仙臺の藩中に……』源左様』團へー、一向私は存知ませぬが、その先生なら謝禮なしにドシ／＼教へて呉れますか……』源教へて呉れるとも、そりやア餘程丁寧に教へて呉れる』團そいつア有難い、何處に居られます』源その上先方から教へて呉れた上、小遣錢の少々も呉れますせ』團エーツ何うも開いた口へ牡丹餅、松本さん爾ういふ先生は何處に居られまするか早く教へて下さい』源その先生は、眼の前に來て居られます』といはれて團平外の方をキヨロ／＼眺めまして團何處に居られます』源表へ來てござる』團へエ 何うも私の眼には見えませぬが……エ、先生何うかお這入り下さいませ……松本さんお來でになつては居りませぬ』源イヤ見えて居ります、現にお前さんと話をしてござるよ』團へエー何うも訝しいですなア』源ソレ此處にござる、即ちこの松本源助ぢや……』團ウフ、アハ、モシ何を仰しやるのぢや、松本さん大概に弄つて置きなさい、斯うして一生懸命に内職をして居るものを、自分が有福だからつて眞個に殺生でござります、夫れよりか他の話でもなさい』と團平は憤りながら骨を削りに掛る源マア爾う憤らずに聞かつしやい、成程拙者が拙者のことをいつた處で、豈夫眞個になさるまい、依つて此處で拙者

の技個を一番試して御覽なさい、お前さんが朝から夜業へ掛けて、僅か二百文か三百文の錢を儲けなさるが、拙者と立合つて一ツ胸をお打ちになつたら二百文進げることにしよう』團ム、成程』源夫れから胸をお打ちになつたら五十文』團へイへイ』源頭をお打ちになつたら三百文』團イヤこいつア面白い、武士に二言はござらぬぞ』源宜しい、決して偽言は申さぬ』團ヤア宜しい、成るべくなら金錢を出して置いて貰ひたいなア』源宜しい、サア此處に一兩ありますから、此處へ出して置きます』團イヤ、ゼカ／＼光つて居やがる』團平は膽をつぶして、女房に割木を二本持つて來いと云付ける女モ



シ良人お廢めなさいよ、子供の三人もあるのに、其様な馬鹿なことをしたつて一文にもなり
 ますまい、萬一負傷でもして御覽なさい、私共が困るぢやアありませんか』團「何を吐しやア
 がるのだ、乃公が打たれるものかい」女「だつて過ちといふことがございますから」團「馬鹿い
 へ：：ねえ源助さん貴方は私を打ちやアしますまい、私がお前さんを打つのでござりませう」
 源「如何にも左様ぢや」團「ソレ見ナ、乃公が松本さんを打つので、松本さんは乃公を打ち
 なさるのぢやアないから、負傷をする氣遣ひないのぢや今にコレこの金銭を取つて見せるか
 ら、早く持つて来い』と聞いて女房も安心致しまして、恰ど同じ様な割木を其處へ二本持つ
 て参りました、源助團平の兩人は戶外へ出まして、例の薪を山形にいたし棒鉢巻の準備に及
 んで團「サア参りますぞ」源「宣しい、遠慮なく打込んでお出でなさい」といふのでヤ、
 ツと雙方立上りました、早川團平は何しろ劍道を知りませぬが、乃公が打たれるものであつ
 たら、頭が幾らあつても、足るものぢやアない、此方は打たれぬのだから、無茶苦茶に打つ
 て参りまするを、源助は彼方此方へ避け、宛で子供を扱ふやうに。戯れにヤツ／＼と掛聲を
 しては、團平の打込んで来るやつを、轉して居る、團平は金子が欲しさに額に汗を流し團「ヤ
 ツ：：ア、失策つた、待て／＼大取するより小取をせいぢや、ソレ五十文だ」と胴を打つて
 来るやつを源「エイ」といふなり持つたる割木で刎ね返しますると團「痛いッ」といふなり割

木を地上へ落してしまつた源「團平殿、早く拾つて打込みなさい」團「ナニツ：：」といふな
 り、またもや割木を拾つて團「二百文：：お面：：」といひながら一生懸命打込んで参りまし
 たが、なかく／＼何うして一本も打込むことは出来ませぬ、そのうちに團平はハヤ息遣ひも荒
 くなり、眼の色も變つて来るといふ有様、彼方へヒヨロ／＼此方へヒヨロ／＼、宛然泥酔者
 と同じ足許になつた、松本源助の平次は心の中で『ハ、ア大分弱つて来たナ、このくらゐで
 廢いて遣らう』と思ひましたから源「ヤア早川さん参りました」と聲を掛けた、此方は團平
 團「だつて松本さん私は打はしませぬヨ」源「イヤ／＼拙者の籠手に充分中りました」團「へエ
 ー私に一寸も手應はありませぬが：：」源「イヤ／＼確に中りました、サア二百文上げます、
 些とまた遊びにお出なさい、左様なら：：」と松本源助は二百文の錢を置いたなりで、歸つ
 てしまひました、後で早川團平は考へた團「ア：：ア何うも大したものだ、彼のくらゐ使
 りやア大丈夫、なかく／＼太田ごとき者の及ぶ所ではあるまい、高慢をいはないだけの技倆は充
 分だ、これだから宜かつたが、イヤ何うもヨイ／＼と轉す鹽梅は、何ともいへない、宛で
 飛ぶ鳥も同然だ、ウムヨシツ松本さんへ頼んで教へて貰ふことにしやう」といふ考へを起し
 ましたから、それから仕事の寸暇がありますと松本源助のところへ参りまして團「エ、松本
 さん、先日は何うも有難うござりました、何うもなかく／＼立派な技倆で感心を致しました、

何うでございませう、一本教へて戴たく譯には参りますまいか」源「オ、早川さんか、先日は失禮を致しました、イヤ習はうといふ精神があれば、拙者が教へて上げませう」といふのでこれから平次が、噛んで啣めるやうに教へて遣ります、すると團平は「イヤ何うも有難うござりました」といつて歸つてしまふ、其時に錢の五十文も出して子供に何か買つて上げなさいといつて遣りますから、團平は氣の毒に思つて「何うしまして先生、無謝料で教へて貰つた上其様なことをして戴いては……」源「イヤ……其様な御遠慮には及ばぬ、家中一統は五本の指でござる、何の指を切斷たつて不可ぬ、お前さんは内職をせねばならぬ人、私は斯うして獨身であるし、殊に親類から毎月少々の金子を送つて呉れますから、決してその御心配には及びませぬ」と強いて呉れて遣ります、サア斯ういふ風で早川團平も大層喜びまして一生懸命怠りなしに習ひに参りました、何しろ慾と兩人連れでござりますから、決して一日も休みは致しません、殊に源助が町寧に教へますから、他の師匠に就いて一年習ふものは三月で覺えると云ふ工合で、早川團平は僅か半年の間に一寸と使へるやうになりました、團「ア有難い、先生のお蔭で小遣錢は貰へる、劍道は習はれる……此様な結構なことがあるものぢやない、だが松本先生は足輕にして置くのは眞個に惜しい技倆ぢや、何ういふ理由で足輕になつてござるか知ら、イヤマア……其様なことは何うでも宜い、これには何か事情がある

のだらう、しかし何うも乃公も大した技倆になつたが、同じ足輕も澤山ある中で大した違ひぢやない、エ、と待て……一ツ誰かに羨ましてやらう」と、一日のことでありましたが、ブラ／＼と出て來ましたのが、同じ足輕の城戸武助の宅でござります。

(第拾壹席)

城戸武助秋山良助等平次の門弟となる事、并に太田

七郎左衛門道場へ他流試合に赴く事

團平ガラリ戸を開けてから、ズツと這入りまして「ヤア城戸今日は……」するとこの城戸武助も手許が不如意と見えました、頻に扇の骨を内職に削つて居りましたが、偶爾と團平の姿を眺め「武」オ、これは早川か、今日は内職は休みかな」團「ナニツ内職……ヘン其様なものとは違つて居るのだ、全體貴公は何をして居るのだい」武「何をして居るつて、貴公と同じ扇の骨を削つて居るのではないか」團「ウーム矢張り太守のお持料かい」武「オイ……馬鹿をいふものではない」團「馬鹿をいふつて、現在貴公は骨を削つて居るから、尋ねるのぢや」武「お手前だつて、削つて居るのではないか」團「笑はすな、拙者は扇の骨を削つて、僅か二百や三百文の金子を儲けるより、少し儉約をすれば夫れぐらゐなことは出来るものぢや、考へて見るが宜いせ、素破戦争となつて見い、敵の馬前へ乗出して、ヤア……伊達家の臣城戸武助これ

に在り、日頃扇の骨を削つて居る技倆で、汝の顔を削つて遣るから、我と思はんものは來つて勝負をせよ、なんといつたところが驚くものではあるまい、爾ういふときには劍道でなければ間に合はぬ、劍道さへ知つて居れば、敵の十騎や二十騎討留めることが出來て、何様な出世をしましことでもない、元來人間の現世へ生れて來て、出世をしようと思はぬ奴は、人間に生れて來た甲斐がないではないか、昔一休禪師が斯ういはれた、爲せば成る、成さねば成るぢや：：ウム何んとかいつたけ、爲さねば：：武「オイ、早川何をいつてるのだ」團「待て、そのなさねば」團「なさねば：：全體何のことぢや」團「なさねばなす」と仰しやいしました」武「ウム、何うも何だか分らぬことをいひ出したせ」團「そのなさねばで：：何ぢや他人のすることが、出來ないといふことはない」と云ふ歌ぢや、ウン分つたか」武「全然分らぬ、大體歌になつて居らぬではないか」團「マア、爾ういふ譯ぢや、少々の事は負けて置け、何うぢや一本教へて遣らうか」武「何を教へると云ふのだ」團「何うも貴公は無益い人間だな、苟且にも武士の申すこと、劍道より他に教ふるものがあるか」武「フン笑はすな：：」團「立合つて見るか」武「何が真個か」團「こりやア怪しからぬ、武士に偽言があるか」武「ウム少しは知つて居るのか」團「知つて居るも居ないもない、貴公が拙者の頭部を一ツ打つたら、一日の仕事賃を遣る」武「オイ、貴公金子があるかい」團「ウムそのマア金子はないのだ」武「金子がな

いのに、マアを附けるが可笑い、無いぢや仕方がないではないか」團「金子はないから斯うしよう、一ツ貴公が拙者の頭を打つたら、大地へ頭を着けて謝罪ることにしよう」武「ヨシ面白い、では一ツ打つて遣るぞ」と戶外へ飛出した兩人、割木を持ちまして双方ヤツと立上りましたが、武助が見ますると早川の野郎奴、劍術を知らぬ癖に生意氣なことをいやアがると思つて居りますから、武「遠慮なく打つから用心をしろ」團「アハ、サア來い」と暫時の間はカチ／＼と打合つて居りましたが、何うして武助は全く知らないで、只だ無暗に打込んで参りますから、一つも中りませぬ」武「オヤ、妙だ」ぞと一生懸命必死となつて打込んで居りましたが、最うそのうち汗はダラ／＼流れ出す、腕は勞れて來る、眼は暗み足がヒヨロヒヨロになつて來ました、到頭武助はその場へ平伏つて了ひました、此方は團平平氣の平左で汗もながしませぬ有様、團「何うぢや武助、豪いものだらう習ひに來い、扇の骨を削つたつて何になるものか」武「ア、苦しい、何うも早川、貴公何時其様な技倆になつた」團「乃公はチャンと教へて呉れる先生があるのだ」武「ウム誰だい」團「先生か夫れは松本源助先生だ、夫りやアなか／＼達人だぞ」武「ウム太田先生よりも強いが」團「ウム太田：：彼様なものが何になるものか、松本先生の眼から見たら三歳の小供も同然ぢや」武「なか／＼大した技倆と見えるなア」團「そりやア日本一だ、恐らく松本先生の上に出る者は一人もあるまい、何うぢや

頼んで遣らうか』武』ム、何うか願つて呉れ、この通り拜むから：：』團』諾、夫れでは頼んで遣る』と早川團平は松本源助の處へ歩つて参り、團』先生今日は、一寸お願ひ申したいことがござります』源』ウム、何事』武』外でもござりませぬが、城戸武助といふ私の仲間でございます、それが教へて戴きたいと申しますが、如何なものでござりませう』源』左様か、イヤ習ひたいといふ人があれば、幾人でも教へませう、武術が出来れば太守もお悦びなさると申すもの、遠慮はないから連れてお來でなさい』團』有難う存じます』といふので、城戸武助も弟子入りを致しました、すると秋山良助と云ふ足輕、此人も弟子となりました、都合三人の者が一生懸命に習つて居りましたが、丁度二年の間修業致しましたので、今日では三人共どうやら一人前使へるやうに相成りました、平次の松本源助も大層悦びまして、これぐらゐ出來れば大丈夫、一番太田七郎左衛門の道場へ遣はして喧嘩を吹掛けさせて、その機に乗じて自分が乗込んで伯父の敵を打たうといふ計略、好機を待つて居りますと、一日稽古休みでございまして、早川、城戸、秋山の三人が、一杯飲みましたところから浮羅々々と家中町を出まして、彼方此方と散歩をいたして居りましたが：：武』早川』團』エ、何だ』武』何だつて何うも濟まない』團』何が濟ない』武』何がつて、その何だ我々がこれぐらゐの技倆が出来ゐるのに、太守が足輕にして置くといふのは、大體濟まぬぢやアないか、素破戦争といつて見

ろ、我々が第一番に敵の大將を打留めて：：』團』オイ、待て、素破戦争といつたとこゝろで、夫れが何時あるか分りやアしない、マア、宜い、そのうちに我々の技倆を現はすときもあるから』武』だが何うもその腕が夜泣きをいたしてからなア、何うも貴公等とばかり立合つても面白くないで、何うぢやア一ツ、太田の門弟で生意氣な奴があつたら、打据て遣らうぢやアないか』團』爾うだなア』武』随分出世が出来るせ、足輕城戸武助といふ者が、太田の門弟を打据ゑた何うも豪い者だといふことが太守のお耳に這入るだらう、爾うすると太守から手が面前において家中の侍と立合をいたせといふ仰せが下る、委細長まりました、其處で對手人を打据ゑる、何うも足輕で置のは惜しいものだと、士分に取立てになる、すると戦争なしに出世が出来るぢやアないか、何うだい一ツ行らうぢやアないか』團』ウム、成程、それは面白からう、秋山貴公は何う思ふ』秋』イヤ拙者とても同感ぢや』と何しろ三人の者は一杯飲んで居ると、近頃は腕が出来て來たといふ自惚もござりますから、大道狭しと肩を張り漸次と出て來ましたは、城下端れの八幡宮の馬場でござります、すると向方に多勢の人でワアワ：：ツといつて居りますから、團』オイ、城戸に秋山、何だらうナ』兩人』サア喧嘩でもして居るだらう』團』ム、さうかも知れない、行つて見ようぢやアないか』兩人』行け行け』といふので三人が近寄つて來て見ますると、十四五人の若侍がお面：：お籠手：：と、素面素

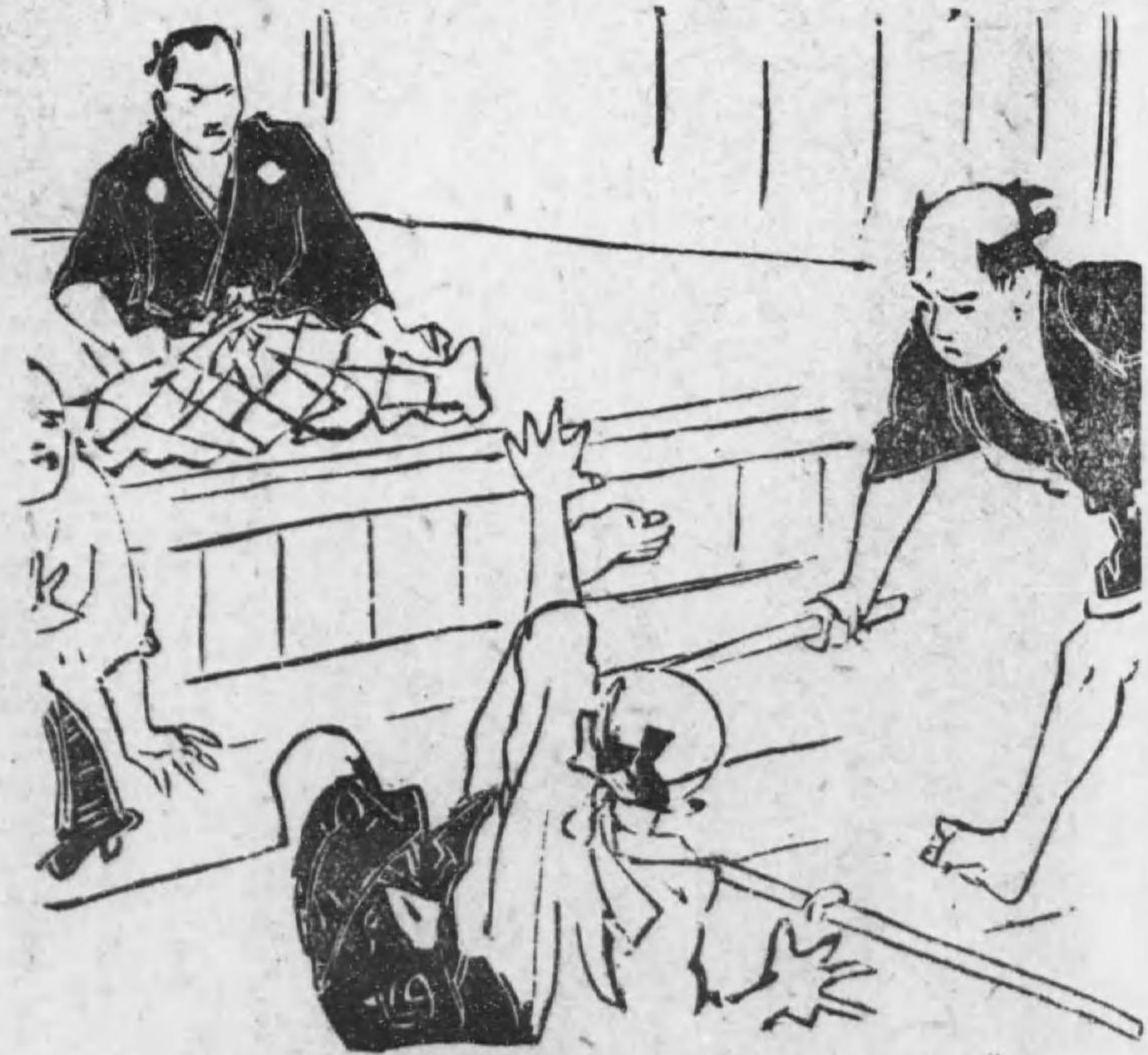
籠手でもつて頻りに試合をいたして居ります、此人は皆な太田七郎左衛門の門弟で、今日は休暇でございませうから、町人百姓共に見せ様といふ處から、此處で野試合をいたして居るのでございませう、三人はそれを見ると、「こいつ面白い、一ツ打据ゑて遣う」といふので群集の中から「オイ秋山、城戸、恰と幸ひだ、太田の門弟共が野試合をして居る、一ツ打つて遣らうぢやアないか」兩人「ム、面白い、行るべし」

「ヨシ乃公に任して置け、オイオイいま立上つたのは服部ぢやアないか：：：オイ服部：：：、ウム一生懸命になつて居やアがる、何うも彼人が二百五十石の侍だからな、彼様な技倆で、エツ人を馬鹿にして居やアがる、我々のやうな技倆の出来る者が五石二人扶持だア、眞個に眼の開いてゐる奴は居ねえや、オイ服部さうしては下可ぬ、胸に隙があるぢやないか、オイ服部といへば：：：ソレ見ろ到頭打たれてしまつた、赤下手だな」と大聲に喧鳴つたものでございませうから、彼の服部新十郎といふ侍が負けたので、ムカムカして居る所へ、赤下手なんていつたものでございませうから、大層怒り出しまして「新ヤイ誰だ、赤下手なんていふのは：：：ウム見物は許して遣るから餘計のことをいふな、要らざることをいつたのは何奴ぢや」と木刀を引提げて衝々と出て來ました、斯うなると、早川、城戸、秋山の三人は、何うも私でございませうとはいへませぬから、クスクスと笑つて居ります、見物人は服部の顔と、右三人の顔をも見較

べて、これまたクス／＼笑つて居りますから、新十郎も感付きまして「新ヤイいま要らざることをいつたのは、其方等三人であらう」と早川圓平の前へやつて來た「圓イヤ別に要らざることを申したのではござりませぬ」新「だつて只今申したではないか」圓「へい：：：その胸に隙がありますから、胸に隙があると申しましたので：：：その證據には貴方は、胸をお打たれなすつたではありませんか」新「ナニツ：：：證據に胸を打たれたとは何だ、拙者は其方等がワア／＼いふものであるから、ツイ氣が散つて負けたのだわい」圓「ヤア夫れが不可ませぬ、側からワア／＼といふから夫れに氣が散るなどは、萬一戦争へ出ましたら何となされます、彼方でも勝負、此方でも組合、皆なワア／＼といつて居りますぞ、その時に側でワア／＼いふから、氣が散つて何うもならぬなんていつて居られますか、何うもさういふ精神では不可ませぬ、側から何んといはうとも、夫れに氣を奪られないやうにするのが、肝腎でござります」新「ヤアそれくらゐなことは拙者も存知て居るわい、大體其方が爾ういふことを申すからは必らず相當の技倆があつてのことであらう」圓「勿論技倆がなければ申しませぬ、」新「おのれ益々失禮なことを申す奴だ、然らば拙者と一本立合に及べい」圓「如何にもお對手を仕まつりませう」新「ム、能く吐かした、サア來い」といふので、新十郎に連れられて中へ這入つて來ました早川、秋山、城戸の三人、互ひに眼と眼で相圖を致しながら「圓オイ城戸

貴公が一番拙だから先へ出玉へ」武「ウム承知だ」武助は其處へ出ると一本の木刀を借受け、
 武「旦那」新「何だ、サア早く参れ」武「参りますが、一寸貴公へお願ひがございませぬ」新「何だ」
 武「他でもございませぬが、萬一私が勝ちましたら、酒を一升奢ごつて貰ふといふ譯には
 参りますまいか」新「何うも汚ない奴だ、して何程あつたら一升買へるのだ」武「爾うでござい
 ますネ、マア二百文あつたら行けませう」新「ヨシ……それぐらゐなら奢ごつて遣はす、併し
 其方が負けたら何うする」武「左様でございませぬ、私は何しろ五石二人扶持の足輕でござい
 ますから、金銭を差上げるといふ譯には参りませぬによつて頭を大地へ着けまして、何うも餘
 計なことを申し上げました、恐れ入りますと、お詫を致しませう」新「ウム吃度忘れるなヨ、
 いまに詫をさして遣る、遠慮なく打込んで来い」と双方ヤツと云ふと立上り、二三合打合は
 せたかと思ふと、武助が新十郎の胴を目標けて 武「お胴……」新「参つた」武「参つたら二百文
 頂戴……」到頭新十郎が二百文の泣別れと相成る、溢々として退つてしまひました、此方は
 武助 武「サア一人前二百文でございませぬ、思召しのあるお方は、何時でも構ひませぬからお
 出でなさい」と呼はつて居りますと、またもや一人の若侍が出て来まして ○「サア来い」
 武「ヤア何うか前金に願ひませぬ」○「何を生意氣千萬なことを吐す」と立上りましたが、これ
 も武助のために打たれて二百文の泣別れ 武「サア何うでございませぬ、二百文で御座います、

お代りはありませぬか、思召のあるお方は二百文持つて次へ〜とお出でなさい
 ……」宛で汽車の切符を買ふやうにいたして居ります、サア出る者は武助に打たれて、到頭武助は二貫文許り儲けました
 團「オイ城戸、貴公はそのくらゐで廢め給へ……オイ秋山貴公代れ」秋「ヨシ」と
 今度は秋山良助が出まして、これもまた十人程負かして、二貫文儲けました、次へ早川團平が出ましたがこれもまた二貫文儲けました、都合三人で六貫文といふ錢を取りましたから、最うこのくらゐで廢さうといふので、三人の者は三人「イヤ、何うも大きに有難うござりました、何うかまた御愛顧に願ひませぬ」とその場を出



て参り「何と各々何うも結構ぢやアないか」武「イヤ有難いなア……一寸出て六貫文、なか扇の骨を削つて居つては儲からないヨ」良「そうだとも、併しこれといふも松本先生のお蔭だ、何うだいお祝ひ酒を飲らうぢやないか」兩人「ムウ飲むべし〜」とこれより三人が腹の痛まぬ錢で充分に飲みまして、殘金で鰻を焼かせ折りに入れまして、三人ながら泥酔となつて飄々然と出てきましたのが松本先生の宅 三人「エイ、ゲープ、エ、先生今日は……」武「オオお三方」三人「ゲープ先生御退屈でございますませう」武「ヤア各々方は酒を飲んでござるな、イヤ宜しい、酒も程よく飲めば衛生のためになるから、お飲上りなすつても宜しいが、餘り大酒をなさると、却つてお身の毒になります、マア〜此方へお上りなさい」三人「エ、先生失禮ではござりまするが、少々お土産を持つて來ました、何うかお受取り下さいませ」と彼の鰻を出しました 武「ヤア何うも忝けのうござる、持つべきものは門弟でござるのう、拙者に土産を買つて來て下さるお志が有難うござる」と、源助の平次は折箱を押戴きまして側へ置きました、此方は早川團平が「イヤ先生、別に私共へお禮を仰しやらないでも宜しうござりまする、そりやア我々の身腹を痛めた錢で買つて來たものではござりませぬ、詰り貴方に教へて戴いた劍術から出來たお土産で……」武「何と仰せらるゝ、拙者が御指南申した劍術から出たとは、何ういふ理由でござる」武「それはその何でござりまする、實の所は今日は休日でござ

いますから、我々三人が一寸一酌を催しまして、微酔機嫌で城下端れの入幡宮の馬場へ参りました、すると太田七郎左衛門の弟子共が野試合を致して居りますから、我々三人が這入りまして、一人前二百文の賭で勝負を致しました、ところが三人が三十人を負かして、六貫文といふ金子を儲けましたので、歸りに一寸料理店で一杯飲みまして、残つた錢で鰻を焼かせましたのでござりまするといふを聞いた源助先生は胸に一物、眼に角立て、顔色を變へ「ヤアお黙りなさい、さる汚らはしき試合をさすがためにお教へ申した劍術ではござらぬぞ」といはれて驚く彼の三人三人「ハッ……」武「何うも怪しからぬお心得、餘りと申せば馬鹿々々しいことをなさるではござらぬか、大體貴公方は僅か五石二人扶持で、劍術を習ふことが出來ないと仰しやるから、拙者が其のお心根を察し、太守のために教へ申した劍術でござる、若し他流試合が致したくば、何故太田七郎左衛門を相手になさらぬか、詰らぬところの門弟共を負かしたといつて、夫れが何程の手柄に相成りますか、また各々方の技倆は決して門弟共を對手にするような詰らぬ技倆ではござるまい、高い樹へ登らなければ美味い果は食へぬ道理虎穴に入らざれば虎子を得ずといふ諺もござる、サアこの折箱を持つてお歸りなさい、この呆痴者奴が」といふなり、早川團平の顔へ例の折箱を投附けて、フイと奥へ行つて了ひました、何うも驚いたの驚かないのぢやアござりませぬ、三人共一時に酒の酔も醒めてしまひ、色

を變へまして、團先生誠に何うも粗忽を申上げました、どうか以後は心得ますから偏に御勘辨を下さいませ」と三人が這々の體で戶外へ出ました。團「オイ秋山、城戸……」團「何うも大變になつたなア」兩人「サア眞個に困つた、何うしたのだらう」團「マア、宜い、先生は憤つてござるも、夫りやア何んとか詫が出来来る、けれ共我々の技倆は門弟共を對手にする技倆ではない、何故太田七郎左衛門を對手になさらぬ、高い樹に登らなければ美味い果は喰へぬと言つた、何うも餘程我々の技倆は出来ると思えるのう」兩人「オ、先生の御言葉を考へると詰り七百五十石の太田を、對手にする丈の値打があるだらう」團「さうだとも……併し先生の御言葉で見ると、太田を負かして来いといはぬ許りの謎、何うぢや今日は遅いから仕方もないが、明日太田の道場へ乗込んで、一ツ七郎左衛門を打据ゑて、そいつを功にして、先生へお詫をしやうぢやアないか、到底この儘でお詫をしたところで御勘辨はないから」兩人「ウム成程、そいつア好い處へ考へが注いた、ぢやア明日は太田の道場へ乗込むことにしやう」と約束を致しまして、各々我家へ歸つてしまひ、さて翌日は三人がブラ／＼七郎左衛門の道場の表へ出て來ました……さて話頭一轉太田の門弟服部新十郎其他の者でござります、早川秋山、城戸の三人のために酷く打れ翌日道場へ來まして「新エ、先生お早うござります」七「オ、服部どのか」△「先生今日は」七「ヤア山田氏か、何誰もお早いこととござる」といつて居

るうちに、門弟共の顔を見ると皆少々の負傷がござりますから、七郎左衛門、不審に思ひまして「七服部どの、貴方のお顔に負傷がござりますが何うなすつた」と、問はれて皆々顔を見合はせ「服そのこれは何でござります、夜前一杯飲みまして大便に參らうとして、ツイ竹縁を踏み外して、手水鉢で打つたのでござります」とさも苦しうに申述べました「七ハ、ア夫れは危険いと御酒は餘り御飲りなさらぬ方が宜うござる」新「イヤ何うも恐れ入ります」七「ヤア山田どの、貴殿のお顔にも負傷がござるナ」山「ウムヘイ、是りやア……その左様々々矢張り夜前飲過ぎまして……」七「黙らつしやい、御貴殿は酒を飲まぬではござらぬか」山「ハ、ツ」七「酒を飲めない者が、飲み過ぎるとは何ぢや、ハ、アこれには何か事情があるに相違ない、サア何う云ふ譯で負傷を受けなすつたか、明瞭に仰しやれ……」といはれて、皆々は赤面いたし、新「イヤ先生、何うも恐れ入りました、實は申上げませぬでは分りませぬが、何うかお立腹のないやうに」七「ム、何うなすつたのだ」新「ヘイ、その何で……昨日稽古が休みでござりましたので、各々方と城下端れの八幡宮の馬場で以て、修業のために野試合を仕りました」七「ウム」新「とこへ松本源助の弟子で早川、城戸、秋山といふ足輕が參りました、斯様々々斯ういふ次第……」と面目なくも一伍一什の話をいたしました、これを聞いた太田七郎左衛門は、見る／＼うちに顔色を變へ「七ウム……イヤ宜しい、何うも憎き

奴は三人の者、屹度仇討をいたして進せる、依てこれから何とか欺して、右の三人を道場へ連込みなさい』新有難うございます』皆々『先生宜しくお願ひ申上げます』と門弟共は戸外へ飛出しました、然るに前申上げました通り早川團平、秋山良助、城戸武助の三人が、何とかして太田の道場へ入込み、七郎左衛門を打ち伏せ、それを功に源助先生へ詫をしやうといふので、今しも門前へ参りましてブラ〜と彷徨うて居る處でございますから、これを認めたま門弟共、新ヤア各々恰と来て居りますぞ』皆々『ム、如何にも参つて居りますなア』新『オ〜イ早川々々』と呼びますると、此方はこれ幸ひと近寄つて來まして、團ヤア服部の旦那、昨日は御愛顧に、多分のお金子を下さいますして有難う存じまする』新『各々方、彼奴等の吐す言葉から癢に觸るではござらぬか：併し三人の者』三人『へい』新『實は昨日のことを先生に申上げたところが、先生が非常に御感心なされ、何うも爾ふ云ふ者を足輕にして置くは上役たる我々が眼あつてなきも同然、一ツ技倆を試した上で、太守へ推舉いたしたいから、道場へ呼んで來て呉れと仰しやるので、只今迎ひに参らうと存じ此處まで出たところだ、幸ひのこと早く這入るが宜いぞ』三人『左様でございますか、夫りやア何うも有難う存じまする、何うか宜しくお願ひ申上げます』新『ム、承知いたしました、サア此方へ這入つて暫らく控へて居れと門弟共は奥へ這入りました、此方は三人がニコ〜笑ひながら、團ヤアオイ秋山に城戸：』

人『ウム何だ』團『これから一ツ太田を打伏せる：太守のお耳へ達して七百五十石は三人へ分取り、拙者が二百五十石、貴公等にも二百五十石貰へると云ふもの、サア運も斯う都合が好く來ないと、可けないのう』爾う〜と最う試合をせぬうちから、分配を勘定いたして居ります、すると門弟が出て來まして、〇ヤア三人の者此方へ通るが宜い』三人『長まりました』とこれから、道場へ通りますると、正面には太田七郎左衛門、左右には門弟共がチャンと控へて居ります、何しろ七百五十石の太田、此方は五石二人扶持の足輕、容易に目通りは出來ない間柄でございます、だから三人のものは恐る恐る遙か下手に頭を低げ、兩手を突きましまして三人『ハ、ッ』と平伏に及んで居りますと、セア、苦しい、近う進むが宜いぞ、何か早川團平、秋山良助、城戸武助といふのはその方共か』三人『御意にござります』セウ〜ムなか〜、劍術が巧さうだな』三人『お耻かしう存じます』セイヤ〜、爾う謙遜するには及ばぬ、充分勉強をするが宜い』三人『有難う存じます』セサア拙者が一本立合つて遣はす準備をいたせ』三人『有難い性合に存じます』と三人の者は心中大いに悦び勇み、準備に及んで道場の中央へ出て参りました、早川團平、秋山良助、城戸武助の三人は心中喜びながら控へて居りますると、此方は七郎左衛門が今に辛き眼に逢はして遣ると、これまた心中に思つて居りましたが、セ遠山氏、貴殿お出なさい』四天王と呼ばれたる遠山民部といふ者が、チャンと

準備に及んで、木刀片手に肩を怒らしてそこへ出て来ました、此方は城戸武助が、武「ヤアと
うかお手柔かに願ひます」民「無論のことだ、サア来い」と双方立上りましたが、二三合打合
つたかと思ふと、如何なる隙を見出しけん、武「お籠手……」民「参つた」と、遠山民部は退つて
しまふ。

(第拾貳席)

次七郎右衛門を挫き三人を救ひ出す事

次へ出ましたのが三浦重内、此人には武助が負けましたから、秋山良助が出て参りましたが
これも亦た重内のために負けました、そこで早川團平が出まして、團「左様なら私がお對手
致しませう」重「サア参れ」と暫時打合つて居りましたが、到頭重内が打たれましたから、平
田團左衛門といふ一番の門弟、最も代稽古をいたして居る技倆、此人が出て来まして稍々打
合つて居るうちに、團左衛門も美事に打たれました、サア斯うなると、最う師匠の太田七郎
左衛門が出る番になりましたが、實は七郎左衛門心中に驚いて居ります、何うも早川とい
ふ奴は餘程達者の奴だわい、こいつなかく油断がならぬと、充分覺悟をいたして翻然出て
参り、木刀を引揚げましてグツト團平を睨み付け、七「團平……」團「ハ、ツ」七「随分他の二名

も天晴なる技倆だが、中にも其方は一段出来るのう」團「何う仕りました實にお愧しい事で
……」七「併し拙者と立合ふからは、何か賭をいたさう」團「へい、併し私は足輕の身分、且
那さまとは到底賭は出来ませぬ」七「イヤイヤさうでない、金錢物品ならさうかも知れぬが、
其方で出来ることだ」團「へー私の方で出来ませぬことなら、何なりとも賭を致しませう」
七「ム、斯うしやう、拙者が負けたら其方へ七百五十石の知行を遣はした上、拙者が其方の
門人と相成るが何うぢや」團「成程へい……」七「そこで萬一其方が負けたら、肩と肩との間の
物を申受けるとしやう」團「へー肩と肩の間の物……」團平兩手で肩と肩を撫でながら、團
「イヤア何でございますか、あの首級でござりますか」七「如何にも爾うぢや、其方の生命を申
受けたい、何うちや考へて返答をいたせ」團「ウムへい」とは申しましたが、其所はまだ足輕
の性根心中に「ア、大變なことになつて来たわい、成程勝つたら七百五十石貰へるが、負た
ら首級……ブル／＼馬鹿らしくなつて来た、併し嫌と云へば立合はずまいし、宜しい昨日先
生も仰しやつた、高い木へ登らなければ美味い熟柿は食へぬ、虎穴に入らざれば虎の子は得
られない、ヨシ」と覺悟を定めました早川團平、團「旦那宜しうございます、参りませう」七「
では首を呉れるか」團「へい……負けましたら差上げます」七「ム、ヨシ、では其方から退け」
團「貴方からお退きなさいませ」七「それでは一緒に退かう」兩人「エイヤツ」と互ひに木刀、

持つて立上りました、間隔二三間離れまして七郎左衛門は大上段、團平は駒木根流の正眼で双方ヤ、ヤツといふ斗り隙を狙つて居りましたが、此方が打込めば彼方は轉し、凡そ十合許りといふものは必死となつて打合つて居ります、何しろ團平で見ると只だ稽古いたして、今日の技倆になつた人間、太田で見ますると難波兩度の戦に實地の戦場で鍛へました技倆だから當然太田には及ばぬのであります上に、團平は生命の實地に取遣は今日が初めてございますから、何うしても心中に恐を抱いて居ります、殊に七郎左衛門の方で見ると、假令負けたとて七百五十石の知行を棒に振れば宜いので、平氣の平左でございますから、自然團平の方に弱點がございます、その機に乗じて七郎左衛門は、獅子奮進の勢ひでボン／＼と打込んで参りますに引替へ、此方の團平は自然に疲勞が來まして、汗は額を潤し息は忙急んで参り、足許は浮いて來る、眼は眩むといふ有様、ヤ、ヤツと打合つて居るうちに、團平は板の間へドタリ打倒れました、そいつを太田七郎左衛門飛込んで、物をも云はず七八度、力に任じてヒュー／＼と打据ゑましたセ『早川何うちや』團『ま、ま、参りました』セ『ム、参つたとあれば豫ての約束、生命を貰ひ受けるから覺悟をいたせ：アイヤ門人衆、拙者の大劍をお持ち下さい』〇『ハ、ツ』門弟の一人は急いで大刀を持つて來て渡す、七郎左衛門左に大劍を持つが早いか、右手でギラリ抜き放し、眞向上段に振冠りましてセ『團平覺悟』と聲を掛けま

したから、早川團平は色も榮青色と成相り、ガタ／＼顛へ出しまして團『ヤア秋山に城戸、何とか詫をして呉れ、勝つたときは知行を分配にするのに、負けたつて黙つて見て居るといふ其様な不人情のことがあるか』とと思はず知らず聲を揚げる、然るに最前からこの様子を熟つと何か思案をいたして居りましたは城戸武助、此人はなかく學問は出來する、何思ひましてか衝々と出て來まして、七郎左衛門の前へ進み武『ア、先生一寸とお待ち下さいませ』セ『ヤイ何故に制止なのだ』武『イヤ只今承はつて居りますれば、貴方がお負けになつたら、七百五十石の知行を遣はすと仰しやいました、また早川の方では生命を差上げるといふこと、早川が負けましたによつて、貴方が首を取らうと仰しやるのでござりますが、萬一これが貴方のお負けに相成つたら、この場で七百五十石の知行が戴けますか』セ『ム、夫れは：』武『豈夫この場で、直に貰ふ譯にはなりません、一應太守へお伺ひ申した上でなければ、私に知行の受授することは出來ませぬ』セ『そりやア太守から戴いて居る知行であるから、私に受授する事は出來ぬ』武『サア爾うでござりませう、左すれば早川の生命だからといつて、早川自身が自由に受授することは出來ませぬ、輕き身ながら云はば太守へ奉行の身分、自分の生命で自分の生命とは申されませぬ、一應太守へお伺ひ申した上、爾ういふことであれば、汝の生命を太田七郎左衛門に渡すが宜いと、御意がありましたら夫りやア貴方へ

團平の首は差上げませうが、今日この場に於いて、首は差上げるといふ譯にはなりません。と武助が一生の智慧を絞り出して一理屈申しましたから、七郎左衛門も妙な顔をしたし、「イヤ此奴なかく理屈を饒舌る……其様なことは聞く耳持たぬ、この場で遣ると云ふ事であつたから、申受けるのだ、サア其處を退け」武退きませぬ」といつて居るを刎ね退けた七郎左衛門、バツト團平を望んで斬附けました、此方は團平一生懸命の場合ですから、バツと體を轉して七郎左衛門の腕を探るや否や向方へドンと投附けた、その間に武助が一刀を團平に渡しますと、其刀を受取つた早川團平が晃然抜き拂つて團「サア最う斯うなれば絶對絶命、なかに乃公一人で死ぬものか、死なば一緒ぞ……」と眞向上段に振冠り、太田を目覚めて斬込んで参ります、此方は武助、良助の兩人が、同じく一刀を抜き拂つて、兩人「サア團平、必ず大黒柱に疵を附けるな」と道場を暴れ廻つて居ります、サアこのことを門弟の一人が、足輕頭上田重兵衛へ注進に及びましたから、上田重兵衛は吃驚いたし、取るものも取敢ず一散に駈け着けまして重「サア早川、秋山、木戸何事をいたす、場所柄をも顧みず不埒を働くとは何事だ、控え居れい」と大音に呼立てました、三人はこの聲に驚いて振向つて見ますと組頭の上田重兵衛でございませうから團「こりやア仕方がない、組頭の眼に着いては、此方の言條も立つから止ることにしやう」と三人が重兵衛の前へ出て参り三人「これはお組頭でござ

いますか、御苦勞さまに存じます」と自ら兩手を後方へ廻し、尋常に繩を受けました重「エ、太田先生、誠に何うも私の組下が、無禮をいたしました段は、重々恐れ入ります、これからお奉行へ願ひ出まして成敗を致しますから、何うか貴方さまには御苦勞ではござりませんが、一應奉行所までお出での程を願ひます」重「イヤ上田、私は奉行所へ行くべき筈はない、彼等三人が拙者が道場を破らうといふので、斯く暴れ込んだのであるから……」上「イヤ夫れは爾ういふ譯には参りませぬ、假令足輕にしても太守の家來でございませうから、貴方がこの場で斬棄てるという道理はございませぬ」重「サア要らざることを申すな、出来る出来ないは放つて置け」上「これは怪しからぬことを仰せられます」重「ナニツ」といふなり無理非道にも門弟に指揮をいたし、上田重兵衛を門前に引摺り出し、表の戸を閉めてしまひました。重兵衛は門前で手をドン／＼と叩きながら、頻りに何か申して居ります、此方は太田七郎左衛門が早川、秋山、城戸の三人、繩付を庭前に蹴落し、七「サア其方等は能くも道場を暴したナ、サアこれからは、この太田七郎左衛門の技倆を見せてやるから観念いたせ……」ヤア門弟衆、この三人の者を松の樹へ逆吊しになさい」重「ハッ」と應へて門弟共が右三人を松の樹へ逆吊しに下げました、三人「アッ痛い……」と三人は七轉八倒と云ひたいが、縛られてゐるから只掻掻くばかりで苦んでゐる、七郎左衛門はニヤリと笑ひ七「ウム苦しいか、ハ

ハ、まだこれからだ。：オイ門弟衆、彼等を打つて、手ち据ゑなさい。〇ハ、ツ』と門弟が弓の折を持つて参り、古壘を打つやうにビュー〜と擲りますから、三人は三人アツおのれ：サア殺せい』と呼ばつて居りましたが、最う殺せいといふ聲すらも揚げられませぬ、只だヒーヒーと計り唸つて居りまするは哀れとも殘虐とも申し様がございませぬ、此方は門前を退拂はれたる上田重兵衛は、内方を睨んで、最も口惜氣に眺めて居りましたが、其中ヒー〜といふ聲が聞えるから、重兵衛も氣が氣でございませぬ、一目散に右三人の宅へ駈着け、女房に事の次第を一々物語りに及びました、三人の女房はこれを聞くなり狂氣のごとくに相成りまして。〇これといふも、皆な松本さんが要らざることを教へて下さつた計りに、此様なことになつた』といふので、松本源助へ不足をいはうと三人の女房がドン〜駈着けまして泣立てながら、右の次第を訴へました、これを聞きました源助先生は心の中で『ウームヨシ、何うやら我が計略に乗つて來たわい、これから太田の道場へ乗込んで行つて伯父の敵を討つて呉れよう』と心の中で勇み悦び、源『いやお三方の御内儀、決して御心配は要りませぬ、拙者これより太田の道場へ乗込んで、今に仇討をいたして進めるから、御安心あつてお三方のお歸りを待つて居らつしやい』といひ棄て、斑鳩平次の松本源助は、勇氣凛凛と我家を飛出しまして、一目散に駈着けましたのは言はずも知れた太田七郎左衛門の道場

其裏手へ歩つて來ましたが堅く門が締めてございます、門外に佇んで中の様子を聞いて居りますると、三人の者がヒーツといふ悲鳴を揚げる聲が、腸を千裂るごがとく、聞取られます、ソコで平次は、エイといふなり扉へ手を掛けるが疾いか内方へ飛下りました、見ると何方の庭の松の樹へ三人の者が逆に吊下げられて、ビユ〜と打たれて居りますから、韋駄天のごとく走り着、今しも弓の折を振上げて打下さうとする門弟の肩口グイと掴んだかと思ふと二三間投附けました、ハツと驚く太田七郎左衛門大劍片手に突立ち上りセ『ヤア何奴なるぞ無禮千萬、拙者の邸宅へ無言で亂入する而已ならず、門弟を投附けるとは何事だ、誰が免して這入つて参つた』と奴鳴り附けました、此方は源助少しも恐るゝ氣色なく源『恐れながら誰もお免しにはなりません、何うも指南番とも呼ばれる貴方の成され方が餘りとして亂暴見兼ねまして、不作法にも無斷で亂入致しました』セ『ナニツ、拙者の所業が悪いとは何だ源』さればでござります、その三人の者は何がために斯様な慘酷なことをなされますか、この儀承はりたう存じます』セ『ウム、この三人の者を斯う成敗いたすのは、斯様々々の次第で生命を貰ひ受ける約束だ、よつて拙者は成敗いたすのである』源『ハ、ア左様でござりますか何うも指南番たる大先生にしては甚だ御小量のやうに考へます』セ『何が小量だ』源『左様でござります、貴方は七百五十石の御指南番、此方は僅か五石二人扶持の足輕ではござりませぬ

か、シテ見れば貴方とお立合いたして、勝たれる道理のあらう筈がござりませぬ、貴方がお勝になるのは、三尺の童子でも分つて居ること、こりやア至當でござります、左すれば三人の者に對し生兵法は大概の基である、僅かこれしきの技倆で、餘り高慢をする者ではないぞ以後を慎めと御意見下されてこそ、御指南番たる先生のお價值があると申すもの、それに取るに足らざる足輕を對手に、生命を賭けての約束であるからといつて、斯う御成敗なされるといふは御少量ではござりませぬか、殊に假令身分の輕き足輕とは申せ、同じく太守に仕る奉公の身分、素破戰場といふ時には三人とても太守のおために相成りませう、ア、アこれは何でござりますナ、詰り三人を生かしておいては、將來我がために不利益であると、思召しこの場においてお殺しなされる御了簡と見えますな」七「ウムイヤ全く左様ではない」源「然らば何故あつて、斯く手酷いことをなされます、餘りといへば亂暴ではござりませぬか、些とお慎みなさい」と一本叱められた太田七郎左衛門、顔色は朱のごとくに相成り七「ヤア汝は何用あつて参つたのだ」源「左様でござります、三人の者の御助命が願ひたさに罷出でました」七「ウム…ヨシ其方の願によつて、随分三人の者は助けて遣はす、併しその儘歸すことは出来ない、元來立合の上から出来たことであるから、汝と拙者が立合をいたし、拙者を負かしたら右三人の者を連れて参れ」源「ハ、ツ有難う存じます、失禮ながら私も右三人の者へ

手を取つて指南致しましたる松本源助でござります、如何にもお立合ひ仕りませう、サア御準備を下されたい」といはれて、驚いたのは太田七郎左衛門でござります、見たところ、豈夫この人が三人の師匠とは思ひませぬので、七郎左衛門の驚いたのも尤もでござります、實は早川團平の技倆ですら舌を捲いて居る七郎左衛門、その師匠とあつては何うして敵ふべき、心中ではア、失策つた、要らざることを申したわいと思ひました、今となつては取消すといふ譯には参りませぬから、俄に顔色も青く相成り、言葉も詰つてしまひましたが、さて致方もござりませぬから七「ヤア松本源助とやら、拙者は鐵砲で参るから左様心得い、」斯ういつたら源助の方から謝絶るかと思ひましたが、何うして駒木根八流の奥儀を究めましたる斑鳩平次、ピクともいたしませず源「如何にも承知仕りました、併し實彈でござりますか」七「如何にも彈丸を籠めて参るのだ、加之一ツ彈丸だぞ」源「イヤ委細承知仕りました、併し貴方が實彈とあれば、私は眞劍をもつてお對手仕りますから、左様御心得下さい、且前以てお断り申して置きますのは、私は他人の生命は望みませぬが、何分眞劍でござりますから勢ひの餘り萬一貴方の御急所に中りまして、お生命の危いこともないとは定められませぬ、依てその節は一言の苦情がないといふ、一通のお書付を願ひたうござります」七「ム、承知いたした」と七郎左衛門で見ますると、彼れ如何に劍道に達して居るとも、豈夫銃彈は避けら

れない、今は生命を奪つて遣ると思ひましたので、快よく一通認めまして松本源助へ渡しました、源助の平次は心の中で、ヨシこれさへあれば大丈夫、このときこそ伯父の敵を討つて遣らうと、悦び勇んでチャンと準備に及びました、此方は庭に吊下げられて居る早川、秋山城戸の三人が心の中で、オヤ／＼酷いことになつて来たぞ、我々を助けて貰ふは有難いが、先方は鐵砲ちやア如何な先生でも敵ふまい、何うして先生は彈丸を避けられるだらう、萬一一發の下に殺られてしまつたら、我々共も生命が助からぬ、ア、困つたことになつたと、三人が心配をいたして居りますると、此方の太田七郎左衛門は、種ヶ島の短銃に二ツ彈丸を籠めまして、庭前へ出て参り、双方間も僅か三間許り隔て、七郎左衛門は筒口を源助の水月に當て、チャンと狙を定めて居ります、此方は平次の源助先生、元來駒木根八流の中でも第一火術、第二馬術、第三劍術としてございます、その第一の火術でございませうから、無論第一にその奥儀を究めて居る人でございます、斯う來れば斯うして避けるといふことは、チャンと胸に分つて居ると見えまして一刀スラリと引抜いて筒口へ正眼に構へ着けました、流石は指南番となるくらゐの技倆である七郎左衛門、源助先生の構法を見まして、心の中でこりやア不可ぬと思ひましたから、其處は姦智に長けたる奴でございませう、持つて居た鐵砲を大地にガラリ投げ棄てまして、横手を拍つて感心の體をいたしてセ「ア、松本源助とやら

この太田七郎左衛門感心をいたした、足輕ごとき者にも汝がごとき達者なものがあるとは、アア何うも實に天晴の技倆、勿論汝を討留める隙は幾らもあつたなれどもこれ程の汝を討留めるは誠に惜き次第……コリヤ三人の者能く承はれ、習ふ汝等よりも教ゆる松本とやらの天晴なる技倆に免じて、生命だけは助けて遣はす……ソレ門弟衆、彼等三名の繩目を免してお遣りなされ」といひ捨て置いて、奥の室指して行かうと致しますから、松本源助は茫氣に奪られ、オヤ／＼酷いことをしやがる、このときを外して、またと好い機會があらうぞや、汝逃がしてなるものかと思ひまして、行かうとする七郎左衛門の袖を確乎と捕へ「源「恐れながら先生、口外をなされた事は、豈夫二言はござりませう、只今まで何と仰せられました、實彈の鐵砲を以て立合ふと仰しやつた、まだその舌の根の乾かぬうちに、お廢めにならうといふは如何なる理由でござります、サア何うかお立合下さい」と詰寄りました、すると七郎左衛門はセ「ム、如何にも望みに依て立合つて遣らう」源「有難う存じます」セ「併し今回は互に怪我でもあつては相成らぬから、木刀を以て立合を致すことにしやう」源「私は何れにても宜しうござります」と互に木刀を持つて以前の處へ出て参りまして、木刀を山形にいたしましてセ「サア其方から退け」源「先生からお退き下さい」と争ひをいたして、双方エイヤツと立ち別れましたが、七郎左衛門は源助に目を着けて見ますると、何うしてなか／＼立派